

博士學位論文

九州北部地方における
地域言語の動態に関する研究

徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻

塩川 奈々美

令和4年1月

目次

初出一覧

v

I. 序論

第1章 九州方言における言語地理学的研究の現状と課題	3
1.1 言語地理学的研究の現状	4
1.2 九州方言研究における言語地理学的研究の現状と課題	6
1.3 本研究の位置づけ	8
1.3.1 「九州北部地方」の三県について	8
1.3.2 長崎街道について	9
1.3.3 方言区画とその特徴	10
1.3.4 本研究の位置づけ	12
第2章 本論文の目的と研究方法	15
2.1 本論文の目的	15
2.1.1 グロットグラム調査について	16
2.1.2 言語地理学調査における回答の安定性	17
2.1.2.1 「全員調査」による検証 (W・A・グロータース 1976)	18
2.1.2.2 「複数回調査」による検証 (徳川 1993)	19
2.1.2.3 言語地理学調査における回答の安定性のまとめ	20
2.2 調査概要	21
2.2.1 九州北部地方におけるグロットグラム調査	21
2.2.2 九州地方を対象とした通信調査	30
2.2.3 自然傍受法による談話資料	31

II. 本論

第3章 九州北部地域における方言の動態	35
3.1 本章の目的	35
3.2 分析対象データ	35
3.3 九州北部方言の地理的・世代的分布の概観	36
(語彙項目に関する調査結果)	
3.3.1 「ものもらい」	36

3.3.2	「神主」と「お坊さん」	40
3.3.3	「かさぶた」「柿のへた」「亀の甲羅」	43
3.3.3.1	「かさぶた」	44
3.3.3.2	「柿のへた」	46
3.3.3.3	「亀の甲羅」と「蟹の甲羅」	47
3.3.3.4	「かさぶた」「柿のへた」「亀の甲羅」まとめ	50
3.4	文法項目に関する調査結果	51
3.4.1	「塩味が濃い」と「塩味が薄い」	51
3.4.2	表現形式の分布	51
3.4.3	形容詞イ語尾とカ語尾の地理的分布	57
3.4.4	「塩味が濃い」と「塩味が薄い」まとめ	58
3.5	本章の結論	60

第4章 九州地方における待遇表現の分布と変遷 63

4.1	本章の目的	63
4.2	分析対象データ	63
4.3	九州本島部における存在動詞「いる」と待遇表現	65
4.3.1	『方言文法全国地図』にみる存在動詞「いる」の諸形式	65
4.3.2	九州調査にみる存在動詞「いる」の諸形式	69
4.4	本章の結論	73

第5章 方言敬語の運用意識 75

5.1	本章の目的	75
5.2	分析対象	76
5.3	調査結果と考察	77
5.3.1	地域の言葉に対する認識	77
5.3.2	方言と「共通語」に対する言語印象	81
5.3.3	敬意の対象に関する意識	88
5.3.3.1	敬語使用の地域差	88
5.3.3.2	敬語使用の世代差	94
5.4	言語意識に関するまとめ	97
5.5	シャル敬語の運用と敬語意識	97
5.5.1	分析対象	97
5.5.1.1	九州北部地方で行われるシャル敬語	97
5.5.1.2	シャル敬語に関する先行研究	99
5.5.1.3	分析対象データ	102

5.5.2	シャル敬語の運用	102
5.5.2.1	アンケート調査に基づくシャル敬語	102
5.5.2.2	シャル敬語に対する意識	104
5.6	談話資料にみるシャル敬語	108
5.7	シャル敬語の運用と敬語意識まとめ	111
第6章 素材待遇形式の振る舞いにみる方言敬語運用の実態と動態		113
6.1	本章の目的	113
6.2	シャル敬語に関する先行研究	115
6.3	グロットグラム調査の概要	116
6.3.1	グロットグラム調査	116
6.3.2	シャル敬語に関する調査項目	118
6.4	調査結果および考察	119
6.4.1	シャル敬語の地域差および世代差	119
6.4.2	シャル敬語の振る舞いとその受容度	124
6.5	本章の結論	126
第7章 方言敬語の分布の特異性		129
7.1	本章の目的	129
7.2	グロットグラム調査と方言区画	130
7.2.1	先行研究における九州北部地方の方言区画	130
7.2.2	長崎街道と方言区画	131
7.3	研究方法	133
7.3.1	分析対象	133
7.3.2	分析方法	133
7.3.2.1	分析データ	133
7.3.2.2	数量化Ⅲ類	134
7.4	研究結果	135
7.4.1	語彙	135
7.4.2	文法	137
7.4.3	敬語法	138
7.5	本章の結論と課題	140
7.5.1	数量化Ⅲ類の結果に関する考察	140
7.5.2	今後の課題	142

Ⅲ. 結論

第 8 章 九州北部地域における方言の動態	147
8.1 本論のまとめ	147
8.2 今後の研究課題及び展望	148
参考文献・参考URL一覧	149
謝辞	155

初出一覧

本論文中の以下に示す各章は、それぞれの論文または発表内容をもとに加筆修正を加えたものである。

第4章 九州地方における待遇表現の分布と変遷

塩川奈々美・清水勇吉・岸江信介 (2014) 「存在動詞「いる」「おる」にみる九州本島部における待遇表現」『言語文化研究』22 巻, pp. 165-175, 徳島大学総合科学部【学術論文・査読無】

第5章 方言敬語の運用意識

塩川奈々美 (2015) 「談話資料にみる飯塚市方言のシャル敬語」第 157 回変異理論研究会, 於大阪大学豊中キャンパス (大阪府豊中市)【発表・査読無】

塩川奈々美 (2016) 「九州北部地域におけるシャル敬語の地域差と世代差」2016 年度変異理論研究会口頭発表, 於関西大学セミナーハウス「彦根荘」(滋賀県彦根市)【発表・査読無】

第6章 素材待遇形式の振る舞いにみる方言敬語運用の実態と動態

塩川奈々美 (2016) 「九州北部地域におけるシャル敬語の地理的・世代的分布」日本方言研究会第 103 回研究発表会, 於東北文教大学 (山形県山形市)【発表・査読有】

塩川奈々美 (2017) 「シャル敬語の地理的・世代的分布—長崎街道グロットグラム調査を通じて—」日本方言研究会編『方言の研究 3』pp. 291-315, ひつじ書房【学術論文・査読有】

第7章 方言敬語の分布の特異性

塩川奈々美 (2017) 「計量的手法を用いた九州北部方言区画の再考」日韓次世代学術フォーラム第 14 回国際学術フォーラム口頭発表, 於亜洲大学校(大韓民国, 水原市)【発表・査読有】

塩川奈々美 (2018) 「計量的手法を用いた九州北部方言区画の再考」『次世代人文社会研究』第 13 号, pp. 157-175, 韓日次世代学術 FORUM【学術論文・査読有】

I. 序論

第1章

九州方言における言語地理学的研究の現状と課題

本研究は、九州北部地方における地域言語の動態をテーマとしたものである。ここで述べる「九州北部地方」とは、九州地方における福岡県、佐賀県、長崎県を指し示し、当該地域における方言の動態を明らかにすることを目的としている。

地域方言の特徴は様々な要因を受けて伝播、または変化する。その変容は、人々のもつ表現欲求や意識的・無意識的に働く指向性といった内的な要因と、このような人々の性質を促進または抑圧する外的な要因によって生じるものである（陣内1996）。

本章では、方言研究における言語地理学的研究の現状を確認するとともに、これまでの九州方言に関する言語地理学的研究の成果を整理する。さらに九州方言における言語地理学的研究の課題点を指摘し、今後どのような研究が求められているのかについて検討する。その上で、本研究が持つ意義について述べる。

第1節および第2節では、九州地方における言語地理学の現状ならびに課題点について論じた。九州地方における現在の言語地理学研究の現状と課題を以下のように整理する。

1.1 言語地理学的研究の現状

方言の個々の事象について地理的分布を調べ、その分布を地図上に描き、方言分布の成立過程やその過程で生じる言語変化に係る要因について究明せんとする言語地理学的研究は1960年代から1980年代に隆盛を極めた。

日本において最初の言語地理学的研究の成果とされるのは、ドイツで言語学を学んだ上田萬年を代表とする国語調査委員会が調査を企画してまとめた『音韻分布図』(1905, 図1-1), 『口語法分布図』(1906, 図1-2)である。この国語調査委員会が実施した「音韻口語法取調」は明治政府が近代国家を目指す上で日本国における標準語の制定を目指した取り組みであり、2回にわたって実施されたことが知られているⁱ。全国の自治体を対象として行われたこれらの調査結果が分布図としてまとめられたことにより、当時の日本における方言の多様さ、地域差が明るみとなった。いわゆる「東西方言境界線」が発見され、方言学史上の偉大な功績として評価され、これ以降、日本全国における方言の地域差に関する研究は大いに発展することとなる。中でも柳田國男によって1930年に発表された「方言圏論」ⁱⁱは方言伝播の基本的な原則を提唱したものであり、この原則に基づく「隣接分布の原則」「周辺分布の原則」といった方言伝播のモデルが引き継がれ(大西2013)、その後の言語地理学的研究の発展の基盤となった。

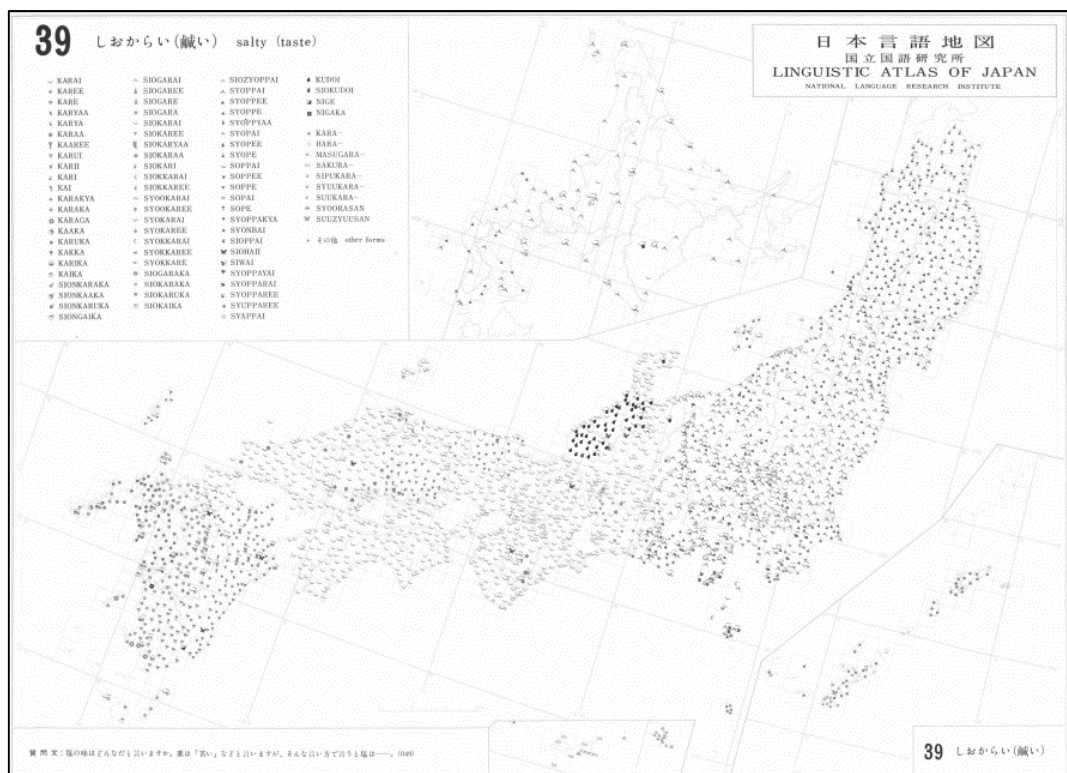


1-1 『音韻分布図』(ガ行鼻音 NG 分布図) (左)

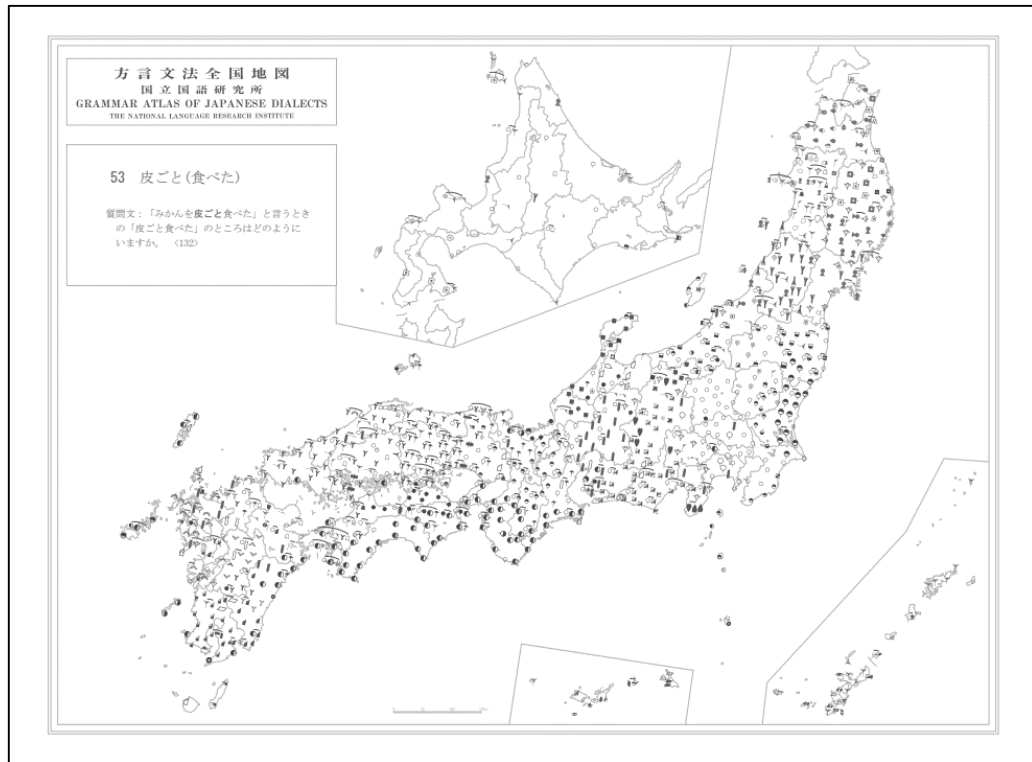
図 1-2 『口語法分布図』(「ぬ」「ない」等ノ分布図) (右)

日本語方言に関する全国規模を調査した言語地理学的研究の成果として、国立国語研究所編（1966-1974）『日本言語地図』（第1集-第6集、各巻50図計300図）ならびに同編（1989-2006）『方言文法全国地図』（第1集-第6集、350図）が挙げられる。現代日本標準語の成立過程および各種方言語形の歴史を明らかにすることを目指し作成されたこれらの言語地図は、全国各地の方言についてその地理的分布を一望することができる日本語方言の大規模な基礎資料である（図1-3、図1-4）。

国立国語研究所を中心に柴田武（1969）『言語地理学の方法』、W. A. グロータース（1976）『日本の方言地理学のために』、徳川宗賢（1993）『方言地理学の展開』、馬瀬良雄（1992）『言語地理学的研究』らによって推し進められてきた言語地理学的研究は、全国各地の方言研究者によって研究成果となる言語地図（集）が数多く作成され、日本語の方言研究界における研究手法として一世を風靡した。しかし、その後、真田（1990）によって指摘されたように、研究動向が地理的研究から社会言語学研究へ移行したことにより、1990年以降、言語地理学的研究そのものが後退傾向にあるといえよう。



1-3 『日本言語地図』第1集「39 しおからい（鹹い）」の図



1-4 『方言文法全国地図』第1集「53 皮ごと（食べた）」の図

1.2 九州方言研究における言語地理学的研究の現状と課題

ことばの共通語化や伝統方言の消失が進行する今、九州地方は今日でも古い日本語のかたちを留める地域の一つである（原田・黒木・福島ほか1982）。伝統方言に活力あるこの地では、九州方言に関する研究が盛んに行われてきた。九州方言研究を巡る方言の史的変遷については奥村編（1989）に詳しい。

九州方言の研究における言語地理学的研究を巡っては、その規模も大小様々である。全国的な規模の言語地図として第1節に述べた国語調査委員会による『音韻分布図』（1905）、『口語法分布図』（1906）、国立国語研究所による『日本言語地図』（1966-1974）や『方言文法全国地図』（1989-2006）などがあり、こうした広域の言語地図の作成によって九州方言の当時の状況を俯瞰的に眺めることができる。また、全国的な言語地図から詳細を追究するように、局所的な言語地図も数多く作成されている。藤原編著（1974）『瀬戸内言語図巻』（上巻・下巻）は福岡県や大分県といった九州地方の北部に位置する地域の方言と中国・四国・近畿方言との関連性を探るものであり、当時の世代差についても把握することができるⁱⁱⁱ。また、福岡県を中心とした県内外に関する詳細な言語地図は岡野信子によって報告されており（岡野編1984・1987・1989）、山口県や佐賀県方言との関係性を視野に入れ

た福岡県方言について言語地理学的視点から報告，考察している。

また，九州方言に関する総合的研究の大果として九州方言学会（1969）（以下、『九方基』）がある。『九方基』は当時の九州方言の研究者らによって，九州地方全域（長崎・熊本・鹿児島）の島嶼部を含む）で延べ170地点において，老年層と若年層を対象に面接調査を実施した言語地理学的かつ記述的な研究であり，その当時の九州方言研究の集大成と言っても過言ではない。文法・語彙・音韻・アクセントに関する212項目についての広域調査が実施され，その調査結果を言語地図に描き示し，解釈をおこなうだけでなく，厳選された数地点において長期の合宿型集中調査と史的文献調査を敢行し，その地域における方言体系に関する報告を成し遂げている。

しかし，1969年の『九方基』刊行以降，九州地方全域を扱った言語地理学的研究と，詳細な体系把握を目的とする記述的研究の両方の側面からアプローチするような大規模な総合的調査研究は管見の限り見られない。さらに，『九方基』自体も地理的かつ体系的に九州方言を余すところなく報告しているかといえども必ずしもそうではない。厳密には多くの課題を残したままとなっており，調査自体は完了したものの，分析が不十分のまま，調査結果だけが示されている項目も多々含まれている。『基礎的研究』とした名称には，今後，後続の研究者らによる，さらなる九州方言研究の深化と進展が望まれるといった期待が託されているとみることができる。

言語地理学的研究が後退しつつある中，近年では清水編（2015）『九州言語地図：簡易版』，大西編（2016）『新日本言語地図』など，1960年代から1980年代にかけて報告された言語地理学的研究の成果を見直さんとする動きがあり，九州方言に係る言語地理学的かつ広域な成果が追調査の実施によって報告されている。しかしながら，これら成果の多くは言語地図集という資料の形に留まるものも多く，地理的分布の解明からさらに発展させた形での方言の動態に関する分析が待ち望まれている現状がある。

こうした中，大西（2017）や松田（2017）によって九州地方における方言の動態が柳田國男の「方言周圏論」に沿わない様相を呈していることが指摘されるなど，新規性を伴う知見が報告されており，言語地理学的研究が隆盛した時代から約半世紀が経とうとしている現代において言語地理学的研究を推進・進展させることが日本語の諸方言の諸相を捉える上で極めて重要な意味を持つものと考えられる。

1.3 本研究の位置づけ

1.3.1 「九州北部地方」の三県について

本節では本研究で調査対象地域となった北部九州の三県について解説する。

本研究において調査対象地域となった「九州北部地方」は九州地方の福岡県，佐賀県，長崎県を指す。これらの地域は東条編（1954）による方言区画に従うと九州方言のなかの肥筑方言域に属する地域である。

〈福岡県〉

福岡県は九州地方の北部に位置する人口 513 万 5,214 人（令和 2 年度国勢調査結果）の県で，28 市 30 町 2 村から成る。関門海峡を隔てた山口県と関門橋によって繋がっており，古くから本州と九州を結ぶ交通の要衝を担ってきた。地勢は自然に恵まれている。県北部は玄界灘，響灘，周防灘，県南西部の筑後市は有明海に面する。筑紫山地，筑肥山地，耳納山地といった山地や，筑後川，遠賀川といった川があり，川沿いには筑紫平野や直方平野などが広がっている。福岡県の平成 25 年度の年平均気温は 17.1℃，年間降水量は 1,801.5mm であり，概ね温暖で適度な雨量がある地域である。

〈佐賀県〉

佐賀県は九州地方の北部にあり，人口は 81 万 2,013 人（令和 2 年度国勢調査結果），10 市 10 町から構成される県である。佐賀県は唐津・伊万里・有田に代表される陶磁器の町として有名だが，このほかにも吉野ヶ里遺跡（佐賀県神埼郡）や菜畑遺跡（佐賀県唐津市）など古代の遺跡が多く残る地域であることから，古くからの歴史と文化を今に伝える地域である。地勢をみると県下の多くを背振・天山山地や多良岳山地などたくさんの山々によって占められていることがわかる。筑紫平野のうちの筑後川より西部を指す佐賀平野は有明海に面している。年間の平均気温が 16℃前後で，比較的温暖な地域である。年間降水量は，県東部の背振山から西部の国見山にかけての山間の地域では 1 年間に 2500mm となるが，海側の地域（玄界灘に面する地域や有明海側の地域）は 1 年間に 1800mm 程度となるなど，地域によって差がある。

〈長崎県〉

長崎県は九州地方の北西部に位置し，人口は 131 万 3,103 人（令和 2 年度国勢調査結果），13 市 8 町から成る県である。平坦な土地が少なく，山地や丘陵によって土地の起伏が激しい。また対馬や五島列島など，数々の離島から成る長崎県の海岸線はとても複雑である。県の総面積の約半分は「しま」であるとされ，たくさんの半島や岬，入り江によって形成されている。佐賀県と隣接するほか，島原半島は有明海を隔てて福岡県や熊本県とも接している。有明海

や島原湾，天草灘といった海のほかに，長崎県東部に食い込むような形で大村湾が位置している。長崎県における年間平均気温は 17℃前後で，年間降水量は 1898mm である。

関家（2003）の「肥前の地勢は有明海に面した佐賀・白石平野と諫早平野を除けば，大方が山地である。山地は背振・天山山地，杵島・松浦丘陵盆地，多良岳山地，長崎・西彼杵低山地，雲仙山地の五つに分けることができる。」という記述にもあるように，佐賀県から長崎県にかけては険しい山々が連なっている。また佐賀県から福岡県にかけての地形も緩やかではなく，福岡県から長崎県まで続く筑紫山地が福岡県西部から中央部にかけて広がっている。このような地理的特性をもつ地域に整備された長崎街道は，長崎一福岡間を往来する人たちにとって重要な交通路として機能していたことがうかがえる。

1.3.2 長崎街道について

本研究でグロットグラム調査を実施した地域は長崎街道の沿いの旧宿場町 25 地点である。長崎街道は江戸時代に整備された脇街道の一つで，鎖国政策下唯一外国との貿易が認められていた長崎から九州と本州の玄関口である小倉までの約 228km の道のりである。この道のりは当時の豊前国，筑前国，肥前国という三国を横断するものであった。詳細を示すと，小倉・黒崎・木屋瀬・飯塚・内野・山家・原田の 6 宿駅は筑前黒田領，田代は肥前対馬領，轟木より中原・神埼・境原・佐賀・牛津・小田・成瀬・塩田・嬉野までの 10 宿駅は肥前佐賀領，彼杵・松原・大村の 3 宿は肥前大村領，諫早・矢上は肥前佐賀領，日見と長崎は幕府領であったとされる（関家 2003，内野宿長崎屋資料「長崎街道」）。

長崎街道には小田一嬉野間で 2 通りのコースがあり，更に小田から鹿島（佐賀県鹿島市）を經由して永昌（長崎県諫早市）に至るコースもある。関家（2003）によると，成瀬・塩田を經由するコースは「塩田通り」と呼ばれる長崎街道の本来のコースで，享保十三（一七二八）年ごろまではこのコースが使われていた。しかし，塩田一嬉野間の塩田川がしばしば洪水に見舞われるために，延享二（一七四五）年以降は小田一北方一塚崎を經由して嬉野一彼杵へと出る塚崎ルートに変更されたようである。」という。

長崎街道は海外文化の玄関口である長崎から江戸へとつながる道として，大変重宝されたようである。「江戸時代この長崎街道を往来した人は長崎奉行，日田代官，参勤交代の諸大名，オランダ商館員など」（内野宿長崎屋資料「長崎街道」とされ，日本各地に外国の文化を伝えた。また肥前国（長崎・佐賀）は軍事的な要所でもあったため，幕府からの命を受けた黒田藩・鍋島藩が隔年で長崎と藩領を往来

していたとされる（関家 2003）。

1.3.3 方言区画とその特徴

日本全国には各地固有のことば（方言）が存在する。東条操氏はこれらの方言を語法や語形などの方言的特徴に基づき、次のように系統立てて区分している。

東部方言	{	北海道方言、東北方言、関東方言 東海東山方言、八丈島方言
西部方言	{	北陸方言、近畿方言 中国方言、雲伯方言、四国方言
九州方言	{	豊日方言 肥筑方言、薩隅方言

1954, p32)

この東条氏の方言区画論に従うならば、九州地方は九州方言に属する地域である。また、本研究の調査対象地域となった九州北部地方の三県は、いずれも九州方言のうちの肥筑方言に属する地域である（図 1-5）。

肥筑方言域には九州地方の人口の約半数が住んでおり、最も九州方言らしい特徴をもつ地域であると言われている（上村 1973・秋山 1981）。ただし、福岡県に関しては、県東部が大分・宮崎と方言的特徴が共通する豊日方言に分類される。具体的には旧藩区画における豊前国に属した地域がこれに該当する。

肥筑方言は九州西部方言とも呼ばれ、旧藩区画でいうところの肥前（佐賀県・長崎県）と肥後（熊本県）、筑前・筑後（福岡県）が分類される。長崎県の五島列島や熊本県の天草も含まれる。

上村（1973）では「ただし福岡県の西半分の筑前地方の方言は、筑後・肥前肥後の典型的九州語と対立する点が少なくない。」とも言われており、方言の特徴も地方によって異なることがわかる。平山輝男編者代表の『日本のことばシリーズ』では、福岡県、佐賀県、長崎県における県下の方言区画図が示されている。その統合図に本研究の調査地点をあわせ作図した（図 1-6）。本来、前述の書籍に掲載された各県の方言区画図は、それぞれの作図者が異なる視点と目的から作図したものであるため、安易にこのような統合をおこなうべきではないが、三県の方言区画図を一枚ずつ提示するよりも、視覚的な認識のしやすさを優先した。福岡県域には二種類の方言区画線が挿入されているが、細やかな点線は、執筆担当者である陣内氏が提案する新たな福岡県下方言区画線である。

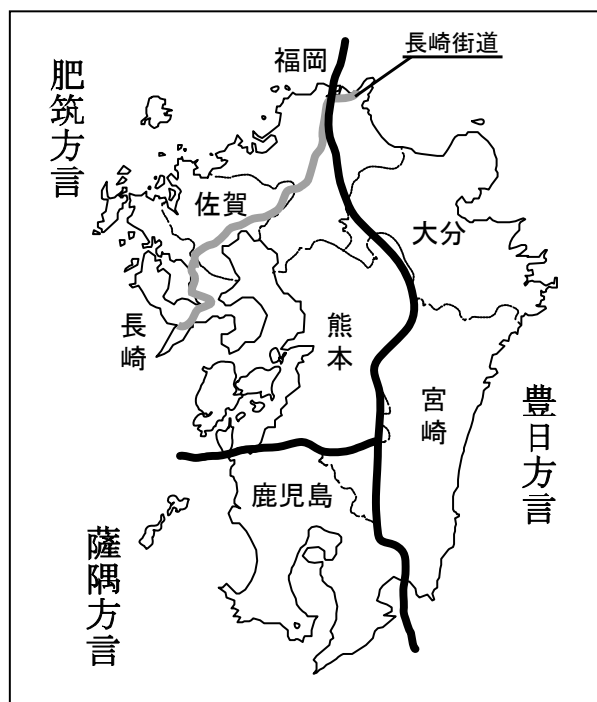


图 1-5 九州方言区画と長崎街道（陣内 1997 より作図）

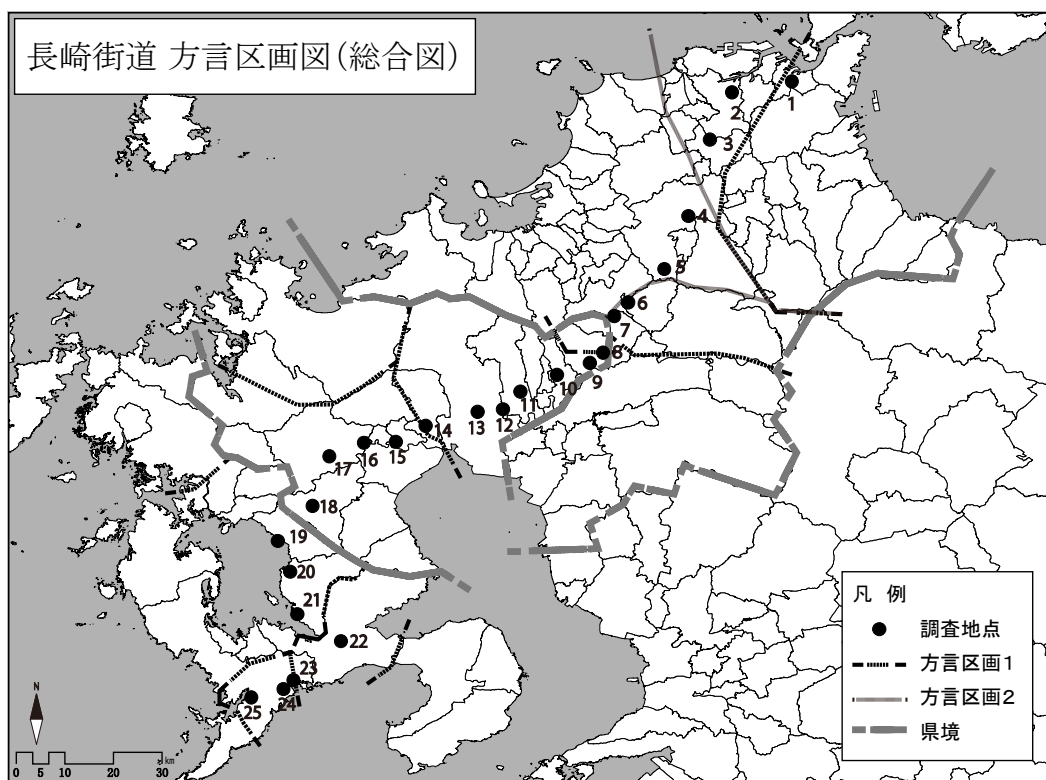


图 1-6 北部九州の方言区画図（総合図）

これらの方言区画は、言葉の分布域によって判断されるものだが、その分布は地理的条件や昔の行政区画、地域の経済的発達と社会的立場などが影響することが多い。図 1-6 で方言区画線 1 が引かれる地域の多くは旧藩区画に合致し、旧藩区画についても、古くは国があった地域であり、その国境として山や川が基準となっていることが多いため自然と地理的条件と人口と言葉の分布が関係することになる。

近年は、道路交通網の発達や、インターネットやマスメディアの発達などにより人口移動や情報共有が容易となったことで、地理的条件が人（＝言葉）の移動を妨げる力はひと昔前よりも弱くなったのではないとも考えられる。しかしながら、九州地方の方言分布は、一部の方言語彙・文法について 1960 年代に実施された『九方基』の調査からさほど変化していないという結果も示されており（清水編 2015）、根強い方言形の使用が確認されていることから、その実態の解明には調査を重ねる必要があるだろう。

また、方言区画が異なるからといって、区画の異なる地域で全く違う言葉が使われるというわけではない。東条（1949）では以下の記述がある。

世間には方言について次のような誤解をもっている人が少なくない。即ち、その人たちは A 方言と B 方言と隣接している場合でも、両方言の言語現象は全く別物で、例えば俚言の大部分はその境界線の左右で相違すると想像する。これはかなり困った誤解である。若し、境界線で A 方言と B 方言との俚言が悉く変わるなら、それは既に方言の関係とは言いにくいものである。方言の関係は両者に共通するものがありながら、一部に相違点があればこそ成立するのである。（中略）方言の相違は言語体系の相違である。これを組成するものに相当の相違があるときに方言の感じが起る。

（東条 1949, p. 13）

方言区画はあくまで特定の項目（アクセントや語彙、文法など）に着目して総合的に分析した結果引かれるものであって、その全てにおいて共通性を持たない全く異なる言葉が分布していることを表すわけではないという点は留意されたい。

1.3.4 本研究の位置づけ

『九方基』が目指したものは、九州方言の地理的変異を明らかにすることと同時に九州地方における主要地域の方言体系を明らかにすることであった。研究報告には、言語地理学的研究の成果とともに、記述的研究の成果も報告されている。例えば指宿市山川岡児ケ水の調査結果^{iv}の例は、『九方基』における記述的研究の成果である。

これまでの九州方言の研究は、当然『九方基』のみではないが、一時代の集大成として『九方基』が目指したものを継承し、今後展開する調査研究に活かすことが肝要であると考えられる。

このような研究背景のもと、本研究は九州北部地方に位置する旧街道の一つ「長崎街道」をフィールドとし、当該地域を巡る方言の動態に迫った。長崎街道上の調査地点一覧は第2章に示す。

上述の通り、本研究で調査対象地域とした九州北部地方の三県は伝統的な方言の特徴が色濃く維持されている地域だが、一方で周辺地域との繋がりから共通語や西日本を中心とした本州からのことばの影響を受けており、日常的に言語接触が起こりうる環境が整っている地域でもある。肥筑方言としてまとめられてきた地域の中にどのような地域差が存するのかに注目する。また、調査対象の基盤となった長崎街道は江戸時代に整備された脇街道として九州全域と本州とを繋ぎ、歴史的に人々の往来を支えてきた街道である。今現在は国道として本州の玄関口となる山口県下関市に続く北部九州の主要な道路であり、北部九州の人口流動の基盤となる幹線道路として今なおその役割を果たしており、本州からの言葉の影響を導く道となっている。

本研究では、言語地理学的研究の立場を取りつつ、グロットグラム調査を中心とした社会言語学的研究を展開することにより、九州北部地方における方言の動態を捉え、地理的・社会的な観点からことばの様相と変異に迫る。

ⁱ 第一次調査は1903年（明治36年）9月に『音韻口語法取調ニ関スル事項』（音韻29条・口語法38条）として実施され、各府県からの報告書をもとに『音韻分布図』『音韻調査報告書』（1905（明治38年））、『口語法調査報告書』（1906（明治39年））、『口語法分布図』（1907（明治40年））が刊行された（竹田2015）。第二次調査は1908（明治41年）に『音韻取調ニ関スル事項』（41条）および『口語法取調ニ関スル事項』（90条）とその付録「東京敬語法略表」により実施され、各府県からの報告書をもとに分布図約550枚と原稿がまとめられた（東条1958, 竹田2015）。『音韻分布図』ならびに『口語法分布図』については国立国語研究所所蔵の書籍がPDF化され、「日本語史研究資料」としてインターネット上で公開されている。

(<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjal/d1/>)（最終アクセス：2021年12月24日）。

ⁱⁱ 柳田（1930）は日本各地におけるカタツムリの名称を調査し、『蝸牛考』（刀江書院）に

まとめた。近畿地方にデデムシ（最新）、中部地方・中国地方などにマイマイ（新しい）、関東・四国地方にカタツムリ（中間）、東北・九州地方にツブリ（古い）、東北地方の北部や九州地方の西部にナメクジ（最古）の分布が認められるとし、カタツムリの方言が京都を中心に同心円状に分布していることを指摘した。近畿地方を中心に都で使われていた言葉が地を這うように同心円状に伝播していった結果として形成された分布ではないかとする方言圏論を展開した。

ⁱⁱⁱ 藤原，広島方言研究所著（1974）『瀬戸内海言語図巻』（上巻・下巻）では瀬戸内海域の島嶼部ならびに沿岸部における，その土地生え抜きの老年層女性と少年層女性を対象とした広域調査研究の大果である。瀬戸内海域全体が描かれた大判の地図は240におよぶ項目を老年層・少年層の結果を対比できるように作図されており，言語文化の動態をまとめた集大成として評価されている。

^{iv} 九州方言学会による九州方言の研究の先駆け的な研究事例。地理的な研究の推進と，記述的研究の意義を込めた取組で，象徴的な研究とされる。

第2章

本論文の目的と研究方法

2.1 本論文の目的

本研究の目的は、九州北部地方において実施した長崎街道グロットグラム調査の結果に基づき、1960-1980年代を中心とした言語地理学的研究の成果との比較を通じて当該地域における言語変異を探ることにある。

これまでに述べてきた九州地方における言語地理学的研究の成果からは1960年代から1980年代を中心とした九州地方の方言の様相をみることができる（国立国語研究所 1966-1974, 1989-2006, 九州方言学会 1969, 岡野編 1984 ほか）。また、上村（1983）が「九州方言の学問的記事はロドリゲスの『日本大文典』（一六〇四-八<慶長九一十三年>）に初めて見える。（中略）それらの方言記事の大部分は、現代九州方言にも当てはまる観察である」と述べるように、こうした方言の中には江戸時代から続く方言的特徴も含まれている。このように九州方言が古い形式を維持する様子はすでに明らかにされているところである。

一方で、井上（2009）で指摘されるように、言語地図を作成し言葉の共時的な現状を明らかにする言語地理学的研究において、言語の変化を明らかにするためには、「過去の文献資料や年齢など」の「絶対的な時間、実時間と結びつける」必要がある（pp. 17-18）。言葉の新旧や変化について議論するためには過去の文献資料などによりある時点でのその地域の言葉がどのようなようであったかを明らかにする必要があり、その当時に比べて現在どのような状況にあるのか、相対的な視点で言語史を論じることになる。

こうした言語地理学的研究の一面に、社会言語学的な視点が加わり、誕生したグロットグラム調査法により、言葉の地理的分布という次元と、言語変化という時間的な次元を一つの図に表すことが可能となった。「地理×世代」の視点が図示されることにより、地域差と見かけ時間上の世代差を同時に考察することができる。線上に調査地点を確保するという特性があるため、地域の選定基準や方法について批判がある（江端 2006）ものの、一時点の調査によって明らかにできる言語変化の豊富さは、言語の動態を探る方法として最適であろう。方言事象が共通語化の影響も受ける中、九州北部地方における経年変化の結果としてどのような様相を呈

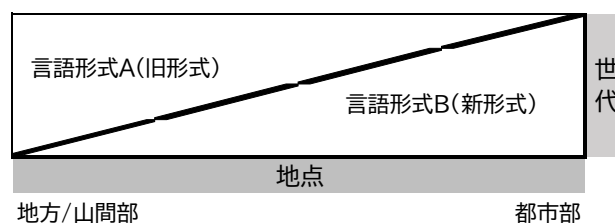


図 2-1 グロットグラムにおける地理的分布と言語変化（典型的モデル）

しているのか，グロットグラム調査や言語地図，談話資料，統計的手法など様々な角度からアプローチすることで，総合的な分析を試みたい。

2.1.1 グロットグラム調査について

ここで，本研究が採用した調査のうち，主たる調査となった「グロットグラム調査」について述べておきたい。

W・A・グロータース氏は著書『日本の方言地理学のために』（1976）において，「構造言語地理学」の成り立ちについて説明している。以下に引用・要約する。

言語の構造（体系）を詳らかにせんとする構造言語学と，“音韻法則の規則性”を証明するための試みとして生まれた言語地理学的研究（ドイツ）は当時まったく別々のものとして編み出され，発達したとされる。後者の言語地理学的研究は，後に上田萬年によってもたらされ，日本の国語調査委員会『音韻調査報告書』（1905）・『口語法調査報告書・口語法分布図』（1906）の成果に繋がった。また，フランスにおける言語地理学的研究の発祥についても言及し，スイスへ留学していた柳田國男がこの影響をうけ，言語地理学的研究の代表ともいえる『蝸牛考』が報告された。

構造言語学の立場からすれば，言葉を一語ずつ取り挙げて地図を描く言語地理学的研究は「方言研究を細分・解体してしまうという点で批判的であった」（同著 p238）とされている。W・A・グロータース（1976）の書評の中で，柴田武氏は「言語地理学が現在から過去へさかのぼる言語記号の動態的な関係を求めようとしているのに対して，構造言語学は現在または過去のある時点における言語記号の生態的な関係を求めようとしている。」（柴田武「コメント グロータース神父の論文を読んで」 p. 250）とし，その対立する体制を指摘しつつも，対立する2種の視点があるからこそ統合を試みるということが可能であると述べた。

W・A・グロータース氏はこの「構造言語地理学」的視点を持ち，徳川宗賢氏や柴田武氏らと1957年からの「新潟県糸魚川地方の方言調査」に臨んだ。この糸魚川流域で実施した調査が，後にグロットグラム調査法と名づけられる。

〈糸魚川流域調査 調査概要〉

調査地域内のすべての村落（最小単位の集落，つまり小字）に，それぞれ一人ずつ，ほぼ同年齢の人を被調査者（話者）として選び，385項目について調査したものである。この調査を機に「しらみつぶし」による調査法が確立した。

調査期間：昭和32年から6回

調査員：柴田武，徳川宗賢，W・A・グロータース

〈全員調査〉

糸魚川流域調査では，調査結果検証のために新潟県根知谷の梨の木集落において，集落に居住する全員を対象とした全数調査を実施している。そこでは，全員50人全員のうち，病人その他不在の10人を除いた，6歳から77歳までの41人全員に25項目を調査したとされる。

2.1.2 言語地理学調査における回答の安定性

言語地理学調査では，その地域で話される語彙や文法などに関する質問を重ね，話者の回答がその調査地点のデータ（代表値）として取り扱われる。そのため，話者の選定の際にはその地域で生まれ育った人物（日本方言研究会ではこの条件を「生え抜き」と呼んできた）であることを重視し，調査の協力をお願いする。これは，生え抜きの話者であれば，その人に内在する言語体系がその地域の言語体系を表すことを少なからず保証してくれるからである。しかしながらその一方で，たった数名から数十名を調べたとして，その話者の回答がその地域を代表するに足るものなのかという点で，時折その整合性を問題視する声も聞かれる。

確かに，このような調査で得られる回答というのは，話者個人の言語体系によって導き出されたものであり，同じ質問に対して今日と明日とで回答が異なるようではデータとしての信頼性は低くなってしまいうだろう。

しかし，この問題に関しては，W・A・グロータース（1976）『日本の方言地理学のために』第1部（pp.7-19）や徳川宗賢（1993）『方言地理学の展開』の第3章（pp.283-294）において検証調査の結果報告がなされている。以下，どのような検証がおこなわれたかについて解説し，本研究の調査結果の整合性についてもこの理論に準拠することとする。

2.1.2.1 「全員調査」による検証（W・A・グロータース 1976）

W・A・グロータース（1976）では、新潟県糸魚川地方における方言調査（以下、糸魚川調査と表記する）の調査項目のうち、カマキリについての結果の検証をおこなっている。検証の方法は「全員調査」と称されるものである。この調査の概要を示す。

〈全員調査〉

調査対象地域：梨(なし)の木(き)（新潟県糸魚川市上野梨ノ木）ⁱ

調査対象者：梨の木地区の住人全員 41 人ⁱⁱ

人口構成：

老年層 11 人（5 人）／中年層 14 人（7 人）／少年層 15 人（8 人）

*（）内は女性の人数を表す。

調査項目数：25 項目

この「全員調査」がおこなわれた目的は、地理的調査の結果から推定された言語史を検証することにある。

グロータース氏は、糸魚川調査に参加した徳川氏が徳川（1976）の中で方言言語地図の語形の分布状況から言語史をひも解いたことに触れた。

徳川氏は徳川（1976）の中で、昆虫のカマキリを表す語形の地理的分布から言語史を推定しており、語形の歴史的変遷を示すと同時に、「カマキリ」という語形が海岸線から次第に南へ進んできた最も新しい語形であるとの見解を述べたⁱⁱⁱ。しかし、この言語史推定は、各村落 1 名ずつの話者から得た答えによって作図された言語地図をもとに徳川氏が分析したものであった。糸魚川調査は同年代の話者を調査したものであるため、話者間の世代差はほとんどなく、同年代の人々が同時期（調査当時）に使用している言葉を調べる、いわば共時的研究であったのである。共時的研究はその一時代の方言事象を捉えるものであり、言語史という歴史的変遷の確証を得るためには他の年齢層の人々の方言事象も併せて見る必要があるだろう。

そこで、その共時的研究から導き出された言語史について、通時的研究の立場から検証を試みたのが「全員調査」である。グロータース氏はこの分析の整合性の検証のために、糸魚川流域の村落である梨の木において「全員調査」をおこなった。同世代話者における語形の地理的分布からカマキリの言語史を推定した徳川氏の分析に加え、同地域内の世代が異なる話者から語形の新古関係解明を明らかにすることによって徳川氏が推定した言語史の証明を試みたのである。

この全員調査について、グロータース氏は次のように述べている。

全員調査結果は、地点は一つだから、地理的な分布は見せない。つまり、「地理」という要素を取り去っている。そのかわりに、六歳から七十七歳までのすべての人たちの答えを記録した。年代層を通じて、どういうことばが出るかを表している。言いかえれば、一地点の言語を掘り起こして、年齢層の断面図を描いているわけである。

(中略)

こうした新しい観点から方言の変化過程をながめると、分布から推定した歴史面の仮説をはっきりと証明することができる。徳川氏が推定したことがここで証明されたのである。

(W・A・グロータース 1976, pp. 14-15)

「全員調査」は、調査対象地域や人口の規模を選ぶため、常に実施できる検証方法ではないものの、集落の全ての住人を調査するため、この上なく信頼度の高いデータを得ることができる。また、この方法は方言資料や古文献の少ない地域などでは特に有効であるといえよう。

2.1.2.2 「複数回調査」による検証（徳川 1993）

また、徳川（1993）では、糸魚川調査のデータを用いて、話者の答えの揺れがどの程度起こりうるものなのかを分析している。前述したように、同じ質問をするのに調査の度に答えが変わっているようでは信用に足るデータであるとは見做せない。この疑問点を解消するべく、以下の要領で検証調査が行われた。

糸魚川調査では第1次（1957年）・第2次（1959年）・第3次（1961年）の3度の調査機会が設けられた。それぞれ第1次と第2次、第2次と第3次で同一の調査項目を含ませており、回答の揺れの把握を試みるにあたっては、調査の機会を異にする回答を比較し^{iv}、その回答がどれだけ揺れる（前回と同じ質問に対し、違う回答がなされる）のかを検証している^v。

結論として、調査の回答について揺れが生じるかどうかは言葉の種類（徳川 1993）は、これを〈俚言〉〈地方標準語形〉〈標準語形〉に区別している）とその性質に拠るところが大きいようである。

〈俚言〉に分類される語は、地域の中でも地方中心部ではなくいわゆる田舎で使われている語で、この糸魚川流域では「ものもらい（麦粒腫）」でいうところのメッパやメボイト^{vi}などにあたるとしている。これらはその地域で退縮中である（老年層を中心に用いられている）とされながらもほぼ安定して回答を得ることが出来る点で安定しているとされる。〈地方標準語形〉とされる語（「ものもらい（麦粒

腫)」でいうメッパリ)では、地方中心部を含めた一定範囲の地域で用いられるもので、現在勢力を持って進展中であるため、分布範囲の外側の地域では回答が不安定となるという。そして〈標準語形〉は「ものもらい(麦粒腫)」でいうモノモライであり、これは話者が方言ではないと判断し回答されなかったり、または回答されたとしても調査員がその回答を採用しなかったりすることによって大きく揺れるとしている。

2.1.2.3 言語地理学調査における回答の安定性のまとめ

以上、1.2.1と1.2.2でそれぞれの先行研究における言語地理学調査における回答の安定性についての検証結果を示した。

言語地理学的調査の場合、ある地域の話者1名～数名にその地域で用いられる言葉について問う形となるため、その回答者がその地域の言葉を代表する人物として適切かどうか、回答された語形が果たしてその地域の代表的な語形であるのかといった点で疑問を持たれることがある。しかし、徳川(1976)で示された共時的な言語地理学的調査の結果から導き出された言語史と、W・A・グロータース(1976)で示された通時的な言語地理学的調査の結果から導き出された言語史とが一致したということから、言語地理学的調査の結果の信頼性を保証することができたとと言えるだろう。無論、代表地点による調査結果の検証をするのに最も信用される検証方法としては「全員調査」が確実だが、数十名から100名程度の小さい集落であるならともかくとして、それ以上の規模の地域を対象とした場合、現実的ではない手法である。このような場合は統計的手法の援用によって、母集団の結果を表しうるサンプリングを図る必要があるだろう。

2.2 調査概要

ここでは、本研究に用いた研究方法について述べる。本研究では、筆者が単独で実施した長崎街道グロットグラム調査(2.1)のほか、徳島大学日本語学研究室で実施した九州地方を対象とした大規模通信調査(2.2)の結果を用いている。また、分析を行うにあたり、自然傍受法によって得られた音声を談話資料とし、適宜用例を引用している。

2.2.1 九州北部地方におけるグロットグラム調査

本研究の基盤となった長崎街道上の方言データは社会言語学的な調査手法の一つである「グロットグラム調査法」によって収集されたものである。前述したとおり、グロットグラム調査はある地域間で直線状に地点を配し、各地点で世代調査を行うことによって地理的、世代的観点から言葉の動態を探る調査方法である。新潟県糸魚川市における糸魚川調査(W. A. グロータース 1976)に始まり、徳川(1993)、井上(1991・2010)などに代表される数多くの研究成果が存在し、今なお数々の研究が報告されている(都染 2002・2011-2015, 半沢 2017 ほか)。

グロットグラム調査を採用した目的は、地理的な広がりや世代間の違いを一度に眺めることができる点にある。本研究の主題にもある「方言の動態」は世代差や地域差といった属性間にみられる変化を追うことにその目的がある。地理的な広がりや面をとらえる言語地図とは異なり、方言データの分布がある線上の地域に限定されてしまうものの、1枚の図上に複数の世代の情報をまとめることができ、これによって方言運用の世代差をより細やかに把握することが可能となる。

九州北部地方におけるグロットグラム調査の概要は以下の通りである。

(1) 調査期間：2015年8月4日～2015年10月28日

(2) 調査方法：

各地点の公民館や商工会議所など、地域の住民とのつながりが想定される施設・組織にアクセスし、電話による事前の調査依頼(電話連絡ののち、FAXまたは文書による、調査依頼文および調査資料の送付)と日程調整を行った。

調査は原則話者と調査員(筆者)の対一の環境で行い、録音を行いながらの調査票を用いた面接形式^{vii}で調査を実施した。所要時間は1名あたり1時間～1時間半であったが、2名以上を同時に調査する場合は2時間以上の時間を要するなど、状況によって所要時間が異なる場合があった。調査日までに話者を確保することができない世代があった場合には、調査当日に話者による

紹介を依頼したり，飛び込みによるお声がけで後日日程調整を行ったりするなど，極力，その地点での全世代話者の確保に努めた。調査に協力いただくにあたり，提供される音声および回答データは研究目的にのみ使用する旨の「研究協力同意書」をいただいた。

本調査で使用した質問票における質問文の形態を分類すると以下の 3 種となる（〔〕内はその設問で明らかにせんとする表現）。

(1) 場面設定法

場面設定法は「場面を設定し，単語ではなく，文全体を答えさせる方法」（佐藤 2000, p. 218）のことであり，設定された状況のもと，指定された発言を行う場合どのように言うかを問う。「共通語翻訳式」（小林・篠崎編 2007, p. 32）とも言われる。

（例 1）家に帰ると閉めていたはずの窓が開いていました。「あっ，窓が開いている」という場合，「開いている」の部分をなんと言いますか。〔開いている（状態）〕

（例 2）あなたは教室で帰る準備をしていました。違うクラスの友人があなたの担任の先生に会いに来ましたが，あいにくその教室には担任の先生はいません。

その友人に「先生はいないよ」という場合，「いないよ」の部分をどう言いますか。また，このとき訪ねてきたのが違うクラスの先生だった場合はどう言いますか。〔話題の人物を先生（親しい目上），友人（親しい同等）を相手にした場合の第三者待遇〕〔話題の人物を先生（親しい目上），先生（疎い目上）を相手にした場合の第三者待遇〕

(2) なぞなぞ式質問法

なぞなぞ式質問法とは「目的の単語の語形を示さずに単語の意味を説明したり，絵や実物を見せて単語を答えさせる方法」（佐藤 2000, p. 216）を言う。いわゆる「なぞなぞ式」（小林・篠崎編 2007, p. 32）であり，語彙項目の多くでこの質問方法を採用した。

（例 1）ひざをすりむいた時などに傷口が乾燥してできる血の塊をなんと言いますか。〔瘡蓋〕

（例 2）図のような柿の固い部分のことをなんと言いますか。〔柿のへた〕



(3) 選択式質問法

選択式質問法では、いくつかの選択肢を提示し、話者に自分の言語使用や内省と合致すると思われる選択肢を選んでもらうことで回答を得る。選択肢以上の情報が得られないことが多いため、使用実態に関する内省を得ることを心がけた。

(例 1) 応援するときに「頑張れ」の意味で「ケッパレ」ということばを使いますか。〔「頑張れ」の意味でのケッパレ使用の有無〕

- | | |
|--------------------|----------------|
| 1 使う | 2 昔は使ったが今は使わない |
| 3 聞いたことはあるが自分は使わない | 4 聞いたこともない |

(3) 調査対象地域：

福岡県北九州市小倉から長崎県長崎市にかけてのびる長崎街道沿い旧宿場町の 25 地点を調査対象とした。調査は日程調整がついた順に実施したため、地点番号と調査の順序は対応していない。調査員（筆者）の地元である飯塚を起点に随時公共交通機関を利用して調査地に赴いた。調査対象地域の位置や地名などの詳細は図 2-2、図 2-3、表 2-2、表 2-3 を参照されたい。

(4) 調査項目：

調査票は話者の基礎情報に関する内容のほか、語彙・文法に関する項目 92 項と、敬語表現に関する項目 20 項とで構成される。

〈敬語表現に関する質問票：調査票質問文一覧〉

1. 「先生が言いよンシャル」「同級生の〇〇さんが歩きよンチャー」といったことばを使いますか。
 - (1) よく使う
 - (2) この土地で使われているのを聞いたことはあるが自分は使わない
 - (3) 聞いたこともない
 - (4) わからない
2. 1. で(1)と(2)を選択した方にお聞きします。このような「～ンシャル」という言い方を「シャル敬語」と呼びます。この「シャル敬語」について教えてください。
 - (a) 【女性が使う言葉である】
はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ
 - (b) 【とても丁寧な表現である】
はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ
 - (c) 【年寄り言葉である】
はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ

3. あなたは教室で帰る準備をしていました。違うクラスの友人があなたの担任の先生に会いに来ましたが、あいにくその教室には先生はいません。
- 3-1. その友人に「先生はいないよ」という場合、「いないよ」の部分をどう言いますか。また、違うクラスの先生に対して言うとしたらどう言いますか。
- 3-2. あなたは友人のために職員室に先生がいるかを見に行きました。あなたは友人に「先生はいなかったよ」と報告する場合、「いなかったよ」の部分をどう言いますか。また、違うクラスの先生に対して言うとしたらどう言いますか。
4. あなたは久しぶりに親友の家にお邪魔しました。すると親友宅で飼われているペットの猫があなたの足にすり寄ってきました。その様子を見た親友が「猫が（あなたのことを）覚えとんしゃーね。」と言いました。（あなたは動物好きであるというつもりでお答えください。）
- 4-1. 「猫が覚えとんしゃーね」という友人の表現に違和感をおぼえますか。
(1)とても違和感がある (2)やや違和感がある (3)違和感はあまりない
(4)違和感は全くない (5)わからない (6)その他
- 4-2. 4-1 で 1 または 2 を選んだ方にお聞きします。違和感をおぼえる理由は何ですか。またはどういった点に違和感がありますか。
- 4-3. 上の場面において「猫が覚えとんしゃーね」という表現から、猫に対する友人の感情はどのようなものだと思いますか。当てはまるものを全て選択してください。
(1)尊敬 (2)かわいい (3)愛おしい (4)面白い (5)特別な感情はない
(6)鬱陶しい (7)猫に対する感情ではなく、訪問者（あなた）に対する配慮（気遣い）だと思う。(8)その他
5. 昔から親しい間柄である年上の知り合い（先輩）が道の向こう側から歩いてきます。あなたの側にいる友人（同級生）に「〇〇さんが来たよ。」と言う場合、どのように言いますか。
6. あなたが自分の家に訪ねて来た父親の職場の上司に対して、丁寧に「雨は降っていましたか？」と尋ねるときどのように言いますか。
- 7-1. 台風のように激しい雨が降っていて、家の門のところで雨宿りをしている人がいます。この人が親しい友人であった場合、「もっと中に入りなさい」と声をかける場合、「入りなさい」の部分をどのように言いますか。
- 7-2. では、雨宿りをしているのが見ず知らずの同世代の人である場合、「もっと中に入りなさい」と声をかけるなら「入りなさい」の部分をどのように言いますか。

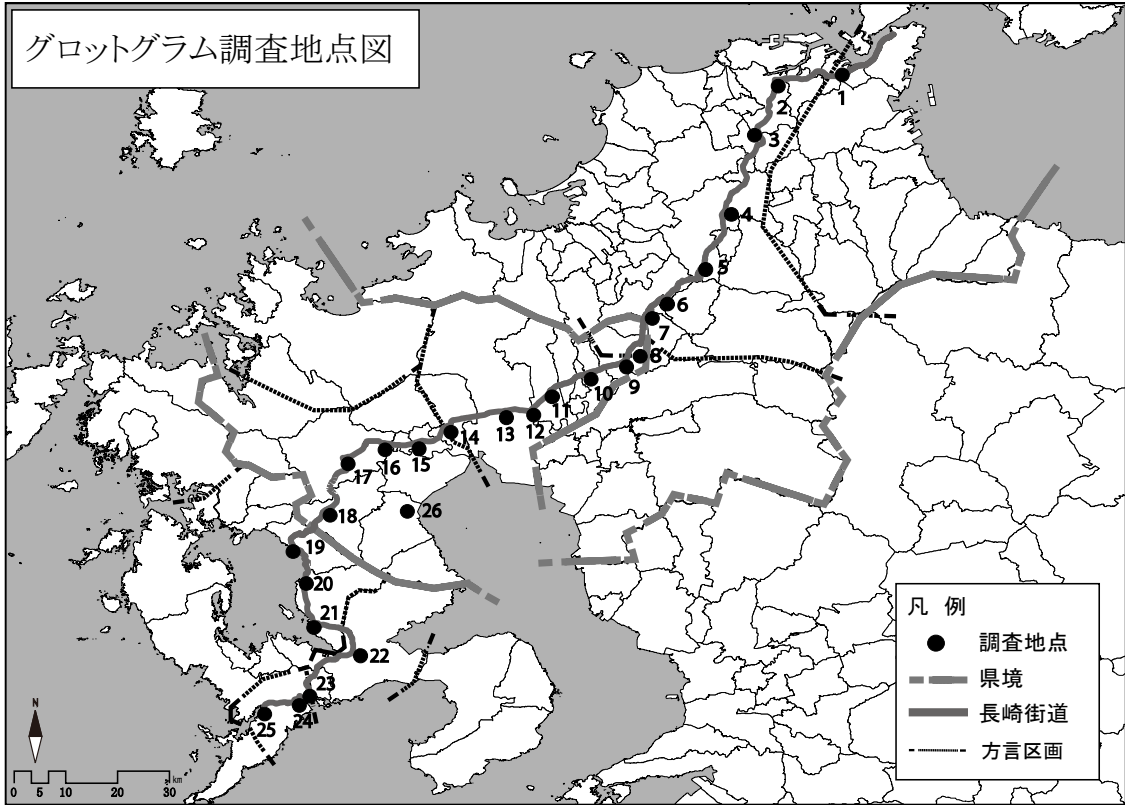
(5) 調査対象者

調査対象地域で生まれ育った男性に限定（大学や単身赴任による数年程度の外住歴は不問）し、各地点において若年層（15歳～20代）、中年層（同条件で30～40代）、壮年層（50～60代）、老年層（70代以上）の4世代を設定し^{viii}、原則として各世代1名ずつを対象とした調査を実施した。各世代の人数は表2-1に示すとおりである。

(6) 話者情報

本研究で協力が得られた話者情報は表2-1、表2-2、表2-3の通りである。表2-3について、表上部に示す10～80の数字は10代～80代の枠組みを表し、表内に示される数字は話者年齢を表している。調査地点1～25の地域は表2-3左端の列で示した通りであり、各地点の話者の年齢が左から右に行くほど高齢であることがわかるよう、10代～80代の枠内を3分割し、例えば10代前半・中盤・後半（0-3・4-6・7-9）の年齢差をマスの配置によって示した。

表2-1について世代別にみると、10代、50代、80代で人数の少なさが目立つが、年齢別の人数では偏りはほとんど見られない。調査地点によって協力を得ることができた話者数に偏りがある。神埼が最も少なく2名（中年層1名、壮年層1名）、牛津が最も多い6名（若年層2名、中年層2名、壮年層1名、老年層1名）である。usd17（佐賀県・牛津、若年層）、sng66（長崎県・彼杵、壮年層）、ygm71（長崎県・矢上、老年層）のように、1地点1世代で2名の話者による調査を行った地点・世代もある。また、協力が得られた地点についても、時間の制約上十分に回答を得られなかった話者もあり、調査票を用いた面接調査を実施したものの、均質的なデータ収集に課題が残る結果となったことを断っておく。



- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1: 小倉(福岡県北九州市小倉北区) | 14: 牛津(佐賀県小城市) |
| 2: 黒崎(福岡県北九州市八幡西区) | 15: 小田(佐賀県杵島郡江北町) |
| 3: 木屋瀬(福岡県北九州市八幡西区) | 16: 北方(佐賀県武雄市) |
| 4: 飯塚(福岡県飯塚市) | 17: 塚崎(佐賀県武雄市) |
| 5: 内野(福岡県飯塚市) | 18: 嬉野(佐賀県嬉野市) |
| 6: 山家(福岡県筑紫野市) | 19: 彼杵(長崎県東彼杵郡東彼杵町) |
| 7: 原田(福岡県筑紫野市) | 20: 松原(長崎県大村市) |
| 8: 田代(佐賀県鳥栖市) | 21: 大村(長崎県大村市) |
| 9: 轟木(佐賀県鳥栖市) | 22: 永昌(長崎県諫早市) |
| 10: 中原(佐賀県三養基郡みやき町) | 23: 矢上(長崎県長崎市) |
| 11: 神埼(佐賀県神崎市) | 24: 日見(長崎県長崎市) |
| 12: 境原(佐賀県神崎市) | 25: 長崎(長崎県長崎市) |
| 13: 佐賀(佐賀県佐賀市) | 26: 鹿島(佐賀県鹿島市) |

図 2-2 長崎街道グロットグラム調査 調査地点一覧

表 2-1 世代別人数（全地点）

年層	若年層		中年層		壮年層		老年層	
人数(人)	23		26		26		24	
世代別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
内訳(人)	5	18	11	15	7	19	18	6

		10	20	30	40	50	60	70	80
1	小倉			28	43	56		77	
2	黒崎		20		41	57		71	
3	木屋瀬		26		42	59		78	
4	飯塚		25		42		64	78	
5	内野			29	35		65	72	
6	山家		23		38		65		89
7	原田		22		40		61	77	
8	田代		26			47	63		80
9	轟木				49		67	77	
10	中原		25		37		60	75	
11	神崎				48	52			
12	境原		24		39		64	76	
13	佐賀		20		36		65	72	
14	牛津	17a 17b		36	49		66	72	
15	小田		24		47	57			81
16	北方	16			42		60		80
17	塚崎			29	40	50			85
18	嬉野		25		39	56		76	
19	彼杵			28	31		62 66a 66b		84
20	松原				35		68	71	
21	大村			28	31		60		78
22	永昌		17			47	64	75	
23	矢上	14			40			71a 71b	
24	日見		24		37		67		
25	長崎			28	44		63	75	
		10	20	30	40	50	60	70	80

図 2-3 調査地点及び話者年齢一覧

表 2-2 話者情報一覧 (その1)

県名	地区	調査日	ID	性別	生年	年齢	類別職業	生育地	現住所
福岡県	1 小倉	H27.10.13	kk28	男	1987	28	販売	福岡県北九州市小倉北区	福岡県北九州市小倉北区
福岡県	1 小倉	H27.10.13	kk43	男	1972	43	会社役員	福岡県北九州市小倉北区赤坂	福岡県北九州市小倉北区赤坂
福岡県	1 小倉	H27.10.13	kk56	男	1959	56	会社役員	福岡県北九州市小倉北区魚町	福岡県北九州市小倉北区魚町
福岡県	1 小倉	H27.10.13	kk77	男	1938	77	自営業	福岡県北九州市小倉北区魚町	福岡県北九州市小倉北区魚町
福岡県	2 黒崎	H27.10.5	krs20	男	1995	20	学生	福岡県北九州市八幡西区黒崎	福岡県北九州市八幡西区黒崎
福岡県	2 黒崎	H27.10.5	krs41	男	1974	41	自営業	福岡県北九州市八幡西区黒崎	福岡県北九州市八幡西区黒崎
福岡県	2 黒崎	H27.10.5	krs57	男	1958	57	自営業	福岡県北九州市八幡西区八千代町	福岡県北九州市八幡西区熊手
福岡県	2 黒崎	H27.10.5	krs71	男	1944	71	自営業	福岡県北九州市八幡西区黒崎	福岡県北九州市八幡西区黒崎
福岡県	3 木屋瀬	H27.8.19	kyn26	男	1989	26	生産工程	福岡県中間市中尾	福岡県北九州市八幡西区木屋瀬
福岡県	3 木屋瀬	H27.8.19	kyn42	男	1973	42	自営業	福岡県北九州市八幡西区木屋瀬	福岡県北九州市八幡西区木屋瀬
福岡県	3 木屋瀬	H27.8.13	kyn59	男	1955	59	販売	福岡県北九州市八幡西区木屋瀬	福岡県北九州市八幡西区木屋瀬
福岡県	3 木屋瀬	H27.8.13	kyn78	男	1936	78	無職	福岡県北九州市八幡西区	福岡県北九州市八幡西区
福岡県	4 飯塚	H27.7.14	izk25	男	1990	25	公務員	福岡県飯塚市下三緒	福岡県飯塚市下三緒
福岡県	4 飯塚	H27.7.28	izk42	男	1972	42	公務員	福岡県飯塚市	福岡県飯塚市
福岡県	4 飯塚	H27.7.28	izk64	男	1951	64	会社員	福岡県飯塚市	福岡県飯塚市
福岡県	4 飯塚	H27.7.20	izk78	男	1936	78	公務員	福岡県飯塚市鮫田	福岡県飯塚市下三緒
福岡県	5 内野	H27.9.25	ucn29	男	1986	29	専門職・技術職	福岡県飯塚市内野	福岡県飯塚市内野
福岡県	5 内野	H27.9.25	ucn35	男	1980	35	公務員	福岡県飯塚市内野	福岡県飯塚市内野
福岡県	5 内野	H27.9.25	ucn65	男	1950	65	運搬・清掃・包装等	福岡県飯塚市内野	福岡県飯塚市内野
福岡県	5 内野	H27.9.25	ucn72	男	1943	72	建設・採掘	佐賀県佐賀市高木瀬町	福岡県飯塚市内野
福岡県	6 山家	H27.10.27	yme23	男	1992	23	団体職員	福岡県筑紫野市山家	福岡県筑紫野市山家
福岡県	6 山家	H27.10.27	yme38	男	1977	38	輸送・機械運転	福岡県筑紫野市山家	福岡県筑紫野市山家
福岡県	6 山家	H27.10.27	yme65	男	1950	65	サービス職業	福岡県筑紫野市山家	福岡県筑紫野市山家
福岡県	6 山家	H27.9.2	yme89	男	1940	89	公務員	福岡県三浦郡大木町大莪村	福岡県筑紫野市山家
福岡県	7 原田	H27.9.29	hrd22	男	1993	22	学生	福岡県福岡市見良	福岡県筑紫野市原田
福岡県	7 原田	H27.9.29	hrd40	男	1975	40	販売	福岡県筑紫野市原田	福岡県筑紫野市原田
福岡県	7 原田	H27.9.29	hrd61	男	1954	61	専門職・技術職	福岡県筑紫野市原田	福岡県筑紫野市原田
福岡県	7 原田	H27.9.29	hrd77	男	1938	77	輸送・機械運転	福岡県筑紫野市原田	福岡県筑紫野市原田
佐賀県	8 田代	H27.8.22	tsr26	男	1985	26	公務員	佐賀県鳥栖市田代大宮町	佐賀県鳥栖市田代大宮町
佐賀県	8 田代	H27.8.23	tsr47	男	1967	47	会社員	佐賀県鳥栖市田代昌町	佐賀県鳥栖市田代外町
佐賀県	8 田代	H27.8.23	tsr63	男	1952	63	自営業	佐賀県鳥栖市田代大宮町	佐賀県鳥栖市田代大宮町
佐賀県	8 田代	H27.8.23	tsr80	男	1935	80	販売	佐賀県鳥栖市田代新町	佐賀県鳥栖市田代新町
佐賀県	9 轟木	H27.8.23	tdr49	男	1966	49	会社員	佐賀県鳥栖市轟木町	佐賀県鳥栖市轟木町
佐賀県	9 轟木	H27.8.22	tdr67	男	1948	67	生産工程	佐賀県鳥栖市轟木町	佐賀県鳥栖市轟木町
佐賀県	9 轟木	H27.8.22	tdr77	男	1938	77	輸送・機械運転	佐賀県鳥栖市轟木町	佐賀県鳥栖市轟木町
佐賀県	10 中原	H27.10.28	nkb25	男	1990	25	公務員	佐賀県三養基郡みやき町原古賀	佐賀県三養基郡みやき町原古賀
佐賀県	10 中原	H27.10.28	nkb37	男	1979	37	公務員	佐賀県三養基郡中原町養原	佐賀県三養基郡中原町養原
佐賀県	10 中原	H27.10.26	nkb60	男	1955	60	公務員	佐賀県三養基郡みやき町養原	佐賀県三養基郡みやき町養原
佐賀県	10 中原	H27.10.28	nkb75	男	1940	75	輸送・機械運転	佐賀県三養基郡中原村	佐賀県三養基郡みやき町大字養原
佐賀県	11 神埼	H27.10.26	kns248	男	1967	48	公務員	佐賀県神埼市神埼町姉川	佐賀県神埼市神埼町姉川
佐賀県	11 神埼	H27.10.26	kns52	男	1963	52	会社役員	佐賀県神埼市神埼町	佐賀県神埼市神埼町
佐賀県	12 境原	H27.10.18	skb24	男	1991	24	輸送・機械運転	佐賀県神埼市千代田町境原	佐賀県神埼市千代田町境原
佐賀県	12 境原	H27.10.18	skb39	男	1976	39	会社員	佐賀県神埼市千代田町	佐賀県神埼市千代田町
佐賀県	12 境原	H27.10.18	skb64	男	1951	64	公務員	佐賀県神埼市千代田町境原字原の町	佐賀県神埼市千代田町境原
佐賀県	12 境原	H27.10.18	skb76	男	1939	76	自営業	佐賀県小城市小城市	佐賀県神埼市千代田町境原
佐賀県	13 佐賀	H27.8.4	sag20	男	1995	20	専門学校生	佐賀県佐賀市伊勢町	愛知県名古屋市中千種区日進通
佐賀県	13 佐賀	H27.8.6	sag36	男	1978	36	サービス職業	佐賀県佐賀市長瀬町	佐賀県佐賀市長瀬町
佐賀県	13 佐賀	H27.8.4	sag65	男	1950	65	市議会議員	福岡県大牟田市	佐賀県佐賀市伊勢町
佐賀県	13 佐賀	H27.8.4	sag72	男	1943	72	公務員	佐賀県佐賀市	佐賀県佐賀市長瀬町
佐賀県	14 牛津	H27.9.26	usd17a	男	1998	17	高校生	佐賀県小城市牛津町乙柳	佐賀県小城市牛津町乙柳
佐賀県	14 牛津	H27.9.26	usd17b	男	1998	17	高校生	佐賀県小城市牛津町柿樋瀬	佐賀県小城市牛津町柿樋瀬
佐賀県	14 牛津	H27.9.26	usd36	男	1979	36	公務員	佐賀県佐賀市本庄町	佐賀県小城市牛津町乙柳
佐賀県	14 牛津	H27.9.26	usd49	男	1965	49	生産工程	佐賀県小城市牛津町牛津	佐賀県小城市牛津町牛津
佐賀県	14 牛津	H27.9.26	usd66	男	1949	66	市議会議員	佐賀県小城市牛津町柿樋瀬	佐賀県小城市牛津町柿樋瀬
佐賀県	14 牛津	H27.9.26	usd72	男	1941	72	会社員	佐賀県小城市牛津町乙柳	佐賀県小城市牛津町乙柳
佐賀県	15 小田	H27.8.7	oda24	男	1991	24	公務員	佐賀県杵島郡江北町大字小田	佐賀県杵島郡江北町大字八町
佐賀県	15 小田	H27.8.7	oda47	男	1967	47	専門職・技術職	佐賀県杵島郡江北町上小田	佐賀県杵島郡江北町上小田
佐賀県	15 小田	H27.8.7	oda57	男	1957	57	公務員	佐賀県杵島郡江北町大字上小田	佐賀県杵島郡江北町大字上小田
佐賀県	15 小田	H27.8.7	oda81	男	1934	81	建設・採掘	佐賀県杵島郡江北町上小田	佐賀県杵島郡江北町上小田
佐賀県	16 北方	H27.9.27	ktk16	男	1999	16	高校生	佐賀県武雄市北方町大字志久	佐賀県武雄市北方町大字志久
佐賀県	16 北方	H27.9.27	ktk42	男	1972	42	公務員	佐賀県武雄市北方町大崎	佐賀県武雄市北方町大崎
佐賀県	16 北方	H27.9.27	ktk60	男	1955	60	公務員	佐賀県武雄市北方町	佐賀県武雄市北方町
佐賀県	16 北方	H27.9.27	ktk80	男	1938	80	専門職・技術職	佐賀県杵島郡白石町戸ヶ里	佐賀県武雄市北方町大崎
佐賀県	17 塚崎	H27.10.14	tkz29	男	1986	29	販売	佐賀県武雄市武雄町大字永島	佐賀県武雄市武雄町大字永島
佐賀県	17 塚崎	H27.10.14	tkz40	男	1975	40	公務員	佐賀県武雄市武雄町武雄区	佐賀県武雄市武雄町小橋区
佐賀県	17 塚崎	H27.10.14	tkz50	男	1965	50	公務員	佐賀県武雄市武雄町大字武雄	佐賀県武雄市武雄町大字武雄
佐賀県	17 塚崎	H27.10.14	tkz85	男	1931	85	会社員	佐賀県佐賀市内	佐賀県武雄市武雄町大字富岡
佐賀県	18 嬉野	H27.8.21	urs25	男	1990	25	公務員	佐賀県嬉野市嬉野町大字不動山乙	佐賀県嬉野市嬉野町大字不動山乙
佐賀県	18 嬉野	H27.8.21	urs39	男	1976	39	公務員	佐賀県嬉野市塩田町大字五町甲	佐賀県嬉野市塩田町大字五町甲
佐賀県	18 嬉野	H27.8.21	urs56	男	1959	56	公務員	佐賀県嬉野市塩田町大字馬場下甲	佐賀県嬉野市塩田町大字馬場下甲
佐賀県	18 嬉野	H27.8.21	urs76	男	1939	76	無職	佐賀県嬉野市塩田町大字久間乙	佐賀県嬉野市塩田町大字久間乙

表 2-3 話者情報一覧（その2）

県名	地区	調査日	ID	性別	生年	年齢	類別職業	生育地	現住所
長崎県	19 彼杵	H27.9.5	sng28	男	1986	28	公務員	長崎県東彼杵郡東彼杵町普無田郷	長崎県東彼杵郡東彼杵町普無田郷
長崎県	19 彼杵	H27.9.9	sng31	男	1983	31	サービス職業	長崎県東彼杵郡東彼杵町	長崎県東彼杵郡東彼杵町蔵本郷
長崎県	19 彼杵	H27.9.9	sng62	男	1952	62	公務員	長崎県東彼杵郡東彼杵町八反田郷	長崎県東彼杵郡東彼杵町彼杵宿郷
長崎県	19 彼杵	H27.9.9	sng66a	男	1948	66	公務員	長崎県東彼杵郡東彼杵町坂本郷	長崎県東彼杵郡東彼杵町坂本郷
長崎県	19 彼杵	H27.9.9	sng66b	男	1949	66	公務員	長崎県東彼杵郡東彼杵町彼杵宿郷	長崎県東彼杵郡東彼杵町彼杵宿郷
長崎県	19 彼杵	H27.9.9	sng84	男	1930	84	公務員	長崎県東彼杵郡東彼杵町駄地3郡	長崎県東彼杵郡東彼杵町駄地3郡
長崎県	20 松原	H27.9.12	mtb35	男	1980	35	会社員	長崎県大村市松原本町	長崎県大村市松原本町
長崎県	20 松原	H27.9.12	mtb68	男	1947	68	建設・探掘	長崎県大村市松原本町	長崎県大村市松原本町
長崎県	20 松原	H27.9.12	mtb71	男	1944	71	会社員	長崎県大村市松原	長崎県大村市松原
長崎県	21 大村	H27.9.11	omr28	男	1987	28	公務員	長崎県大村市	長崎県大村市前舟津
長崎県	21 大村	H27.9.11	omr31	男	1984	31	公務員	長崎県大村市	長崎県大村市前舟津
長崎県	21 大村	H27.9.5	omr60	男	1956	60	自営業	長崎県大村市水田町	長崎県大村市水田町
長崎県	21 大村	H27.9.5	omr78	男	1937	78	保安職業	長崎県大村市松山町	長崎県大村市坊之津町
長崎県	22 永昌	H27.9.30	eis17	男	1998	17	高校生	長崎県諫早市真崎町	長崎県諫早市真崎町
長崎県	22 永昌	H27.9.27	eis47	男	1967	47	公務員	兵庫県神戸市兵庫区	長崎県諫早市森山町
長崎県	22 永昌	H27.9.30	eis64	男	1951	64	輸送・機械運転	長崎県諫早市永昌町	長崎県諫早市永昌町
長崎県	22 永昌	H27.9.30	eis75	男	1940	75	生産工程	長崎県諫早市永昌町	長崎県諫早市永昌町
長崎県	23 矢上	H27.10.25	ygm14	男	2001	14	中学生	長崎県長崎市矢上町	長崎県長崎市矢上町
長崎県	23 矢上	H27.10.25	ygm40	男	1975	40	生産工程	長崎県長崎市矢上町	長崎県長崎市矢上町
長崎県	23 矢上	H27.10.25	ygm71a	男	1944	71	生産工程	長崎県長崎市矢上町	長崎県長崎市矢上町
長崎県	23 矢上	H27.10.25	ygm71b	男	1944	71	建設・探掘	長崎県長崎市矢上町	長崎県長崎市矢上町
長崎県	24 日見	H27.9.10	him24	男	1991	24	専門職・技術職	長崎県長崎市宿町	長崎県長崎市宿町
長崎県	24 日見	H27.9.10	him37	男	1977	37	会社員	長崎県長崎市界町	長崎県長崎市界町
長崎県	24 日見	H27.9.10	him67	男	1949	67	自営業	長崎県長崎市界町	長崎県長崎市界
長崎県	25 長崎	H27.9.10	ngs28	男	1986	28	公務員	長崎県長崎市土井首町	長崎県長崎市桜町
長崎県	25 長崎	H27.9.10	ngs44	男	1971	44	公務員	長崎県長崎市	長崎県長崎市大浜町
長崎県	25 長崎	H27.9.10	ngs63	男	1951	63	会社員	長崎県長崎市本河内町	長崎県長崎市本河内町
長崎県	25 長崎	H27.9.10	ngs75	男	1939	75	専門職・技術職	長崎県長崎市本河内町	長崎県長崎市本河内町

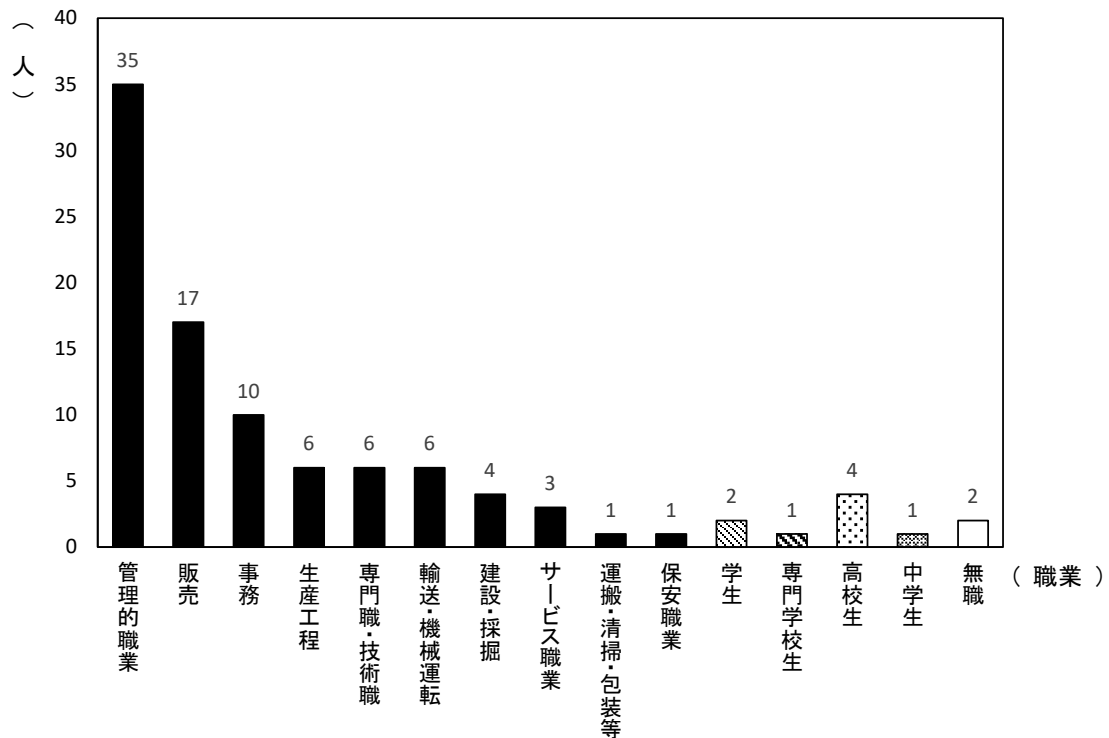


図 2-4 話者の職業一覧

また、話者の職業内訳は図 2-4 の通りである。社会人の職業については基本的に現職のものを問い、退職後である場合は退職前の職業を記録した。職業の分類は、「日本標準職業分類（平成 21 年 12 月統計基準設定）分類項目名」（総務省）における大分類を参考におこなった。調査依頼をする際、地域の役場や公民館を通じて話者を紹介してもらったこともあり、公務員や団体職員、市議会議員などが該当する「管理的職業」である話者が多い結果となった。

〈分類内訳〉

管理的職業	: 市議会議員, 公務員, 団体職員など
販売	: 販売員, 自営業 (医薬品販売), 小売業, 新聞販売, 不動産業など
事務	: 会社員
生産工程	: 工員, 自営業 (製帽), 自営業 (製菓), 製鉄所社員など
専門職・技術職	: 技術者, 水道配管工, 教員, 住職, 書道師範
輸送・機械運転	: ドライバー, 配送業など
建設・採掘	: 建設業, 左官業, 畳製造販売など
サービス職業	: 介護士, 施設管理人, 理容師
運転・清掃・包装等	: 郵便局長
保安職業	: 消防署

2.2.2 九州地方を対象とした通信調査

九州地方を対象とした通信調査（以下、九州調査という）は 2011 年 7 月から 9 月にかけての 2 か月間において、徳島大学日本語学研究室（当時）によって実施された大規模な通信調査である。調査全体の総項目数は語彙、文法を含む 130 問である。調査対象者は調査時点で 65 歳以上の生え抜き^{ix}としており、性別に関する制限は設けていない。主要データの収集は上記期間において実施されたが、調査の回答が得られなかった地点を中心に、実際にその地域に赴き、郵送による提出を依頼する留め置き調査による調査地点の補填も行っている。

九州調査の結果、613 名分の言語データを収集することができている（2014 年 10 月 28 日時点）。九州調査の調査項目の選定にあたっては、九州方言の先行研究である『九方基』のほか、国立国語研究所『日本言語地図』『方言文法全国地図』などから代表される項目を採用している。

調査対象地域は九州本島部およびその周辺島嶼部であるが、第 4 章における分析対象データは、九州本島部における特徴に着目するため、周辺島嶼部の結果を除いた 544 件のみを対象とし、地図化した。詳細な地点については第 4 章にて示す。

2.2.3 自然傍受法による談話資料

2.2.1 や 2.2.2 の調査で収集された調査結果は、基本的には調査票の質問に回答した単語データをまとめたものとなる。そのため、会話調の回答を得ていなければ、実際にどのような文脈で、どう使用するのか、言語運用の様子をうかがうことは難しい。こうしたデータの特徴を補完するために、本論文では必要に応じて自然談話資料から得られた用例を援用する。基本的には調査員家族の日常会話や、話者との雑談中の発言、その地域の中で自然傍受法によって収集された用例が中心であるため、調査を目的として発言されたものではなく、また調査員の意図を介さず得られた言語資料となる。補足資料として、用法の整理、意味機能の枠組みの提案に活用した。

ⁱ 「梨の木」の表記は W・A・グロータース (1976) に従う。

ⁱⁱ 「病人その他不在の十人を除いた、六歳から七十七歳までの四十一人全員に二十五項目をたずねた」(W・A・グロータース 1976, p. 12) とされている。

ⁱⁱⁱ 言語史の詳細な解説は原文(徳川 1976)を参照して頂くこととし、ここでは割愛する。

^{iv} 徳川 (1993) によると、糸魚川調査地点数は 186 地点で、そのうち 3 回の調査とも同一の話者に当たる事が出来た地点数は 106 地点 (57.5%) であるという。同一の話者にあたる事が出来なかった理由として最も多かったのは死亡であり、その他病気や老衰、不在などの理由が挙げられている。「第 1 次調査と第 2 次調査が同一で、第 3 次調査が違う話者であった地点数は 24。第 2 次調査と第 3 次調査が同一で、第 1 次調査が違う話者であった地点数は 43 であった」と報告されている。

^v 徳川氏はこの検証調査において、「以前の調査内容を話者が記憶しており、それ故に回答が同一となる」という可能性を否定している。その理由として、3 年前の調査の内容が話者の記憶に残っていた例が「極めて希」であり、「この前はこう答えましたが……」式の発言は、私の経験ではたった 1 回しか聞けなかった。前回の調査の教育効果は無視していいと思う。」との見解を示している。

^{vi} 徳川 (1993) では「ものもらい(麦粒腫)」の他にも「かまきり」や「押し切り鎌」などの例も示して解説しているが、ここでは語の種類全てで共通して取り上げられた項目「ものもらい(麦粒腫)」を代表に説明した。

^{vii} 話者や調査時間の都合上、必ずしも一対一による調査ではなかった。複数の年代の話者が同席したり、同年代の複数の話者が同時に調査に参加したりする調査地点があった。同席する話者の回答に影響を受けることが懸念されたが、回答時には一つ一つ実際に使用する言葉なのかを確認するよう心掛けた。また、話者も同席している他の話者の回答を聞き、自分が使わない表現である場合ははっきりと使用しないことを明言していたため、これらの回答を信頼することとした。

^{viii} 具体的には老年層は調査年において 70 歳以上(生年が昭和 20 年以前)の方、壮年層

は 50 歳～69 歳（生年が昭和 40 年～昭和 21 年）の方，中年層は 30 歳～49 歳（生年が昭和 60 年～昭和 41 年）の方，若年層は 15 歳～29 歳（生年が平成 12 年～昭和 61 年）の方を対象とした。話者条件では若年層の条件を 15 歳以上としていたが，矢上でこの年齢に満たない話者から協力を得た（ygm14）。ygm14 は 3 世代で暮らす少年であり，文章読解能力や調査者からの問いに対する回答が的確であったことからインフォーマントとして問題がないと判断し，掲載している。

^{ix} 通信調査の性格上，回答者の生年については厳密に守られていない。2014 年 10 月 28 日時点における最も若い回答者は 1960（昭和 35）年生まれとなっている。

II. 本論

第3章

九州北部地域における方言の動態

3.1 本章の目的

本章では、長崎街道グロットグラム調査で収集した方言データをもとに、語彙項目および文法項目における方言の地理的・世代的分布の現状を概観する。調査結果をグロットグラム図として描き出すことにより、まずは九州北部地方におけるグロットグラム調査によって得られた言語情報を整理し、現在の当該地域における方言の分布状況を明らかにする。また、各項目の結果を『日本言語地図』などの先行研究と比較することにより、方言の地理的、世代的分布がどのように変遷しているのか、言語の動態を可視化し、考察する。

3.2 分析対象データ

本節で分析対象とする項目として、語彙は「ものもらい」、「神主」「お坊さん」、「かさぶた」「柿のへた」「亀の甲羅」に関する調査結果をまとめ、文法については「塩味が濃い」「塩味が薄い」を利用した形容詞イ語尾・カ語尾に関する考察を行う。

これらの項目を採用した理由は、『日本言語地図』や『九方基』など主要な言語地理学的先行研究において採用されている項目であることから、比較が可能であることに基づく。また、項目ごとの分析データに関する補足情報として、「亀の甲羅」に関する設問では、補足的に「蟹の甲羅（生物）」「蟹の甲羅（食後）」も口頭で質問をした地点が含まれるため、同じ「甲羅」を指す表現についてその区別がおこなわれるかどうかについても明らかにするべく、これらの結果についても補足的に言及する。また、形容詞のイ語尾・カ語尾に関する地理的分布の分析には、本調査で立項した「面白い」「美味しいよ」の項目の結果も援用する。

3.3 九州北部方言の地理的・世代的分布の概観

(語彙項目に関する調査結果)

3.3.1 「ものもらい」

「ものもらい」は細菌感染が原因で瞼が腫れ上がる症状の俗称で、学術的には「ばくりゅうしゅ麦粒腫」と呼ばれるものである。「戦前は誰しものが経験したもの」(佐藤監修 2002)とされる症状であることもあり、全国各地に多様な名称が存在、分布する。方言の調査項目としても広く採用される項目であるため、各地の方言調査でも報告される方言調査の基礎語彙と言える。

国立国語研究所の『日本言語地図』(以下『LAJ』と表記する。) ⁱでは「ものもらい」の全国調査結果をみることができる。九州北部地方とその周辺地域の結果を把握するため、図 3-1 に引用・作図したものを示す。

『日本国語大辞典 第二版』(2000-2001, 以下『日国』と表記する。)における「ものもらい」の項には「全国的に多様な表現が見られるが、コジキ類(モノモライ・メコジキ・メボイト・メカンジンなど)、メイボ類、メバチコ類、その他に大別できる。」との記述があり、『LAJ』における九州北部地方ではコジキ類、メイボ類、その他の類を確認することが出来る。

「ものもらい」をモノモライという言い方は、元は関東を中心とした表現であり、これが共通語として全国的に認識されるようになった。モノモライは文字通り「物貰い」を表すが、この名称は民間療法や地域の俗信が出自であると考えられている。「ものもらい」を患った人は、他所の家から米や穀物などの食料を貰って回ると治るといった民間療法が言い伝えられており、こうした行為から命名につながったものと言われている(佐藤監修 2002・鳥谷 2009)。物を貰って回る人のことを指す語としては、モノモライの他にもコジキ(乞食)やホイト(陪堂)、カンジン(勧進)などがある。ホイト、カンジンはいずれも仏教用語において食べ物を貰って回ることを言いさしたものだが、時代を経て「乞食」を指す言葉となり、こうした用語がそのまま方言へと定着した結果とみることができる。

また、福岡県、佐賀県、大分県、熊本県において広くインノクソが用いられていることが目を引く。インノクソは「犬の糞」のことである。福岡県には「インノチョンボ」(犬の男根)も確認されている。これらの表現は「ものもらい」が忌み憚られる存在であるという禁忌としての発想に由来するものと考えられる。インノクソやインノチョンボは蔑称的な表現を出自にするものだが、オヒメサン(お姫様、福岡県・熊本県)やオキヤクサン(お客さん、佐賀県北部)、オトヒメサマ(乙姫様、福岡県西部、岡野 1987)など丁重に扱われるべき存在を名称として採用す

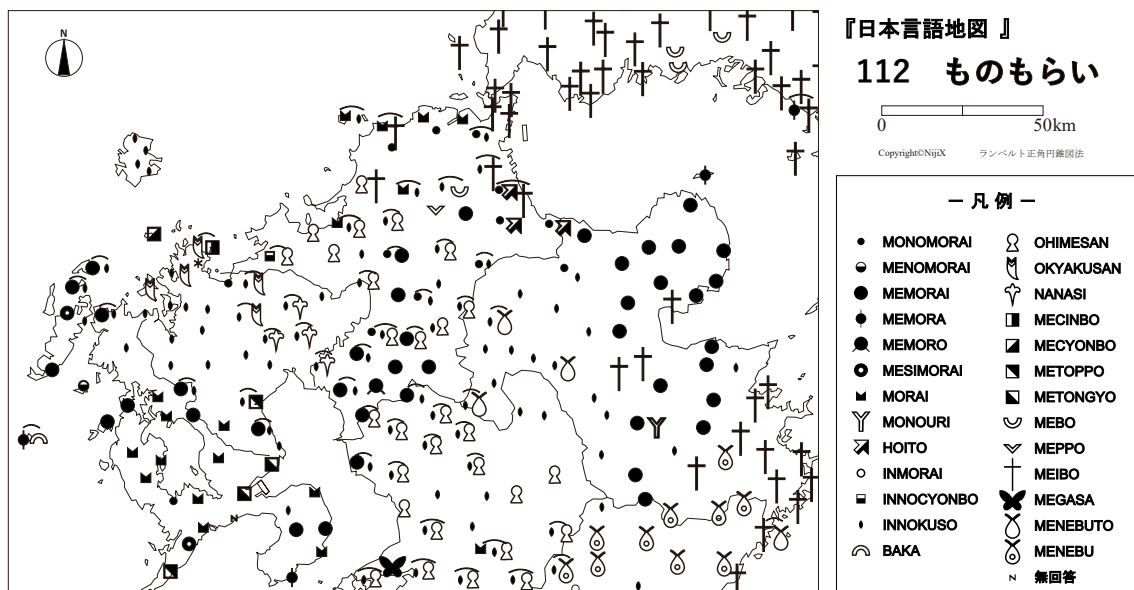


図 3-1 「ものもらい」(『LAJ』第 112 図より作図)

る地域もある。同じ“禁忌”を連想しつつも、畏敬の念を示す相手を想定した名称はインノクソ類とは対極の発想に基づくものである。

『LAJ』における「ものもらい」の分布を見てみると、近畿中央部にメバチコ類、その周辺にメイボ類、その外側にモノモライ類が分布する結果となっている。京都に都があった時代、そこが言葉の発信源であったことから、モノモライ(旧)→メイボ→メバチコ(新)という言葉の変遷をたどってきたということが言えるだろう。

今回の調査結果(図 3-2)と図 3-1の「ものもらい」に関する表現の地理的分布を比較してみると、福岡県下で広くメイボが用いられていることがわかる。1986年に調査がおこなわれた岡野(1987)の「ものもらい」項を参照すると、老年層と若年層の両地図においてメイボ類の使用が確認されるが、その最南端は福岡市内から嘉穂郡嘉穂町にかけてのラインである。今回の調査では、メイボの分布は小倉から原田にかけて確認されていることから、『LAJ』や岡野(1987)の調査当時よりもその分布範囲を拡大させたことが判明した。

また、佐賀県の40代以上の世代では様々な方言形が確認されたことが特徴的である。まず『LAJ』と共通して安定した分布を示しているのはインノクソである。この語形については、小学生当時に使用しており今現在は使っていないとする人もみられたが、塚崎・嬉野の地点で20代での使用を確認することができている。もとは福岡県下でも広く使用されていたインノクソであるが(図 3-1)、図 3-2の結果を見る限り、わずかに木屋瀬の50代に1件が確認されるのみで、福岡県下で

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉								
2	黒崎								
3	木屋瀬								
4	飯塚								
5	内野								
6	山家								
7	原田								
8	田代								
9	轟木								
10	中原								
11	神崎								
12	境原								
13	佐賀								
14	牛津								
15	小田								
16	北方								
17	塚崎								
18	嬉野								
19	彼杵								
20	松原								
21	大村								
22	永昌								
23	矢上								
24	日見								
25	長崎								
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

- | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|------|
| ┌ | モノモライ | ▽ | イボ | ✳ | ニガネ |
| ┐ | モンモライ | ◇ | メイボ | ㇿ | デキモノ |
| ⊙ | モライ | ㇿ | ナイワザ | ㇿ | デキモン |
| ⊖ | モラエ | ㇿ | ナイワズ | ▷ | メツンゴ |
| ● | メモライ | ◇ | カンジン | ▷ | メバチコ |
| ● | ミモライ | ◇ | インノクソ | ⊙ | メトツポ |
| ⊙ | メモリヤー | | | | |

図 3-2 「ものもらい」

はほとんど廃れてしまったようである。メトツポは『LAJ』の分類に従うならば「メ
 チョンポ（目+男根）」に由来する語形である。嬉野の全世代と神崎の50代にその
 回答が得られた。このほか北方80代からご教示頂いたナイワザ・ナイワズはかな
 り古形のようなものである。以下に志津田（1971）と原田（1981）の「ないわず」に
 関する記述を引用する。

○志津田（1971）項目「ナイワズ」 p. 378

「ナイワズ」というのは「ナリワヅラヒ（成り煩ヒ）」の略であろう。佐賀では、
 「男は女の、女は男の、オトボーに荒神ヘツターのスサをとらせて、それにつ
 かせるとなおる」という迷信があるⁱⁱ。つまり、それに刺激を与えれば効果があ
 るのであろう。

○原田（1981）項目「ないわず」 p. 120

（なりわずらい）麦粒腫。ものもらい。お姫さん。＝めちんぼ。✳男の
 ないわず

は女の末子，女は男の末子に，荒神さんのへっついのすき（かまどの切り藁）を取らせて，腫物をつつくと治るといふ。その時「きれいな所にすそ一な（粗相）ものが出来まして，恥と思えば，引っこめ，ひっこめ」と三回唱える。

「ものもらい」の民間の治療法に関して尋ねた中には「釜戸の赤土の藁を利用して，涙腺をつつく。〈nkb75〉」という情報も得られており，古くは北方以外の他の地域でも上記引用にみられる風習がおこなわれていたとみることができよう。しかしながら，この俗説は今やほとんど知られていない。

嬉野と彼杵を境に，長崎県下ではメモライ類が安定した分布をみせている。この結果もまた『LAJ』に示される所とほとんど違いは見られない。この分布の隔たりの要因としては，嬉野と彼杵の間にある山地（高見岳，飯盛岳，俵坂峠，多良岳）が考えられる。嬉野から鹿島（佐賀県鹿島市）にかけて有明海沿いに南下し諫早に至るルートは，筑紫平野の延長にあるためかなだらかな地形となっている。他方の嬉野から彼杵（長崎県東彼杵郡）に至る道のりにはこれらの山地が立ちはだかっているため，人の往来は容易ではない。旧藩の区画も嬉野と彼杵の間にあり，諫早は佐賀の鍋島藩に属していたことも考慮すれば，上村（1973）に鹿島方言と諫早方言の共通性が言われるのも，地理的要因によるものが大きいだろう。

この「ものもらい」の項目において注目すべきは，福岡県から佐賀県にかけて若年層を中心に共通語形が大多数で確認されたことである。特に30代以下と40代以上とでその差が明らかである。若い世代では，共通語形のモノモライの回答以外にも，デキモノ・デキモンなど，「ものもらい」という特定の症状を指す言い方ではない回答も多くあった。話者の中には「ものもらい」を患ったことがないため，その症状の名前を知らないという人も少なからずいた。佐藤監修（2002）で述べられているように，衛生面や健康状態の管理が行き届いた環境が整っている現代では，昔ほど「ものもらい」は身近な病気ではない。また，医学的知識に基づいた治療法も確立されており，人々の「ものもらい」という病に対する危機意識は“禁忌”と見做すほどのことでもないのであろう。言葉に執着する必要がなくなった人の言語体系では単純化が進められるため，「ものもらい」の語彙における共通語化の実態を如実に表す結果となった。

また，「ものもらい」の治療方法について問うたところ，様々な方法が確認された。髪の毛で涙腺を刺激する類^{なぐい}や，櫛を摩擦して温めて患部に当てるといふような櫛を利用したものが多かった。「ものもらい」の方言名としてオヒメサンやオトヒメサマといった姫（女性）にまつわる語彙もあることから，櫛や髪の毛を用いる方法は女性との関係を思わせる。

このほかにも，金物（刃物の反対側）や小石，小豆，息や風を患部に当てる方法や，水やお茶を使って目を洗浄するなど，直接的に患部を刺激する方法が多く確認

された。「ものもらい」は細菌感染によって発症するため、息を吹きかけたり患部を刺激したりすることで、涙を誘発し目の洗浄を図ったものと考えられる。水やお茶を使った例も同様であろう。また、「ものもらい」の症状として瞼が腫れ上がることから、金物は患部を冷やすのに有効であろうか。小石や小豆は一度患部に当てて地面に置いたり、井戸に落としたりする動作から、小石や小豆を「ものもらい」に見立ててそれを落とすことで早期の治癒を祈ったものと考えられる。

患部を刺激しない方法としては、「ショーケ（笹筥）を半分井戸に見せる。治ったら全部見せる（祖父談）〈tsr80〉」や「仏壇に供えられた米を貰って食べる〈tks29〉」「食べ物を下にして食べる、下に置いて取って食べる。〈omr31〉」などがあった。概ね、老年層以上の世代で聞かれた方法であり、まじないのような方法であるため、今はおこなわないものがほとんどのようである。

3.3.2 「神主」と「お坊さん」

本節では「神主」および「お坊さん」の項目についてその調査結果を考察する。

「神主」では共通語形のカンヌシ（神主）と、神社の長官を意味するグージ（官司）が全域で確認された。カンヌシⁱⁱⁱは「カミ（神）ノ（助語）ウシ（大人）の約」（『日本古語大辞典』1930, p466 下段）とされ、同書には「神に奉仕する神部の主

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1 小倉				+				+
2 黒崎		+						+
3 木屋瀬								+
4 飯塚								+
5 内野								+
6 山家								+
7 原田								+
8 田代								+
9 轟木								+
10 中原								+
11 神崎								+
12 境原								+
13 佐賀								+
14 牛津								+
15 小田								+
16 北方								+
17 塚崎								+
18 嬉野								+
19 彼杵								+
20 松原								+
21 大村								+
22 永昌								+
23 矢上								+
24 日見								+
25 長崎								+

/	シンカン(サン)	○	グージ(サン)	田	オミヤサン	☆	ジンジャノヒト
∨	シンショク(サン)	◇	ゴンネギ	■	ジンゲー(サン)	◎	ギョージサン
^	シンジサン	◇	ネギ(サン)	☆	シンジャ	■	ゴーシャ
+	カンヌシ(サン)	○	オカミサン	☆	ジンジャンカタ		

図 3-3 「神主」

長の意で、總ての神職を神主といふのは後世の轉義である。」(同上)と記述されている。共通語として認識されているカンヌシも元はある特定の役職の長を指す言葉であったことがわかる。グージ、ネギ(禰宜), ゴンネギ(権禰宜)は神社の中での位を表す言葉だが, その区別をもって使用している人は少数であった。

ジングー(神宮)〈oda24〉〈mtb68〉, ゴーシャ(郷社)〈ktk80〉, オミヤ(御宮)〈ucn35〉は神社そのものの呼称を当てはめている例である。この「郷社」という名称は神社社格の一つであり, 1871年(明治4年)の太政官布令によって神社の体系的な序列化が行われた際に, 「諸社」に格付けされた神社のうち, 県社と村社の間に位する神社に与えられたものである(『日国』【社格】)。『日国』では「郷村の産土神(うぶすながみ)をまつる社。」と説明される。既に1946年に廃止された制度だが, 現在もなおその神社の格を表す名称として用いられているものである(多米・吉田2007)。

「神主」という役職の人物を言い表す際にその人物が勤める場所や建物の名称を使用するのは, 直接的にその人物に言及しないことで「聖なるものを敬して遠ざける“敬避的”な遠隔化」(滝浦2008)がおこなわれ, 聖性の保持が実現するためであろう。

原田で確認されたオカミサン〈hrd61〉の表記は「御上さん」であるという。「上(かみ)」の字には天皇や殿様など, 人間関係における上位者, また社会的地位が高い人物を指す意味と, 程度や等級が上位であることを表す意味などがある(『日国』の項目「かみ【上】」参照)。自分たちとは異なる高位な人物として「神主」を扱う名称である。

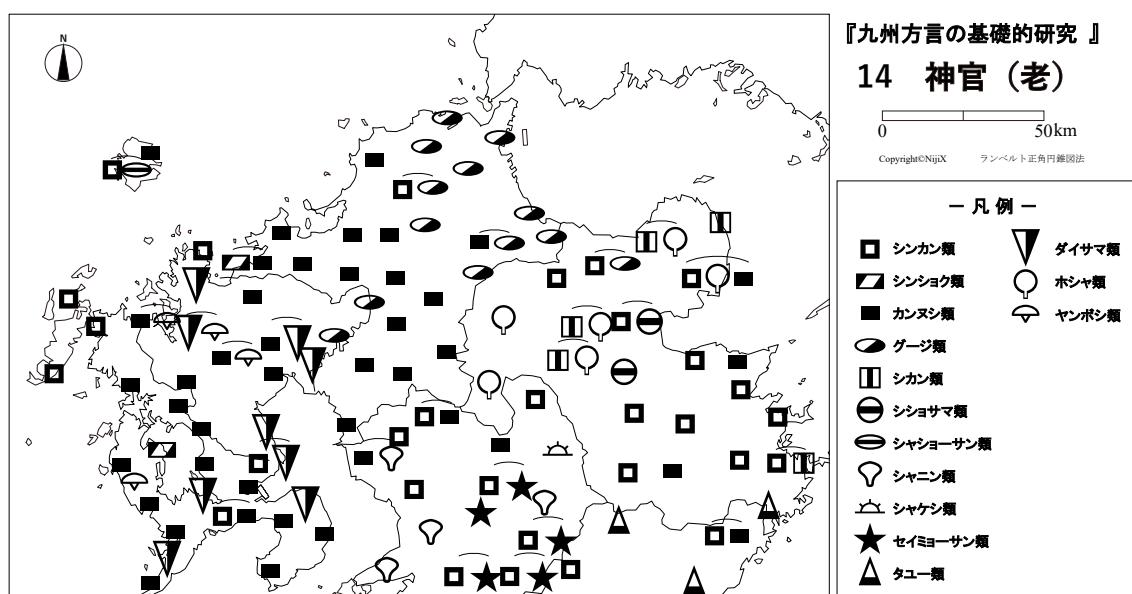


図 3-4 「神官（老）」(『九方基』 p.181 より作図)

今回の調査結果と 1960 年代初頭に調査された『九方基』の「神主」の言語地図^{iv}と比較すると、『九方基』の結果よりも今回のグロットグラム調査の方がグージの分布域がかなり広いことがわかる。図 3-4 は 1960 年代当時 60～75 歳である人々の結果であるため、ダイサマ類やヤンボシ類の使用は衰退し、カンヌシやグージといった表現に移行していったものと考えられる。また、グロットグラム調査は世代調査であるため、グージが老年層から若年層まで浸透している様子を明らかにすることが出来た。若年層における「神主」を言い表す語形の未習得が気になりとなるものの、この先しばらくカンヌシとグージの使用が広くみられることになるであろう。

続いて「お坊さん」についてその結果を考察する。「お坊さん」の全域的な分布としては共通語形のオボーサンである。ジューショク（住職）の名称も地域に関わらず老年層を中心として広くみられるか。「お坊さん」の語形分布に関しては、その地域で主要な宗派が何なのかに依拠する部分大きい。

小田（2003）では宗教地理学的研究として、日本国内の宗教人口に関する資料から都道府県別の宗派分布図を作成している^v。小田（2003）に示された北部九州を見てみると、福岡県・長崎県において最も多く分布しているのは「浄土宗系」であり、佐賀県は「禅宗系」であるとの結果が示されている。

この地理的分布を踏まえてみると、確かに、佐賀県下に禅宗の「お坊さん」の呼び名であるオショーサン（和尚さん）の分布が多いことがわかる。

「神主」は神道、「お坊さん」は仏教に関わる呼称で異なる宗教に基づく言葉だが、地域の人々にとってはいずれも「神仏に関わる神聖な職業」であるという点は変わらない。「神聖なものに対する呼称」を考える際の発想は、両者に共通性がみられた。例えば、建物や部屋の名前がそのまま呼称となる例や、元は役職を表す言葉がその区別が失われて神主やお坊さんの総称となった例などを「神主」「お坊さん」の凡例で確認することができる。

「ものもらい」の時と同様に、ある特定の職業につく人を言い表す単語を使わず（知らず）、「神社の方」「お寺の人」という説明的に述べた回答が少数ながら確認された。物事についてずばりそれを言い表す単語がないということは、その単語がその人の言語体系に含まれなくても問題はないということの表れなのではなかろうか。例えば、新潟県北蒲原郡では「新しく積もった雪」をワカエギ、「雨混じりの雪」をボタ、「サラサラした雪」をハシラギユキと言うなど、雪の状態を細やかに言い分ける。雪が身近なものとして生活をしている人たちにとっては、雪がどういう状態であるのかが重要な情報となるため、このような情報を含んだ単語を創出するわけである。

これに倣えば、「神社の方」や「お寺の人」のような説明的な言い方は主に若年

層で確認されたことから、少なくとも現時点で彼らの生活では「神主」「お坊さん」

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉				0	∩		∩	△
2	黒崎		0		∩	0		△	
3	木屋瀬		0		0	●	△	△	∩
4	飯塚		∩		0		0	∩	
5	内野		0		∩		∩	∩	
6	山家		∩		0		∩		∩
7	原田		0		∩		∩	∩	
8	田代		0			∩	∩		∩
9	轟木				∩	∩	∩	∩	
10	中原		0		0		∩	∩	
11	神崎				∩	∩		∩	
12	境原		0		0		∩	∩	
13	佐賀		0		∩		∩	∩	
14	牛津		∩		0		∩	∩	
15	小田		0		∩	∩	∩		∩
16	北方	∩	∩		0		∩		∩
17	塚崎		0		0		∩		∩
18	嬉野		0		0	∩		∩	∩
19	彼杵		∩	∩	∩		∩	∩	∩
20	松原			0			∩	∩	∩
21	大村		0	0			∩	∩	∩
22	永昌		0		0		∩	∩	∩
23	矢上	∩			0		∩	∩	∩
24	日見		∩		0		∩	∩	
25	長崎		0				∩	∩	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

- | | | |
|-----------------|----------------|-----------|
| ∩ オテラサン | 0 (オ)ポーサン | ▲ ゴインゲ |
| ∩ オテラノヒト | ∩ ボツサン | ▲ ゴインゲン |
| ∩ ソーリヨ | ∩ (オ)ボンサン | ▲ ゴインギョー |
| ∩ (ゴ)ジューシヨク(サン) | ∩ ボーモリサン | ▷ ゴインシュサマ |
| ∩ センセー | ∩ ボンモリサン | ● オシヨーサン |
| ● ポーズ, ポンズ | ∩ ホージョーサン | |
| | ● (オ)シヨーニン(サン) | |

図 3-4 「お坊さん」

といった概念を表す必要性は無いのであろう。世帯をもち、子供が生まれるなどすれば通過儀礼を経るために神事や法事に関わる機会を持つこととなり、そうした際に語彙を習得することになるのかもしれない。

3.3.3 「かさぶた」「柿のへた」「亀の甲羅」

本項では、「かさぶた」「(柿の)へた」「(亀の/蟹の)甲羅」の項目について取り扱う。

これらの3項目は“硬いもの”という点で共通性があるためか、清水編(2015, pp. 22-26)では九州地方の老年層(65歳以上)の「蟹の甲羅」「柿のへた」「かさぶた」の項目において共通する形式「ツ(一)」が用いられていることが報告されている。佐賀県ではこのほかにもツを多用するとされ、「一斗枘」や「つーむし」(甲虫)、「たんつー」(タニシ)などがあるとされる(福山 1981・志津田 1998)。長崎県下でも「かさぶた」が広い分布を示すほか、「鱗」や「お釣り」の用例が示

されている（原田 1993）。これらの先行研究にみられるツ（一）のバリエーションは佐賀県と長崎県で多く共通点がみられるようである。

ここでは、各項目の形式の共通性に着目しつつ、地域差および世代差を明らかにする。

3.3.3.1 「かさぶた」

福岡県下に広がるト（一）類と佐賀県・長崎県下に広がるツ（一）類とで分布の境界線があるようで、飯塚-山家間はその中間域となっておりこれらの両方の形式が使用されている。

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1 小倉				☉				☉
2 黒崎		┌		┌			┌	
3 木屋瀬		┌		☉			☉	
4 飯塚		┌		┌		☉	☉	
5 内野			☉	☉		☉	☉	
6 山家		┌		┌		☉	☉	☐
7 原田		┌		┌		☉	☉	┌
8 田代		☐			☐			┌
9 轟木					*☐		☐	☐
10 中原		┌		☐		☐	☐	
11 神崎		☐		☐	☐		☐	
12 境原		┌		☐		☐	☐	
13 佐賀		┌		☐		☐	☐	
14 牛津	☐	┌		☐		☐+	☐	
15 小田		☆☐		┌		☐		┌
16 北方	☐			☐		☐		┌
17 塚崎		☐		┌		☐		☐
18 嬉野		┌		☐		☐	☐	
19 彼杵		☐	☐	┌		☐	☐	☐
20 松原			☐			┌	☐	
21 大村		┌		┌		☐	☐	
22 永昌		☐			☐	☐	☐	☐
23 矢上	┌			┌			┌	
24 日見		┌		☐			☐	
25 長崎			☐	┌		☐	☐	
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

┌ カサブタ ☐ カサツ ☉ ト ♪ チマメ
 ┌ カサ ☐ ツ ☉ トー ☆ ヒザコゾー
 ㄣ カサクレ ☐ ツー * チダマリ ☐ ステーキ

図 3-5 「かさぶた」

ツ（一）の分布域では老若に関わらず全世代で使用されており、そのかなり安定して用いられているとみられる。特に佐賀県下でのツーの使用は根強く、様々な名称に用いられている。志津田（1971）は「ツー」を立項し「佐賀では、亀や蟹の甲羅のことを「ツー」といい、また、「柿ノヘタ」や「カサブタ（瘡蓋）」や「切傷ノ血漿痕」などをも「ツー」といい、従って、「役ニタタナイモノ」を「ツー」「ガンツー」というのである」（p317 上段）と解説している。

上述の志津田氏の「切傷ノ血漿痕」にも表れているが、「かさぶた」の状態によって表現の区別がおこなわれるとの内省も得た。「ステーキは大きくて分厚いカサブタを指す。」〈krs41〉、「ツは掻きむしりからの出血が固まったときなど、小さいかさぶたを指す。」〈ygm71〉などの意見があり、共通語形のカサブタとの使い分けもみられる。

カサツー〈usd66〉は、ツーとの併用で回答されており、カサブタとツ（一）の混交形であると考えられる。件数は牛津の1件のみであるが、今後の動向が注目される語形である。

福岡県下の方言形として主だったト（一）類は「頭」を出自にする語形であろうか。『邦訳日葡辞書』（1980）（以下、『日葡』と表記する。）には、以下のように記述されている。

- Tô. トウ（頭）Atama（頭）に同じ。頭。ただし、複合語としてでなければ用いられない。例、Gito（地頭），など。『また、膿疱や瘡のかさぶた。▶次条。
- †Tô. トウ（とう）瘡のかさぶた。『Toga vochita（とうが落ちた）かさぶたがとれる。

（『日葡』p. 650）

福岡県下に分布するト（一）について、まず浮かぶのは「痘（とう）」の表記であろうか。「痘」は「天然痘」「水痘」などデキモノが出来る皮膚病を指す漢字である。モノモライが験にできるとイボができるため、この漢字が当てられト一と呼ばれるようになったとも考えられる。また、推論の域を出ないが、「頭」のトウに由来すると考えれば、「頭→上（転じて、表層）にある硬いもの」として「かさぶた」を言い指すようになったのではなかろうか。この類推は柿のへタにも通用するであろう。志津田（1998）には「思うに、佐賀では、「ドー」という発音を、「ツー」と発音することが多い。例えば、「胴体」を「ツーチャー」といい、また、北茂安町に「道瀬橋」という橋があるが、それを「ツーセバシ」、また、背振山の一部に「ツーベット山」というものもある。」との記述もあり、「かさぶた」のツ（一）に関しても「頭（トウ）」の音韻変化の結果と考えられるのである。

ト（一）の分布は原田まで確認することができる。清水編（2015）ではト（一）の分布は福岡県中央部から北部にかけての広い範囲と大分県北部一部地域にみられることから、現状として、福岡県北部に分布する形式であるようだ。古形であるため、その使用には世代差がみられる。

3.3.3.2 「柿のへた」

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉								
2	黒崎		ゝ		ゝ			ゝ	
3	木屋瀬		ゝ		ゝ			ゝ	
4	飯塚		ゝ		ゝ			ゝ	
5	内野		ゝ	ゝ				ゝ	
6	山家		ゝ						ゝ
7	原田		ゝ		ゝ			ゝ	
8	田代		ゝ						ゝ
9	轟木				∞		∞	□	□
10	中原		ゝ					□	
11	神崎				ゝ	ゝ			
12	境原		ゝ					□	
13	佐賀		ゝ	∞				∩	
14	牛津	∞		ゝ				ゝ	
15	小田		ゝ				∩		□
16	北方	ゝ			ゝ		ゝ		□
17	塚崎		ゝ			ゝ			◇
18	嬉野		∩		□				◇
19	彼杵		ゝ	☾			ゝ	□	◇
20	松原			ゝ				ゝ	
21	大村		ゝ	ゝ					□
22	永昌		ゝ					ゝ	
23	矢上	ゝ			ゝ			□	
24	日見		ゝ					□	
25	長崎		ゝ					□	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

- ツ
- ツー
- ◇ カキノツ
- ◇ カキンツ
- カツ
- ゝ ヘタ
- ∩ フタ
- ∩ クキ
- ∞ シン
- ☾ ヘソ
- ♯ ハツパ

図 3-6 「柿のへた」

ツ（一）が依然として勢力を保っていた「かさぶた」に対して、図 3-6 にみる「柿のへた」ではツ（一）がほとんど使用されない。

佐賀県下を席卷していたツ（一）は「柿のへた」を表す言い方になると、田代から長崎にかけての 60 代以上と嬉野・彼杵の 30 代以上という分布を示す。また、ツ（一）を用いるにしても、カキノツやカキンツ、カツにみられるように「柿の」という説明的要素が含まれてくるため、ツ（一）そのものが「柿のへた」を表すものではないのかもしれない。「ガザガザして固まっている状態のもの」(ktk80) をツ（一）と言うとの意見もあり、多くは「柿のへた」という区別に基づく呼称というよりも、硬いものやガサガサしているものといった特徴をもつものについてツ（一）と呼んでいる可能性も捨て切れない。

今回調査した話者の中には「へた」にあたる部分の名称を知らない人も一定数確認された。今回の調査が男性を対象におこなわれていることや、話者の住んでいる地域、世代などが関わってくるだろうか。今回の調査地点に関して、佐賀県・長崎県ではおおよそ平野部の地域または海沿いの町が多く、嬉野・彼杵のような山際の

集落は一部分である。清水編（2015）は通信調査ではあるものの、「柿のへた」でのツ（一）の回答は背振山系が位置する地域を中心にかなり確認されており、本研究の地点取りに左右された結果なのかもしれない。

3.3.3.3 「亀の甲羅」と「蟹の甲羅」

「甲羅」に関する語彙はほとんど共通語形のコーラ（甲羅）であった（図 3-7）。

40 代以上の世代で「甲」の字を音読みしたものと思われる語形コーが散見された。「甲」の基本的な意味として『日国』の第二義に「(2)表面の堅い部分。(イ)亀（かめ）、蟹（かに）などの体の外部をおおっている堅い殻」とある。『日葡』では次のように説明されている。

○ † Cô. コウ（甲）亀の背の甲，手の甲，その他それと同じような物の背。
（『日葡』 p. 132）

また、先行研究となる『九方基』には「蟹の甲羅」^{vi}で立項されている。「蟹の甲羅」は『九方基』では地図化されておらずデータのみでの公開であったため、このデータに基づき作成された言語地図集（木部 2002）を参考に図 3-8 を作成した。図 3-7 をみると、福岡県北部から中部にかけてはコーが分布し、田代以西はツ（一）類の分布領域であることがわかる。図 3-8 が『九方基』調査当時に老年層であった話者の回答結果であることを踏まえて図 3-9 との比較をおこなえば、当該地域で「蟹の甲羅」に関する分布はほとんどコーラに席卷されてしまっていることが明白である。

また、「蟹の甲羅」に関しては、生物としての「蟹の甲羅」を言い指す場合と、鍋物などの料理に入っていた蟹を食べた後に残る「蟹の甲羅」とでは、用いられる「甲羅」を表す語彙の優位性が異なることが明らかとなった。

生物としての認識をもった場合、「蟹の甲羅（生物）」はコーラのほか、コーヤツ一が散在し、彼杵地区にカラとガラのとまった分布が確認されたのに対し、「蟹の甲羅（食後）」はカラやガラが圧倒的に優勢である。

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉								
2	黒崎								
3	木屋瀬								
4	飯塚								
5	内野								
6	山家								
7	原田								
8	田代								
9	轟木								
10	中原								
11	神崎								
12	境原								
13	佐賀								
14	牛津								
15	小田								
16	北方								
17	塚崎								
18	嬉野								
19	彼杵								
20	松原								
21	大村								
22	永昌								
23	矢上								
24	日見								
25	長崎								
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

- コー
- ◡ コーラ
- ◡ キャラ
- カメンコー
- ◡ コーリヤ
- ◡ ハフト
- カメノコー

図 3-7 「亀の甲羅」

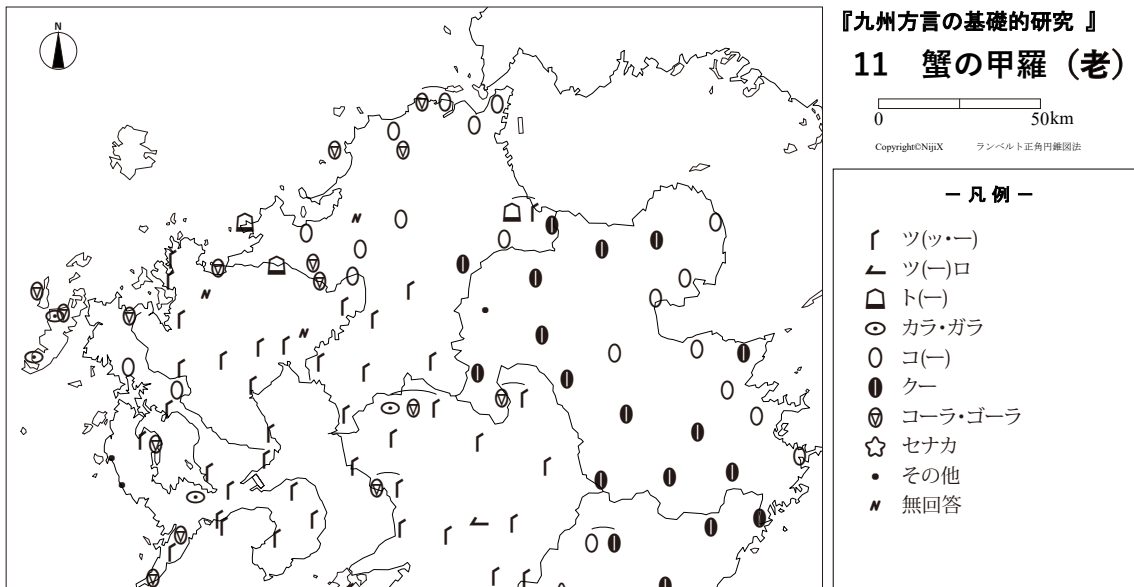


図 3-8 「蟹の甲羅」(木部(2002)より作図)

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉								
2	黒崎		☪		☪			☪	
3	木屋瀬		N		N			N	
4	飯塚		N		N			N	
5	内野			☪			☪		
6	山家		☪		N				N
7	原田		☪		☪		•		•
8	田代		N			N		N	N
9	轟木						N		N
10	中原		☪		☪		☪	▮	
11	神崎				☪	☪			
12	境原		☪		☪			☪	
13	佐賀		N		N		N	N	
14	牛津		☪		☪		☪	☪	
15	小田		N			N			N
16	北方	☪			☪		☪		N
17	塚崎			☪	N				☪
18	嬉野		N		N		N		N
19	彼杵			N	N		↑	↑	☪
20	松原			☪			↑	↑	
21	大村		☪	☪			N	N	N
22	永昌		☪			☪		☪	
23	矢上	☪			▮				
24	日見		☪		☪		☪	☪	
25	長崎		↑		☪		☪	☪	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

- カニノコー
- ☪ ガワ
- ▮ セナカ
- ☪ ガネノツ
- ↑ カラ
- わからない
- ▮ ツ
- ↑ ガラ
- N 無回答
- ▮ ツー
- ☪ コーラ

図 3-9 「蟹の甲羅（生き物）」

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉		↑		↑	↑		↑	↑
2	黒崎		↑		N			N	
3	木屋瀬		N		N		↑		N
4	飯塚		↑		N			↑	N
5	内野		↑	↑			↑	↑	
6	山家				N		↑	↑	
7	原田		↑		☪		↑		•
8	田代		N			N			N
9	轟木					N		N	
10	中原		↑	↑	↑		0	↑	
11	神崎				↑	↑		↑	
12	境原		↑		↑		↑	N	
13	佐賀		N		N		N	N	
14	牛津		↑		↑		↑	↑	
15	小田		N			N			N
16	北方	↑			•		☪		N
17	塚崎			☪	N		↑		↑
18	嬉野		N		N		N		N
19	彼杵			N	N		N	N	
20	松原			↑	↑		↑	↑	
21	大村		N	↑			N	N	N
22	永昌		↑		↑		↑	↑	
23	矢上	↑			↑			0	↑
24	日見		↑		↑		↑	↑	
25	長崎		N				N	N	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

- ☪ ガワ
- 0 カス
- ↑ カラ
- ▮ セナカ
- ↑ ガラ
- わからない
- ☪ コーラ
- N 無回答

図 3-10 「蟹の甲羅（食後）」

やはり、食後の蟹の甲羅については、「中身がなくなった後に残されたもの」という印象が優先されるのか、「抜け殻」などの意味を表すカラ・ガラ（殻）が用いられる傾向にあるようである。

3.3.3.4 「かさぶた」「柿のへた」「亀の甲羅」まとめ

3.3.3 ではツ（一）類という語形が共通して用いられる項目「かさぶた」「柿のへた」「亀の甲羅」について考察をおこなった。

全ての項目で概して共通語形の使用の拡大が進むなか、「かさぶた」における方言形の使用は依然として根強いものであることがわかった。

いずれの項目でもツ（一）という語形が用いられることが先行研究によって明らかにされているところであり、佐賀県の一部地域では“ガサガサした硬いもの”なら何でもツ（一）を用いるとの意見も聞かれた。しかし、「かさぶた」の意味でツ（一）を用いる全ての地域で、必ずしも「柿のへた」「亀の甲羅」のことをツ（一）と言うわけではないことから、地域によって語形の由来は異なるものと考えられる。

また、「甲羅」に関して、「亀の甲羅」か「蟹の甲羅」か、また、「蟹の甲羅」でも「生物」か「食材」かなど、異なる指標を設定することにより、より細やかな言葉の運用実態を明らかにした。これらの複数の項目についてグロットグラム調査を通じて世代差と地域差の観点からの分析を試みることで現代の語彙運用の実態に迫ることが可能となる。

3.4 九州北部方言の地理的・世代的分布の概観

(文法項目に関する調査結果)

3.4.1 「塩味が濃い」と「塩味が薄い」

「塩」は料理に欠かせない調味料の一つであることから、この塩味を言い表す方言は全国各地にみることができる。本項では、塩味の濃さに関する形容詞の語彙「塩味が濃い」「塩味が薄い」の調査項目^{vii}について、語形と地理的分布について考察をおこなう。

また、九州方言の特徴として、「フトカ」「サムカ」など形容詞の語尾に「カ」を用いるカ語尾形容詞と、「フトイ」「サムイ」など形容詞の語尾に「イ」を用いるイ語尾形容詞を使う地域が存在する。上村(1983)は九州方言について概説する中で「形容詞はカ語尾(肥筑・薩隅・杵岐)とイ語尾(豊日・対馬)に別れる(中略)最もカ語尾の濃い肥筑地方でも筑前東部、阿蘇地方はイ語尾であり、薩隅では、薩摩はカ・イ併用地が広く、大隅・諸県の大部分は断然イ語尾が優勢である。」と説明している。これらイ語尾・カ語尾の使用域は大別すると九州地方の東西に分かれているが、カ語尾使用域の中でも細かく見ればイ語尾使用域も存在しており、九州北部地方の長崎街道沿いでの分布についても世代差を含めこの点に着目したい。

3.4.2 表現形式の分布

「塩味が濃い」に関しては、『LAJ』第39図に1960年代の調査結果がまとめられている(図3-12)。当時の調査では、福岡県の北部から中央部にかけては本州と共通するイ語尾のカライ(KARAI)が分布し、博多以西はカ語尾のカラカ(KARAKA)・カルカ(KARUKA)類が分布している様子がわかる。

『日本大文典』(1604-1608)における塩味の表現は「xiuafayui(シワハユイ)」となっており、近世以降、「塩」の語音に牽引され「シオハユイ」に移ったとされる(佐藤監修2002)。『LAJ』では新潟県南端部、長野県と静岡県西部の地域を境に、その地域より東側がショッパイ類、西側がカライ類という東西対立をしている状況である。東日本に広く分布するショッパイ類は、上述の「シオハユイ」の変形であるとされ、さらに全国的にシオハイが点在してみられることから、これはかなり古い語形で古くは西日本においても広く用いられていた語形なのであろう。

佐藤監修(2002)では「塩味が濃い」の意味でカライ・カラカを用いる地域では、唐辛子の辛さとの言い分けが必要となるため、語頭にシオ(塩)を付けることで塩味に限定した表現のシオカライが発生したとの説を示している。全国的にみてみ

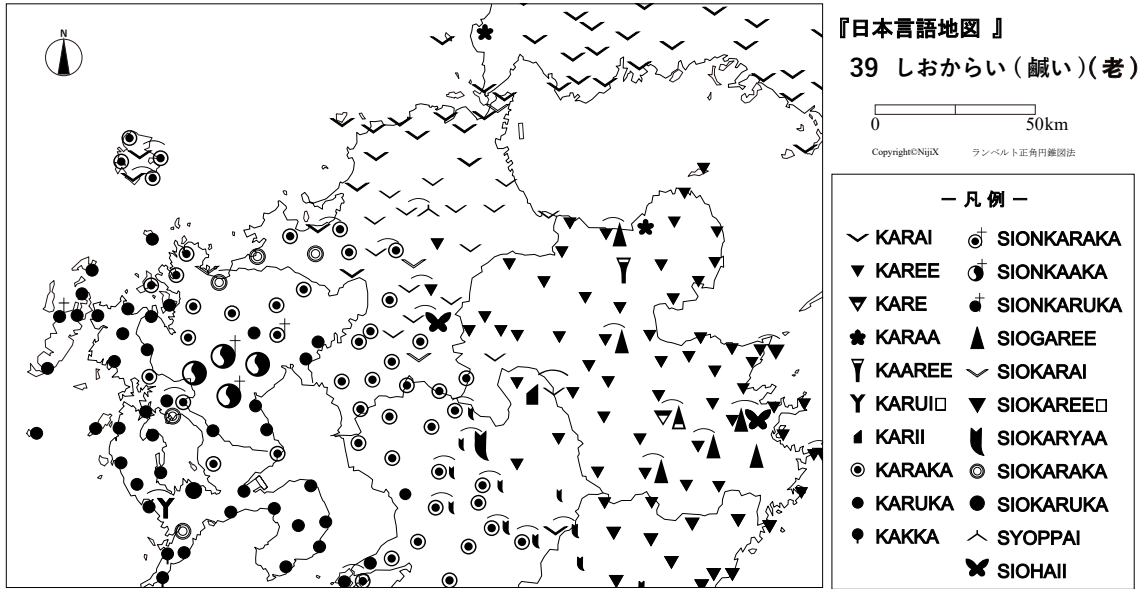


図 3-11 「しおからい(鹹い)」(『LAJ』第 39 図より作図)

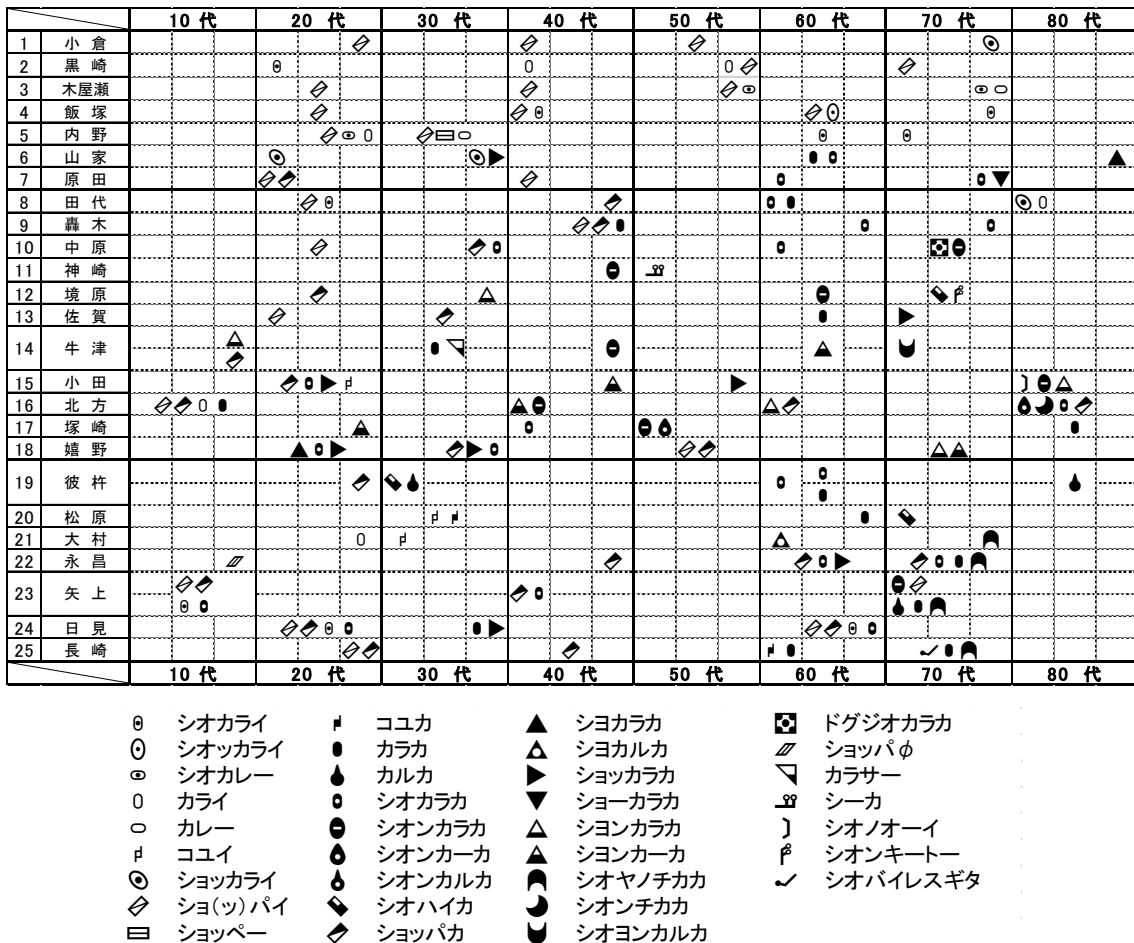


図 3-12 「塩味が濃い」

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1 小倉								
2 黒崎		⊖		○				
3 木屋瀬		◇		◇				
4 飯塚		◇		◇				
5 内野		⊖	○	○				
6 山家		⊖		⊖				
7 原田		◇		◇				
8 田代		⊖						
9 轟木				◇	○			
10 中原		◇		◇				
11 神崎				●				
12 境原		◇		●				
13 佐賀		◇		◇				
14 牛津		●		▽				
15 小田		◇	○					
16 北方	◇	○		○				
17 塚崎		●		●				
18 嬉野		⊖	◇	◇				
19 彼杵			◇	○				
20 松原			♯	♯				
21 大村			○					
22 永昌		◇		◇				
23 矢上	⊖			◇				
24 日見		◇	○					
25 長崎		◇		◇				
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

- ⊖ シオカライ形
- シオンカライ形
- カライ形
- ♯ コユイ形
- ◇ ショ(ッ)パイ形
- シオヤノチカカ形
- ⊖ ドグジオカラカ
- ▽ カラサー
- ・ その他

図 3-13 「塩味が濃い」(解釈図)

ると、シオカライ類は近畿地方・北陸や関東地方において多く分布するが、九州地方も例外ではなく、シオカラカを諸所で確認することができる。

本調査では「塩味が濃い」という場合の表現について、様々な語形を確認することができた(図 3-12)。図 3-13 は図 3-12 の語形について、イ語尾かカ語尾かは不問として形式別にまとめた解釈図である。図 3-13 において語形の系統をみると、ショッパイ形とカライ形、シオカライ形が全域、全世代で用いられていることがわかる。ただし、佐賀県では 30 代後半以上の世代でシオンカライ形の語形が多く、その中ではシオンカライ形の方がショッパイ形よりも優勢である。シオンカライ形の語構成は「塩(名詞)+の(主格の格助詞)+辛い(形容詞・カ語尾)」であり、シオノカライ(sionokarai)から連母音[io]の[yo]に音韻変化したシオンカライやシオンカライといった語形も多く確認された。

本項目で注目すべき表現はシオヤノチカカ形の分布である。シオヤノチカカは「塩屋(名詞)+の(主格の格助詞)+近い(形容詞・カ語尾)」である。シオンチカカはシオヤノチカカの類推か。シオヤノチカカを回答した話者からは、塩味の濃さを塩屋が近いか遠いか(シオヤノチカカ/トーカ)で表し、また類似の表現として、甘味についても砂糖屋が近いか遠いか(サトーヤノチカカ/トーカ)で表すと

いう。これは「塩味の濃さ」を表す語彙ではなく、比喩表現に相当する表現である。

愛宕 (1982) では長崎における「砂糖味がうすい」の表現方法について、この種の表現の発想を 13 の型に類型化している。

○愛宕 (1982) における「砂糖味が足りない」の表現型 類型

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| (1) 砂糖屋が遠い | (8) 土地(砂糖にかかわりのある)が遠い |
| (2) 砂糖屋の前を通り過ぎる | (9) 砂糖船が寄港しない |
| (3) 砂糖屋が通る | (10) 砂糖船が通らない |
| (4) 砂糖屋にさわりが生じる | (11) 砂糖船が沖を通る, 沖にいる |
| (5) 砂糖屋が来ない, 見つからない | (12) 砂糖船が難船する |
| (6) 砂糖が遠い | (13) 砂糖船が遠い |
| (7) 砂糖が高い | |

長崎街道は江戸時代に舶来の砂糖を江戸に伝えたことから別名「シュガーロード」とも呼ばれ、近世、その当時は船舶の玄関口である長崎を始発点とし、当時貴重な品であった砂糖は街道を通って各地に運ばれた。愛宕氏はそれまでの調査で「長崎県を中心に、関連して佐賀、福岡、大分の諸県をはじめ、点々とながら熊本、宮崎、鹿児島、鹿児島の諸県にも辿ることができる」との分布を示していることから、この「砂糖屋が遠い」の用法は長崎を始発として街道で繋がる各所に展開したものと考えられる。類型の(8)に相当する表現として「長崎が遠い」という例があるが、「砂糖」の代名詞として「長崎」を用いることは、長崎が砂糖に縁のある土地であると見なしているためであろう。「薩摩芋」の方言で、九州では唐(中国)から来たものという認識があるためトイモ(唐芋)と言い、同じ唐伝来の芋でありながら薩摩(鹿児島)を経由して広がった本州ではサツマイモ(薩摩芋)と言うのに似ている。人々は砂糖が長崎から来ることを知っていたため、「長崎が遠い=砂糖の入手が容易ではない」という発想に基づくものであると考えられる。

愛宕氏はこの表現の出自について、初出は料理を作る側(作り手)に由来する表現だったのではないかと分析している。慣用表現として定着してしまった今では、食べる側(食べ手)の感想を述べる際に使われるものだが、近世のその当時は、砂糖が高級かつ希少品であったため十分な量を使用することができなかったであろう。砂糖(屋)が「高い」「遠い」「通り過ぎた」など、砂糖が不足する理由を含んだ上で、それゆえに甘味が足りないのだという惜しむ気持ちをお菓子の作り手の立場から言った諧謔を弄した表現であるといえる。

今回の調査では「塩味」に関する表現であったが、上述した砂糖味に関する表現の過程を鑑みれば、「塩味が濃い」に関する表現は「砂糖味がうすい」の表現の転用によって発生したものなのではなかろうか。また、九州各地の沿岸地域では古くから製塩もおこなわれていたことから(「塩風土記」参照)、砂糖と類似した過程を経て慣用句が成立したとも考えられよう。広島大学方言研究会が 1998 年におこな

った絵の川流域方言調査では、「甘みが足りない」に相当する表現として「砂糖屋の前を通った」、「塩味が足りない」に相当する表現として「塩屋が遠い」という同種の表現が確認されており、これらが人の移動によって伝わったものなのか、または散発的に発生したものなのかを今現在特定することは出来ないが、方言を使った表現の奥深さを思わせる用例である。

「塩味が薄い」に関する調査結果で最も勢力が広く確認されたのは共通語形のウスイ・ウスカであった。図 3-14 に示す『LAJ』の結果とは大きく異なっており、経年変化が激しい様子が見て取れる。『LAJ』における全国的な分布をみると、中部地方以東や中国地方以西においてアマイ類が分布し、九州東部や高知、奈良・和歌山や関東地方などを中心にウスイ類が展開している。そして、近畿地方を中心にミズクサイ類がまとまって分布している。これらの状況から判断するに、最古の形式をアマイ類とし、その中で、近畿地方を中心としてウスイ類の発生と伝播が起り、その後新しくミズクサイ類が発生したことで今現在の分布状況に至ったものと考えられる。

九州地方における「塩味が薄い」について近世の『日葡』では次のような表記がみられる。

○ †Vsujiuo. ウスジヲ (薄塩) 少量の塩, または, 塩の薄い味. 例, Vsujiuono vuo.
(薄塩の魚)

(『日葡』 p. 734)

○ Amajiuo. アマジヲ (甘塩) Vsujiuo (薄塩) に同じ. 少量の塩, または, 塩味. 例, Amajiuono vuo. (甘塩の魚) 薄塩をした魚, または, 軽く塩漬にした魚.

(『日葡』 p. 22)

また、『日国』には「あまい」の対義語「からい」は古くは塩気が強い味覚を表わす語であったところから、「あまい」が「塩味が薄い」ことをも表わす。この意味で用いられている例は「万葉集」からみられ、現代方言でも、全国的にみられる。」との記述もみられ、その歴史が古いことがわかる。

砂糖の味を表す「甘い」との同音衝突を避けた結果か、福岡県の地点では一例もアマイ類が確認されなかった。岡野 (1987) に報告される「〈塩味が〉うすい」をみると、老年層図では福岡県下全域でアマイ類が確認されるものの、少年層図では筑後以外はウスイ類に移行してしまっている。この頃から、アマイ類の衰退とウスイ類の受容が進行していたとみられる。

アマイ類の語形が福岡県下で確認されなかった点を除けば、50代以上での語形

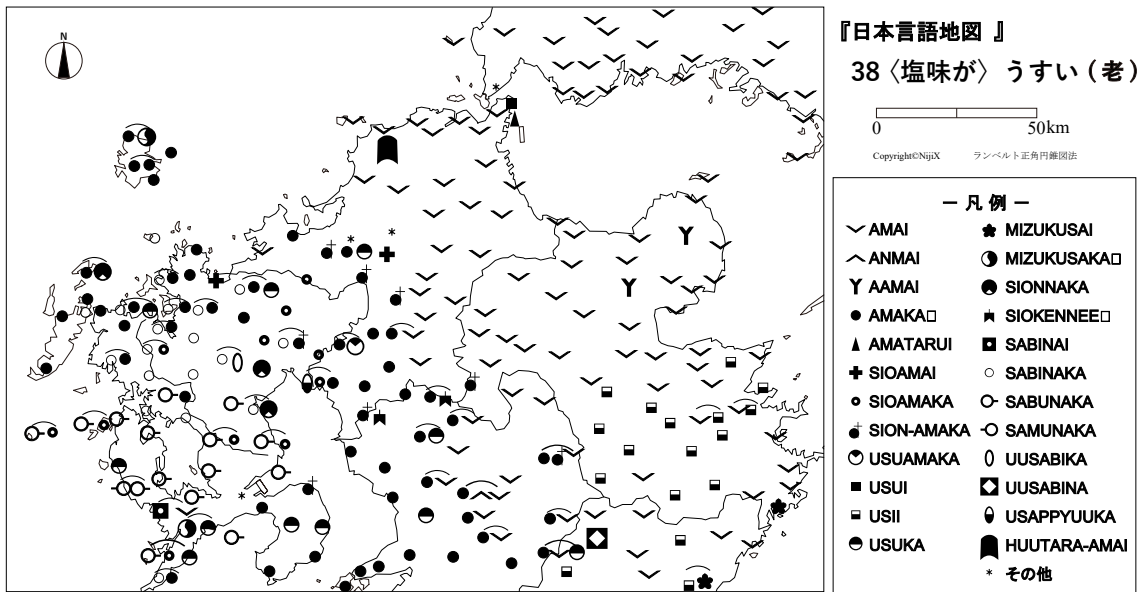


図 3-14 「〈塩味が〉うすい」(『LAJ』第 38 図より作図)

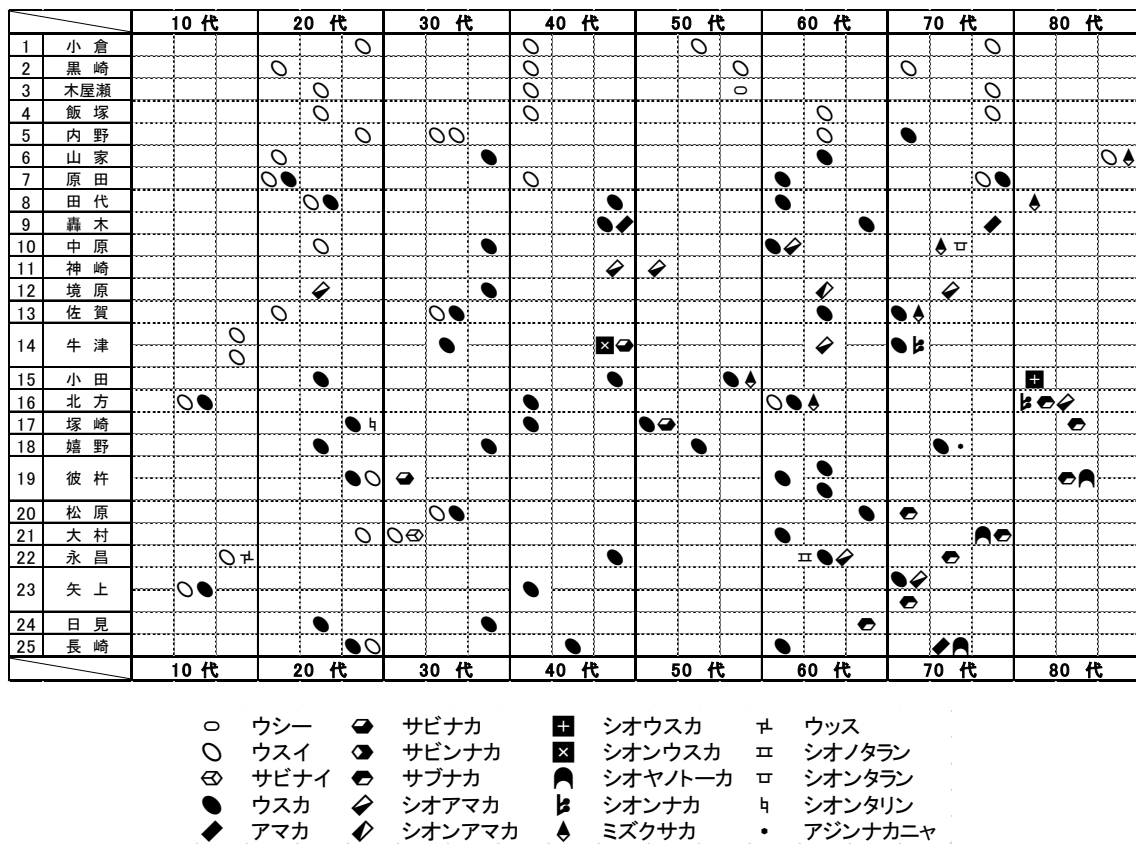


図 3-15 「塩味が薄い」

の分布は『LAJ』調査当時からほとんど変化していない。若年層ではいずれの地域もウスイ類しか確認されなかったことから、当該地域で方言形が維持されるかどうか、不透明な現状である。

3.4.3 形容詞イ語尾とカ語尾の地理的分布

続いて、北部九州における形容詞のイ語尾・カ語尾の分布を考察する。カ語尾とはカ語尾形容詞のことを指す。「カ」語尾形容語は、カリ活用方式をとり、未然形・未来形、連用形、終止形、連体形、已然形の各活用を有し（住田 1986）、「クロカ（黒い）」「アブナカ（危ない）」のようにして使う。

ここで取り扱う項目は調査票に立項された形容詞「塩味が濃い」「塩味が薄い」「面白い」「美味しいよ」であり、回答がイ語尾であるかカ語尾であるかを記号化し、図 3-15・3-16・3-17・3-18 に示した。1つの設問に対して、複数の回答が得られたものについては、その全てを記号化の対象とした。こうすることで、話者が使用する言葉のバリエーションに即した語形を示すことができ、同一人物内でもイ語尾カ語尾の併用がみられるのかについても検証を可能にした。過去形で回答されたものなど、イ語尾かカ語尾かが判別できない回答は「その他」扱いとしている。なお、サ詠嘆法（「シロサ（白いこと!）」「キツサ（きついこと）」が確認された地点については、「その他」に分類することなく、凡例を立てている。

以下の 4 図を見渡してみると、イ語尾の分布は小倉から内野にかけて分布し、内野から冷水峠を挟んだ反対側の山家・原田以西からカ語尾の分布域となっている点は全ての図で共通しているようである。内野と山家の間は三郡山地によって分かれていたため、カ語尾使用の伝播が阻害されているのであろう。福岡県下においてカ語尾使用域である福岡市域と飯塚・内野の間にも山地が広がっているため、通勤・通学による人口交流があるにもかかわらず、県西部および南部の地域の使用状況とは一線を画しているといえる。

また、イ語尾とカ語尾の併用が目立つ福岡県^{viii}・長崎県に対して、佐賀県のカ語尾の優勢さが際立つ結果となった。住田（1986）は肥筑方言域におけるカ語尾の感動表現がサ詠嘆法の用法と共通する点がみられることを指摘しているが、今回の調査でカ語尾を用いた感動表現とサ詠嘆法との併用は 1 例のみであった。サ詠嘆法の使用が活発であることは調査を通して間違いないと言えるが、今回の調査では立項が行き届かず不十分であったため、使用方法の棲み分けを明らかにすることは今後の課題としておきたい。

世代差としては、調査地点の全域で若年層におけるイ語尾の拡がりを確認することが出来る。小倉から内野までは全ての世代がイ語尾地域であり、山家より西部の地域では、老年層に比して若年層におけるイ語尾使用が多く確認される。項目

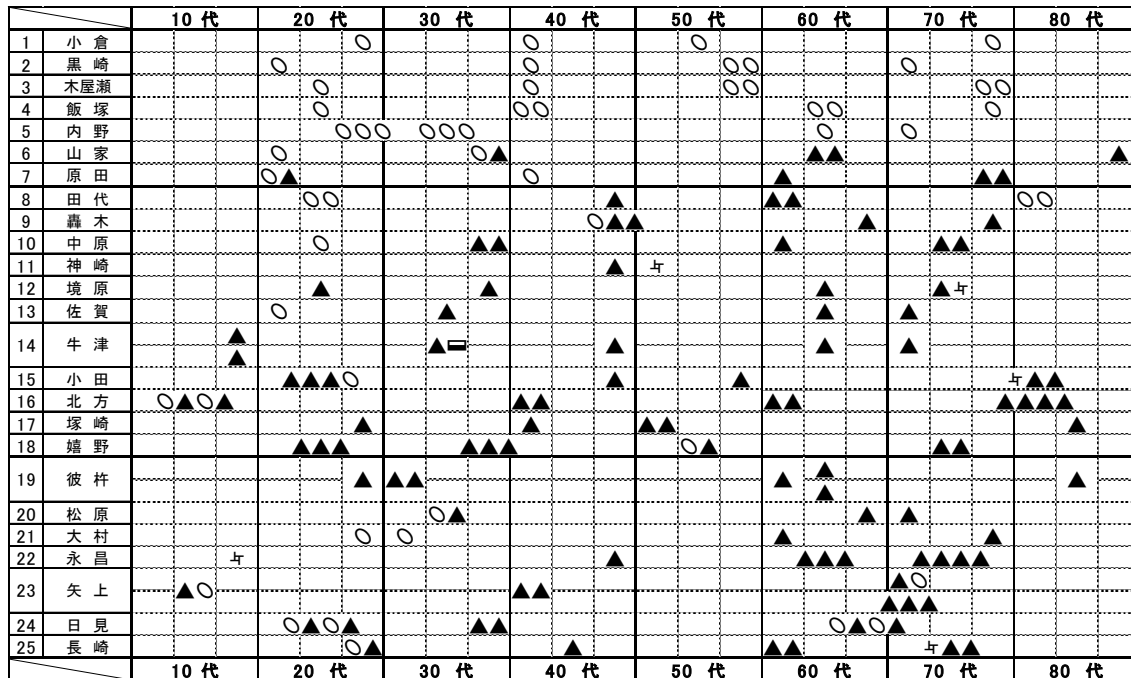
「美味しいよ」(図 3-18) では他者への呼びかけを想定した回答を得ているが、この場合長崎から大村にかけての 40 代以下の世代ではイ語尾が優勢である。

3.4.4 「塩味が濃い」と「塩味が薄い」まとめ

以上、形容詞「塩味が濃い」「塩味が薄い」の調査結果を示しつつ、各項目の表現形式および形容詞のイ語尾・カ語尾に関する地理的分布を考察した。

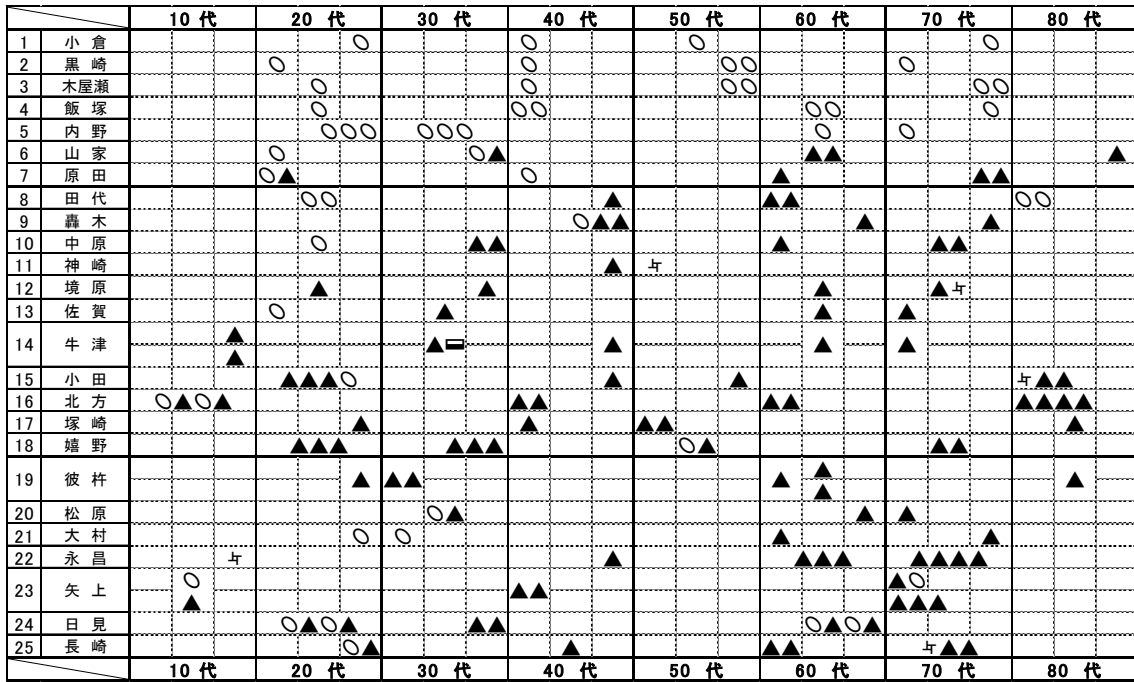
「塩味が濃い」「塩味が薄い」の表現形式における分布は 1960 年代調査となる『LAJ』当時から大きくは変わらず分布が変化しない一因として山地など地理的要因が関わっている可能性が示唆された。またいわゆる方言形とされる表現形式は依然として各地点で用いられてはいるものの世代差が顕著であり、今後の言葉の変容が注目される場所である。

イ語尾・カ語尾に関する分布について、今回取り扱った項目からは形容詞の別による使用・不使用の差は確認することが出来なかった。しかしながら、世代差として、従来カ語尾の使用がとても盛んな佐賀県・長崎県においては若年層にイ語尾の浸透が目立っている。今後これらの若年層の世代以降カ語尾が継承されるかが注目される。



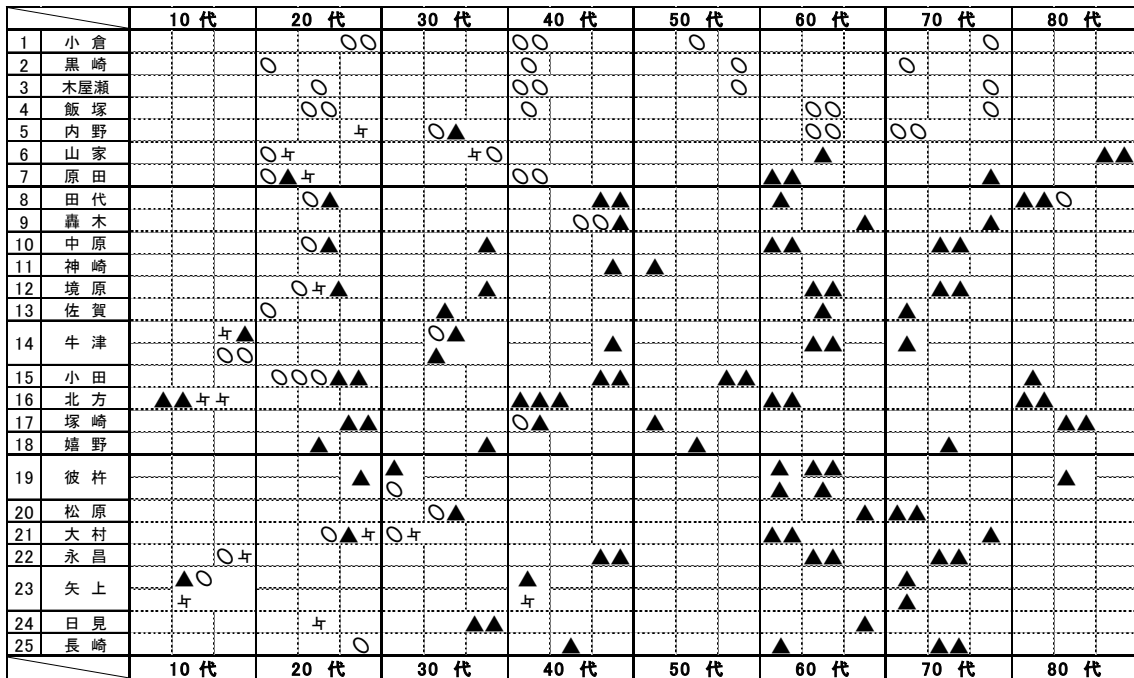
○ イ語尾 □ サ詠嘆
 ▲ カ語尾 卍 その他

図 3-15 イ語尾・カ語尾分布 (塩味が濃い)



○ イ語尾 ▬ サ詠嘆
 ▲ カ語尾 ㄥ その他

図 3-16 イ語尾・カ語尾分布（塩味が薄い）



○ イ語尾 ㄥ その他
 ▲ カ語尾 N 無回答

図 3-17 イ語尾・カ語尾の分布（「面白い」）

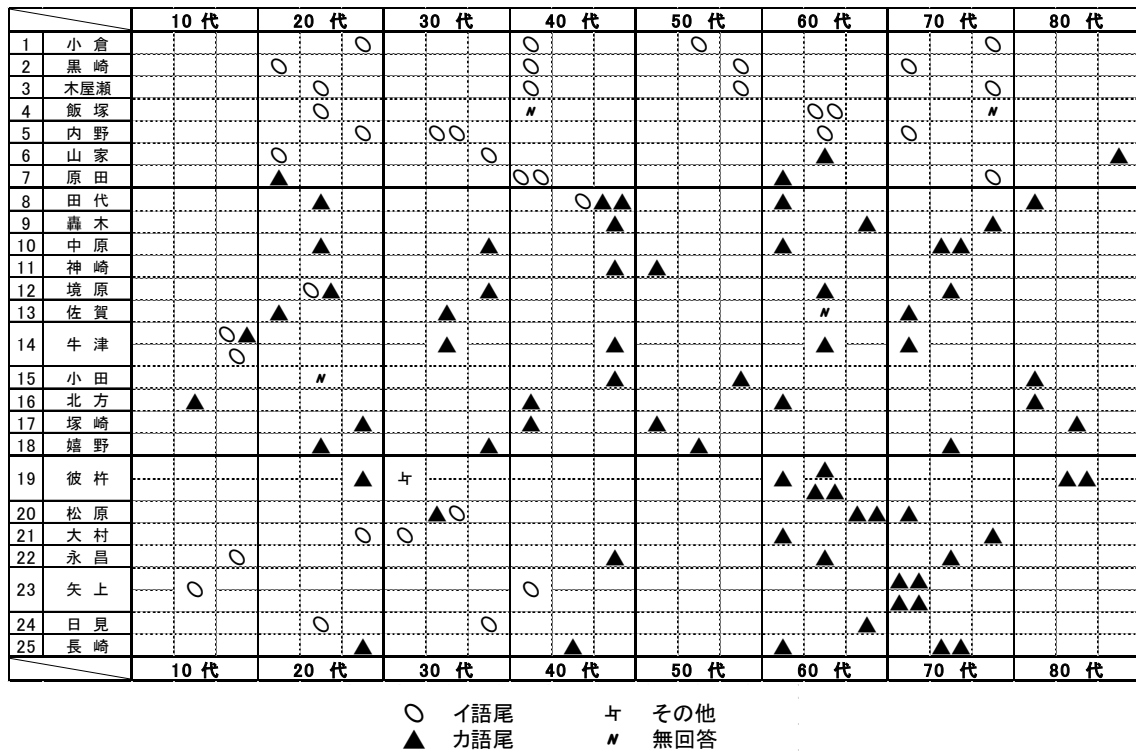


図 3-18 イ語尾・カ語尾の分布（「美味しいよ」）

3.5 本章の結論

本章で明らかになったことは、東条編（1954）に提唱される方言区画の枠組みに囚われない方言の分布の現状があるということである。地理的分布（地域差）について世代差という視点を掛け合わせることにより、言葉の拡がりやその様相を多角的に捉えることができた。

言語地理学が隆盛した 1960 年代から 1980 年代頃の時代から経年変化というもの考えた時にまず予想されるのが「共通語化」の現象である。方言を巡っては全国的に共通語化が進んでいることは周知の事実であり、九州北部地域の方言も例外ではない。しかしながら、その現象は文法項目よりも語彙項目において進行していることが明らかとなった。例えば、国立国語研究所編（1968）『日本言語地図』第 3 集に収められる「ものもらい」では、福岡県から佐賀県東部にかかる地域でインクソ（犬の糞）という語形が広く分布していたが、こうした語形は福岡県下ではほとんど消失し、佐賀県の一部地域や老年層に記憶に残る知識として認められる程度である。一方、動詞の活用（サ変動詞「する」、上一段活用動詞「起きる」など）のような項目の場合、形態的な変化はほとんど認められず、当時からの分布の様相が維持されていることが窺える。さらに、共通語化の現象は東京を中心に全国的に行われるいわゆる「全国共通語」としての共通語化もあれば、西日本や中国

地方、九州地方において行われる「地方共通語化」(柴田 1965)の様子を認めることができる。また、「全国共通語」化の現象が進んでいるのは福岡県下の地点が中心であり、佐賀県・長崎県下に顕著であった根強い方言運用の状況と対称的な様相を示したことを指摘した。

ⁱ 『LAJ』の調査は 1957 年から 1965 年にかけておこなわれたもので、地点数は全国 2400 地点を数える。図 3-1 は第 112 図「ものもらい」の言語地図から北部九州の地域を中心に執筆者が作図したものである。記号の形は原図に沿っているが、見やすさを優先して一部の記号の色・大きさを変更している。ベースマップは「MAPIO' 07～' 08 年度版 JAPAN」(企画・開発：ニジックス地図デザイン研究所，発売元：デザインエクステンジ株式会社)を使用した。

ⁱⁱ 「オトポー」は佐賀方言において「末っ子」のことを指す。志津田(1971)には「スソゴ(裾子)」ともいう。「オトポー」の「オト」は「オトウト(弟)」「オトヒメ(乙姫)」等の「オト」と同じく「若イ」意の語。」と記述されている。

ⁱⁱⁱ 『日本古語大辞典』(1930)では「カムヌシ(神主)」で立項されている。

^{iv} 調査期間は 1961 年から 1962 年。老年層(調査当時 60-75 歳)を対象とした調査の結果である。立項は「神官」となっているが、この項目の質問文はいわゆる「神主」についてである。質問文は次の通りである。「神社で神様をおまつりするのを職業にしている人を何と言いますか。」

^v 小田(2003)では、仏教分布に関する先行研究の分析内容を整理した上で、「寺院総数に占める主要 4 宗グループ各寺院数の割合」の計算方法を参考に、都道府県別の宗教法人数を算出した。データは『都道府県別宗教法人数』に挙げられる全ての仏教系教団を対象に、「天台・真言系」「浄土系」「禅系」「その他」(奈良仏教系とその他)というグルーピングを行って、寺院総数に占める各グループの寺院数の割合を計算している。データは 1888 (明治 21) 年および 1959 (昭和 34) 年のものである。

^{vi} 今回の調査では「蟹の甲羅」は立項されておらず、調査開始後、口頭で質問する形で回答を得たものである。故に、「蟹の甲羅(生物)」「蟹の甲羅(食後)」について質問をするようになった地点より前に調査した地域では図 4-9, 図 4-10 とともに、「無回答」が示されている。これらは質問をしたが、回答されなかったわけではなく、そもそも質問されていない地点であることに注意されたい。

^{vii} 質問文は「料理(お吸い物など)に塩を入れすぎてしまった場合、その料理の味をなんと言いますか。」となっており、調査員が質問をする際には料理の例として、お吸い物のほかに卵焼きを例示し、「卵焼きを食べて、それが塩味が濃いと感じる時、『この卵焼き、どうやね』と言いますか。」という質問の仕方をした。故に、食べた料理の感想を言う場面

を想定された回答となっている。この質問方法は「塩味が薄い」の項目でも同様におこなわれている。

^{viii} 福岡県域では筑前・筑後地域においてカ語尾の使用が報告されるが（上村 1983），岡野（1987）における形容詞項目を参照すると，筑前・筑後におけるカ語尾の使用は福岡市域が位置する福岡平野から朝倉市域が位置する筑後にかけての範囲を境にその勢力が分かれている。これは三郡山地という地理的要因が強く働いているものと思われる。三郡山地以北でカ語尾が行われないわけではなく，「良い」「無い」などカ語尾が適用されやすい形容詞も存在する（『九方基』・神部 1980）。

第4章

九州地方における待遇表現の分布

4.1 本章の目的

本章では九州地方における待遇表現の地理的分布についてその現状をつかむべく、徳島大学日本語学研究室が実施した九州地方における大規模通信調査の結果544名分のデータを利用して、九州地方本島部地域に見られる待遇表現形式のバリエーションとその地理的分布を概観した。

方言敬語のバリエーションが多いとされる西日本諸方言の中でも、九州方言における方言敬語の多様性は特筆すべきものであるが、言語地理学的研究そのものが後退傾向にある今、大西編(2016)『新日本言語地図』のような日本全国を対象とした調査結果の中でしか、近年の九州地方全域の地理的分布を把握することができない。また、九州方言の総合的研究である『九方基』では、敬語形式に関する調査項目が設置されているものの、質問方法が敬語形式を提示して使用するか否かを問う形式であるため、提示した敬語形式以外の使用状況について把握するという点で課題が残されたままである。加えて、存在動詞「いる」に関する質問が設定されておらず、その他の動詞項目の主体は回答者または非表示の二人称であることから、動詞の項目を中心に動作主に対する待遇表現を副次的に得て観察することも難しい。

そこで本章では2011年から2015年にかけて実施した九州地方における大規模通信調査の結果のうち、存在動詞「いる」「おる」を伴う待遇表現の分布を言語地図上に可視化し、九州地方各地における待遇表現形式の地理的分布の特徴を明らかにする。

4.2 分析対象データ

本章で用いるデータは、2011年から2015年にかけて徳島大学日本語学研究室が実施した九州地方における大規模通信調査(九州調査)の結果である。

調査概要については本稿第2章2.2で述べたが、ここでも簡潔にその概要を述べる。

九州調査は調査対象地域として九州本島部、およびその周辺諸島部にて調査票

を送付した通信調査である。調査対象者は調査時点で「65歳以上の生え抜き」としており、性別に関する制限は設けていない。主要なデータの調査期間は2011年7月～9月だが、その際に収集しきれなかった地点については補填のための郵送留め置き調査を実施し、2014年10月28日時点での有効回答数は613件となっている。以下に回答者の出身県を示す（表4-1）。九州本島部における言葉の分布に注目するべく、ここでは有効回答データのうち周辺島嶼部の結果を除いた544件のみを分析対象とする。

この九州調査の結果との比較に用いたのが、国立国語研究所の調査結果である『方言文法全国地図』（全6集、1989-2006、以下『GAJ』とする）である。『GAJ』という先行研究との比較を通じて、『GAJ』調査時以降に生じたことになる分布の変化について指摘を試みる。

表 4-1 回答者情報

	大分	福岡	長崎	熊本	佐賀	鹿児島	宮崎	合計
有効回答数	79	95	80	92	60	121	86	613
分析対象	79	95	53	92	60	79	86	544

本章で分析対象とする項目は、存在動詞「いる」を用いた疑問表現「いるか」の項目である。疑問表現「いるか」に関しては、相手の立場が目上か同等かの場面差を問うために2つの質問（項目96、項目97）を設けており、質問文はそれぞれ次の通りである。

〔項目96〕 近所の知り合いの人にむかってやや丁寧に「あしたは家にいるか」と聞く時、「いるか」のところをどのように言いますか。

〔項目97〕 では、この土地の目上の人にむかって、非常に丁寧に明日は「明日は家にいるか」と聞く時、「いるか」のところをどのように言いますか。

また、項目96、項目97で調査された疑問表現「いるか」を用いた待遇表現を調べる項目は、全国調査の結果が『GAJ』第281図、第282図、第283図、第284図にまとめられている。各項目の質問文は以下の通りである。

〔第281図〕 この土地の目上の人にむかって、ひじょうにいていますか（B場面）—一般動詞— ねいに言うときはどうですか。

〔第283図〕 近所の知り合いの人にむかって、ややいてねいにいますか（A場面）—一般動詞— 「今日は家にいますか」と聞くとき、「家にいますか」のところをどのように言いますか。

なお、『GAJ』では調査結果について一般動詞と敬語動詞の凡例を分けて地図化しているが、図 4-3、図 4 では一枚の地図にまとめて反映させている。また、『GAJ』の第 282 図、第 284 図の質問文はそれぞれ第 281 図、第 283 図とそれぞれ同じものである。

4.3 九州本島部における存在動詞「いる」と待遇表現

これより『GAJ』にみる九州本島部の調査結果と徳島大学日本語学研究室で実施した九州調査の結果を比較する。まず、『GAJ』の調査結果を統合・略図としてまとめ（図 4-1・図 4-2）、そこからわかる当時の「いる」の諸形式について触れたのち、九州調査の結果について述べる。九州調査の結果は図 4-3、図 4-4 に示す。

図 4-3、図 4-4 の凡例を整理する際は、第二回答までを採用するかたちをとった。第三、第四回答まで記入されているものもあつたが、実際の運用に即したものでない回答を採用する可能性が高くなるため、上記の採用基準を設けた。このほか、アスペクトに関する表現を伴う凡例も地図に反映させたが、これは話者の回答を尊重した結果であり、地図に示すことでアスペクト表現が出現しやすい特徴があることを指摘するものではない。

4.3.1 『方言文法全国地図』にみる存在動詞「いる」の諸形式

『GAJ』第 281 図・第 282 図の統合図を図 4-1、『GAJ』第 283 図・第 284 図の統合図を図 4-2 にそれぞれ示す。なお、全凡例を示すものではなく略図とした。

『GAJ』第 283 図（A 場面、近所の知り合いの人に向かってやや丁寧に）（図 4-2）で確認される主な形式として 5 つの形式、福岡県、大分県、熊本県、宮崎県の一部等で広く分布するオル類〈oru-ee, ka, kaa, kaa など〉ⁱ、福岡県、長崎県、大分県、熊本県、宮崎県にかけて分布するオリマス類〈orimasu-ka, kaa, naa〉、福岡県南部と熊本県に分布するオンナハル類〈onnaharumasu-ka〉、〈onnaharudesu-ka〉、〈onnahaddesu-ka〉、〈onnasan-no〉、鹿児島県全域と宮崎県南部に分布するオイヤス類〈oijasu-ka, kaa〉、長崎県と宮崎県に確認されるオラス類〈orasku, kanai, kanasi, ke, na, no, nomaai〉ⁱⁱを指摘することができる。『GAJ』第 281 図（B 場面、この土地の目上の人に向かって、ひじょうにていねいに）（図 4-1）では A 場面よりも敬意度を高めた表現を問うているため、敬語表現を伴う語形が多く回答されていることが特徴的である。共通語的な表現として改まった意識で用いられるイル類、イラッシャル類の使用が確認されたり、A 場面でオイヤス類やオジャス類が用いられる地域において、B 場面でオサイジャス類が使用されるなど、場面

に応じた敬語表現の使い分けの様子が表れており、これに伴い A 場面と B 場面とでは、両場面で確認される語形であったとしても分布が異なる場合が認められる。しかしながら B 場面でのみ用いられる形式は共通語のイル、イラッシャル類、オリヤル類、オサイジャス類のみと限られており、「いるか」と問う場合の表現形式のバリエーションは両場面で類似していると言えよう。

ここで各種形式について概観したい。オルは五段活用動詞「居る」である。『GAJ』第 283 図をみると、近所の知り合いにむかってやや丁寧な問う A 場面におけるオル類は、九州地方に限らず西日本を中心に広範囲で用いられている語形であることがわかる。その東端地域は新潟県北部、長野県西部、愛知県東部である。「近所の知り合い」程度の人物に対して、いるかどうかを尋ねる場合に用いられる動詞としては西日本において広く一般的な表現であり、オルネ、オルカ、オルンカなど文末表現にどのような表現を伴うか、またその地域でどのような意識でその表現が用いられるのかで多少の敬意差は生じるものの、デス、マスのような丁寧体形式や、レル・ラレル、サル・シャルのような尊敬の助動詞といった明らかな敬語表現を伴わないという意味では、待遇表現としてはほぼ対等の相手に対する問いかけの形式であると言える。

オリマス類は、五段活用動詞オルに、コピュラのダ、 DEAL の丁寧体デス、マスが付いたものである。前述したとおり、広く西日本で行われている表現と推定されるが、『GAJ』第 283 図 (A 場面) では、九州地方、四国地方以外にも、北海道や東北地方、関東地方などのイマス類の分布域とされる地域においてもオリマス類の使用は認められ、全国的な範囲で用いられている表現形式であることがわかる。図 4-1、図 4-2 に示す通り、オリマス類の分布は大分県全域や宮崎県北部といった東九州を中心とした地域のほか、福岡県、佐賀県、長崎県などでも確認され、九州の北部を中心に広く行われている様子が見えてくる。

五段活用動詞オルに尊敬の助動詞ナサルの音声変化形ナハルが接続したオンナハル類は、A 場面 (図 4-2)・B 場面 (図 4-1) において、福岡県南部と熊本県全域に集中している。B 場面については、宮崎県でも北部から中部にかけて広く行われている様子が認められる。『九方基』によると、熊本県の主要な敬語表現の 1 つとしてナハルが挙げられ、常態敬語とされるスと共に「基本的なもの」として用いられており、待遇価値はスより高いという。『GAJ』第 283 図で確認されるオンナハル類はいずれも丁寧体デス、マスを伴っている。福岡県南部にみられるオンナサンノは、オンナハルノの出自となるオンナサルのルが撥音化したものであり、形式はオンナハルと同類の系統である。

鹿児島県と宮崎県南部 (鹿児島県と隣接する地域) では、オイヤス類がまとまった分布を示している。『九方基』の鹿児島県岡児ヶ水方言に関する記述を引用すると、

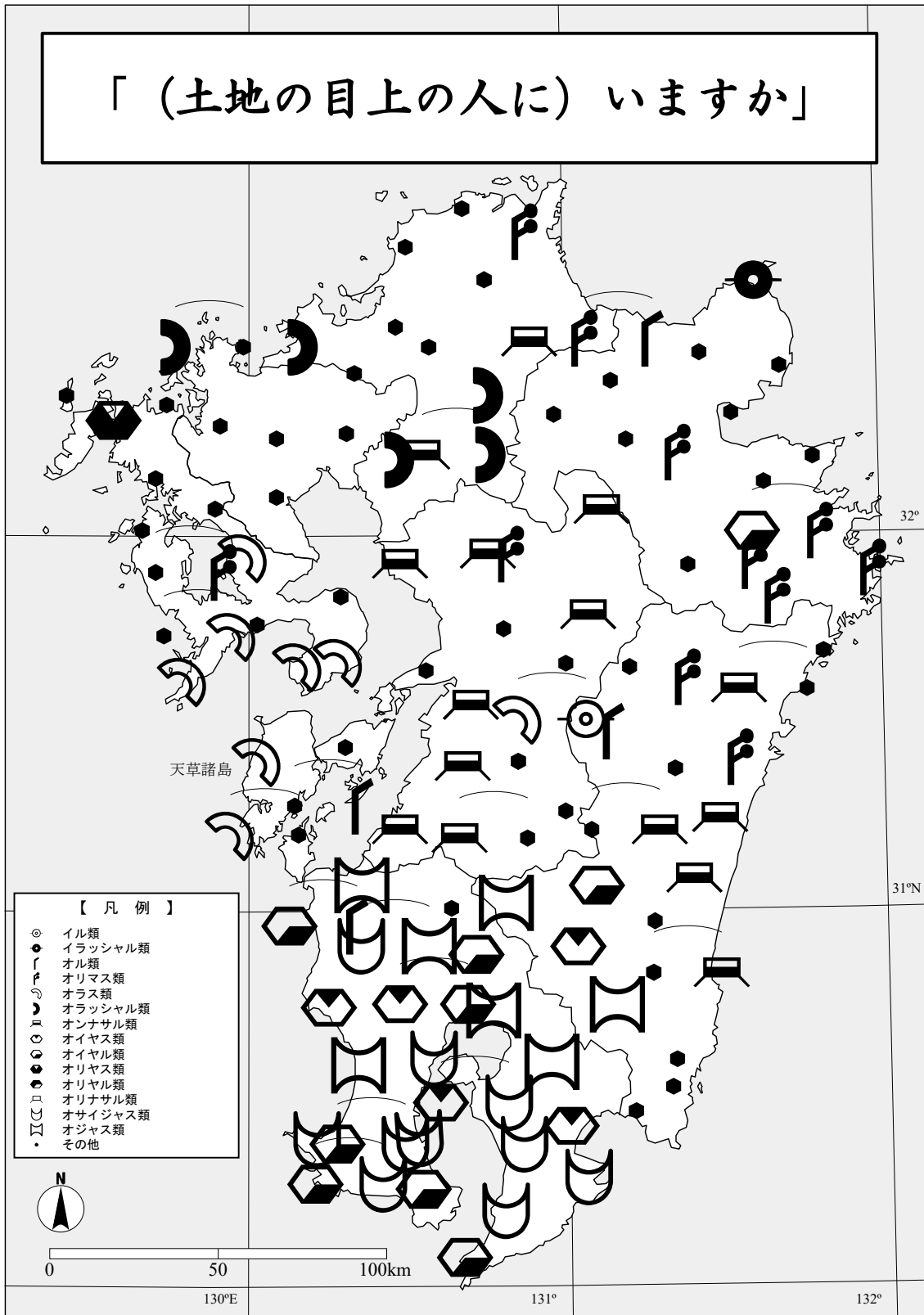


図 4-1 『方言文法全国地図』第 281 図・第 282 図統合略図
(筆者による引用作図)

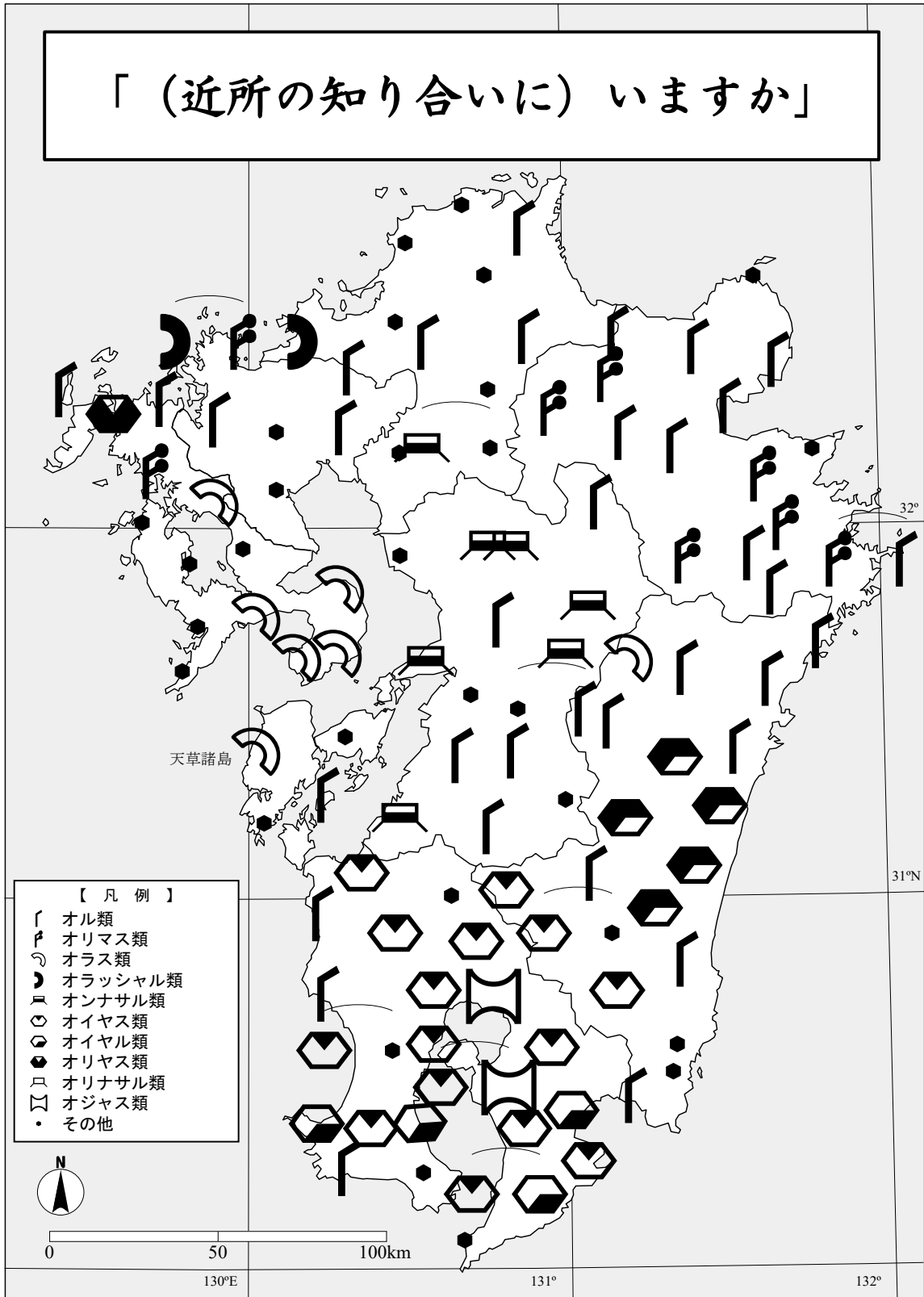


図 4-2 『方言文法全国地図』第 283 図・第 284 図統合略図
(筆者による引用作図)

- (6) ～ヤンス・～ヤス (尊敬) <青以上老ほど多・上>終止・連体形欠く。
○アスピ キヤハン カ。 遊びにいらっしゃいませんか。

となっており、老年層を中心世代として使用される比較的古い形式であることがわかる。また、木部(1997)に「リ・ル・ニ」はイ音化する。」とあるように、動詞部のオルがオイとなるのは鹿児島県を中心とする南九州地域の音声的特徴である。

4.3.2 九州調査にみる存在動詞「いる」の諸形式

九州調査の結果をまとめた図4-3、図4-4でみられる主要な形式として大きく5つが挙げられる。佐賀県、長崎県、熊本県を中心とした有明海沿岸地域に分布するオリナサル類、大分県、長崎県、熊本県、福岡県、佐賀県、宮崎県の一部など広く分布するオル・オリマス類、佐賀県、長崎県を中心に熊本県、宮崎県にもみられるオラス類、鹿児島県全域と宮崎県南部といった九州南部に広がるオイヤル・オイヤス類である。また、このほか、福岡県の西部に集中的な分布を示し、同県南部にも1件の確認ができるオラッシュル類についても注目される。

まず、『GAJ』第283図の結果では九州北部から南部にかけて広く分布を示したオル・オリマス類について、九州調査でも類似した傾向で分布していることがわかる。近所の知り合いに対する場面(A場面)では、終止形もしくは連体形のオルに疑問の文末表現がつく形のオル類が大分県を中心に九州の北部全域に展開している(図4-3)。しかし、より高い敬意が求められる場面になると、大分県を除く地域ではいわゆる方言形の敬語運用に転じている(図4-4)。図4-4の大分県ではオンナル、オラレルといった敬語形式が確認できるものの、概ねオリマス類が用いられており、図4-3の結果と照らし合わせれば、周辺地域より比較的単純で共通語的な敬語運用がなされているとみることができる。

佐賀県西部から長崎県全域にかけて広がるオラス類は、島原・天草を挟み対岸の熊本県にも分布が確認できる。また、宮崎県西臼杵郡付近でも集中的に確認された。『九方基』ではオラスについて「敬意は概して低い」敬語であるとされる一方で、熊本県天草や宮崎県西臼杵郡では敬意が高く上品な敬語として用いられているという地域差があることが指摘されている。図4-3、図4-4よりそれらの地域は依然として同様の分布を維持していることがわかる。藤原(1997c)はこのラス敬語について、「尊敬表現法助動詞シャル(→サッシュル)の極端な変化形式が前の動詞語尾のラにつづいたもの」であるとし、「九州弁の肥筑地方でよく聞こえ、人に「ラスことば」などといった把握がなされてもいる。」と言及している。オラス類

のまとまった分布は福岡県西部のオラッシュナル類とも連続体を成しており、派生語としての関連性をうかがわせる。『GAJ』では、第281図、第283図ともにオラス類は長崎県と宮崎県の一部地域でしか確認できなかったが、九州調査の結果ではその分布域がより詳細に示された。さらに、近所の知り合いに対する場面（A場面、図4-3）では多くの地点でその使用が確認されたにもかかわらず、敬意度の高い表現が求められるB場面になると限られた地域でしか出現していないことも明らかである（図4-4）。ここからオラス類が用いられる地域の広さと、形式に伴う敬意の低さを確認することができる。

凡例数としては多くはないものの、福岡県西部において集中しているオラッシュナル類についても触れておく。オラッシュナルという形式は、五段活用動詞オルの未然形に尊敬の助動詞シャルが接続したものである。藤原（1997b）はシャルについて「相手がたの動作についてのややかるい尊敬気分をあらわすもの 今はすたれぎみのことばでおのずから古風でもある」としている。この敬語形式は九州地方においては局地的だが、『GAJ』第281図では中部地方や北陸地方、東北地方にも分布が確認されており、古くは広い範囲でよくおこなわれていたことが読み取れる。九州調査の結果におけるオラッシュナル類は、近所の知り合いの場面（A場面）から土地の目上の人々の場面（B場面）に変わると、その分布域を拡大させている。加えて、図4-4でオラッシュナル類が現れた地点は図4-3ではオラレルやオンサルといった形式が分布している。これらのことから、分布域においてはオラレルやオンサルよりも丁寧な表現として使用されていることが明らかとなった。

最後に、九州調査の本項目（項目96、項目97）において、最もまとまりがあり、明瞭な分布を示したのが、鹿児島県と宮崎県南部に現れるオイヤル・オイヤス類である。前述したように、南九州においてはオリがオイと発音されることが音声的特徴として挙げられ、これによりオイとオリが非常に近い形式であることがわかる。『宮崎県方言辞典』（1979）による宮崎県内の分布域は、「児湯郡、西都市、宮崎郡、宮崎市、宮崎市檉。」とされる一方で、鹿児島県についてはほぼ全域が分布範囲である（図4-3、図4-4）。『九方基』では九州南部でおこなわれるヤルについて「いくらかの親愛感を伴って、日常頻用される。」と記述されている。また、ヤルの出自は「オ……アル」敬語であるとし、このほか「オ……アル」由来のものとして「オジャル」を指摘している。「オ……アル」の色濃い分布は、『GAJ』第283図でも盛んな様子が認められる。上村（1998）は「南部の薩偶では、助動詞は「おーある」系の（オ）読ミヤル・読ミヤイ申ス・読ミヤ（ン）ス式が唯一の尊敬助動詞と言いたいほど圧倒的な勢力がある。」と述べており、図4-1から図4-4すべての調査結果でそれを裏付ける分布を示した。また、図4-1、図4-2を比較すると、図4-1では場面差があることからオサイジャス類が盛んである。形式上の敬意としては、日常の待

「(近所の人に) いるか」

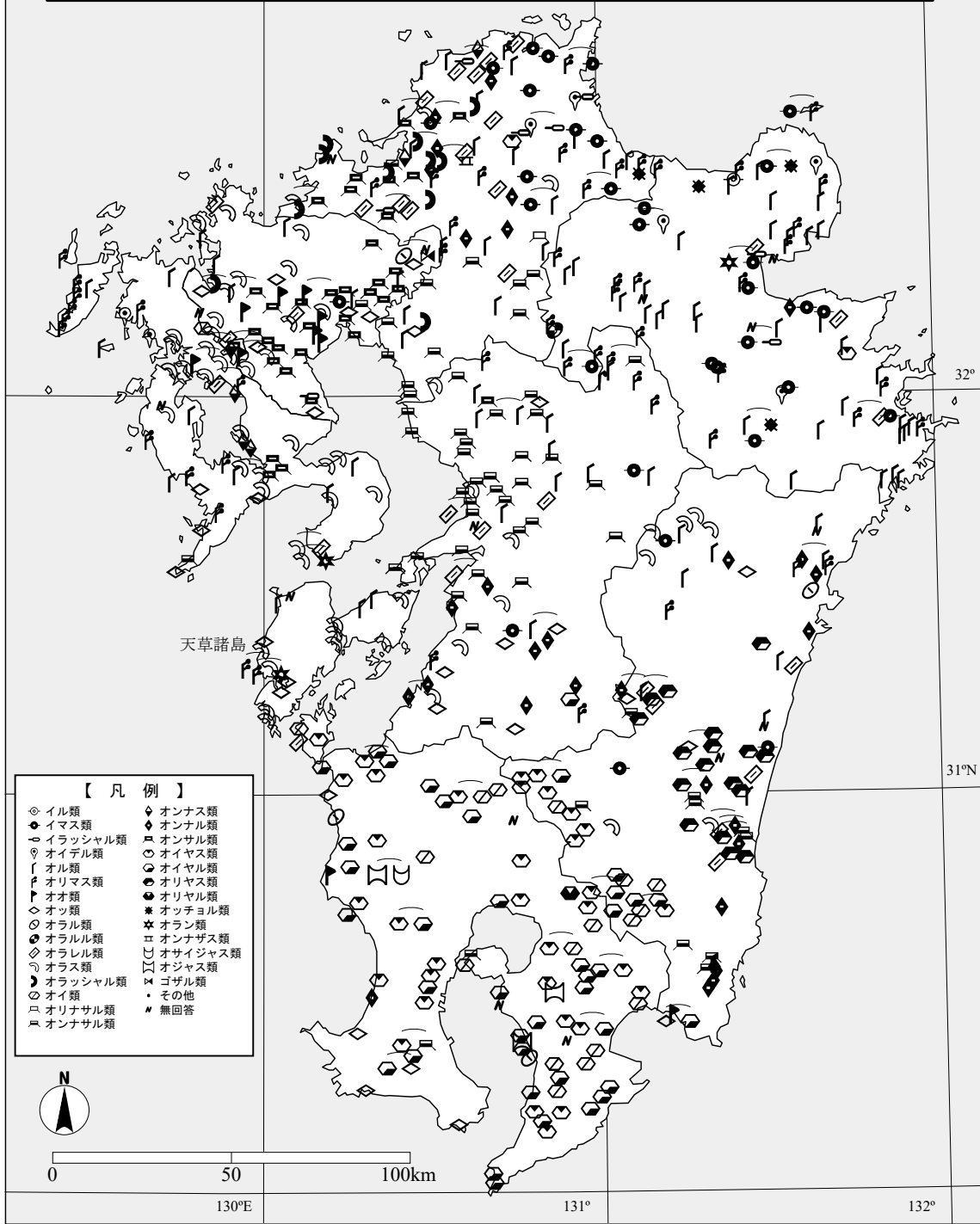


図 4-3 「(近所の人に) いるか」

「(土地の目上の人に) いるか」

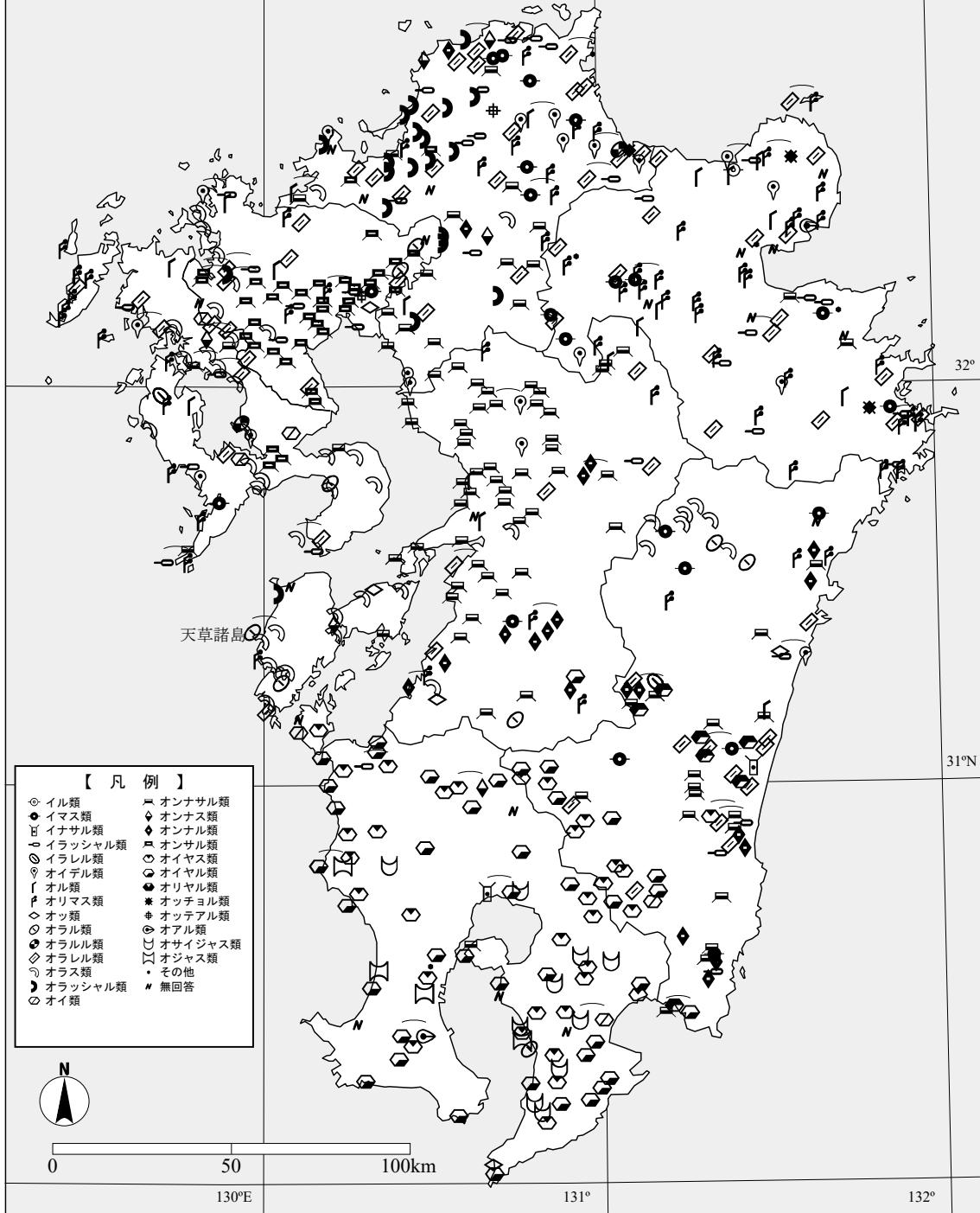


図 4-4 「(土地の目上の人に) いるか」

遇表現として多用されているオイヤル、オイヤ(ン)スよりも丁寧な表現であり、九州調査の結果も『GAJ』と同じように、目上の場面ではオジャス類、オサイジャス類が用いられている。

4.4 本章の結論

本論文は、九州調査の結果と『GAJ』とを比較することによって、存在動詞「いる」にみられる九州本島部の待遇表現について、その特徴の概観を試みたものである。方言敬語のバリエーションが多いとされる西日本諸方言の中でも、九州方言における方言敬語の多様性は特筆すべきものであるが、言語地理学的研究そのものが後退傾向にある今、大西編(2016)『新日本言語地図』のような日本全国を対象とした調査結果の中でしか、近年の九州地方全域の地理的分布を把握することができない。

九州調査の結果を言語地図化したことにより、現在九州本島部において行われる存在動詞「いる」の主要な形式とそれに伴う待遇表現についてその地理的分布を明らかにすることができた。結果としては、当該地域で行われている主たる形式としてオル・オリマス類(i)、オラッシュアル類(ii)、オラス類(iii)、オンナサル類(iv)、オイヤス・オイヤル類(v)の5つがあることが明らかとなった。また、各形式はそれぞれ一定の分布域を有しており、その分布の様子は30年以上前の調査結果である『GAJ』と概ね合致することがわかった。しかしながら、オラッシュアルについては『GAJ』とは異なった分布状況を示し、福岡県西部を中心におこなわれていることが判明した。さらに、図4-3と図4-4の結果比較を通して、場面差による敬語形式上の敬意差について、運用上の違いからその特徴を概観・把握することができた。

本章で示した『GAJ』は統合・略図化したものである性質上、すべての表現形式を取り上げることは難しく、今回触れることができなかった待遇表現が多くあることは明らかである。言語地図の情報だけでなく、広く記述的な論述を展開し、用例に基づいた敬語運用について分析をすることが期待されるが、ここではまず九州全域におこなわれる待遇表現の概要を把握することを優先した。

近年の九州方言研究の成果を見渡しても、九州全域を対象とした大規模な通信調査は管見の限り行われていない。待遇表現に関する項目に限定した分析であるが、九州調査の結果を言語地図によって可視化することにより、言語地理学的研究の立場からの九州北部地方における待遇表現の動態把握を試みた。

ⁱ 『GAJ』の凡例オル類の分類内容と、図 4-3, 図 4-4 が示す凡例のオル類の分類内容は厳密には同じではないが、どちらも文末詞に関わらず動詞部基準でまとめたものである。

ⁱⁱ 宮崎県の凡例として〈oransu-ka〉が含まれる。

第5章

方言敬語の運用意識

5.1 本章の目的

本章では、グロットグラム調査の結果から、九州北部地方における方言や方言敬語の運用意識についてその傾向を概観するとともに、福岡県飯塚市で運用される方言敬語形式「(ン) シャル」(以下、「シャル敬語」と言う)について着目し、アンケート調査の結果と談話資料にみられるシャル敬語の運用実態について述べる。また、グロットグラム調査で実施したシャル敬語の運用に関する意識調査の結果をまとめ、当該地域における人々がどのような意識でシャル敬語を捉え、使用しているのかについて考察する。

九州北部地方にはどのような言語意識のもと方言や方言敬語が運用されているのだろうか。言語意識とは、言葉をどう捉えているか、どう感じているかを表すものである(金沢 1991, 平高 2006)。日常生活を送る上で自分がどのような言葉を用いているか、その言葉に対し自分自身がどのような評価・認識をしているのか。このような言語意識が話者の言葉の選択・運用に与える影響は大きい。

また、言葉を運用する上で重要な基準となるのが話し手と聞き手の関係性である。聞き手が自分にとってどういう人物にあたるのかによって、話し手は使う言葉を選ぶものである。蒲谷・金・高木(2009)では、敬語表現が人間関係の捉え方に基づいておこなわれるものであるとして、人間関係の捉え方の3つの軸を紹介している。

〈人間関係の軸〉

- ・ 上下関係——上位者 / 下位者
- ・ 親疎関係——親しい / 親しくない
- ・ 立場・役割——社会的な立場と役割

(蒲谷・金・高木 2009, p. 4)

聞き手が自分より目上の人物であるかどうか、親しい人物なのか、社会的立場はどうか。こういった関係性を考慮した上に言葉の運用が成り立つものである。

そこで本章では言語意識の調査項目から、今回調査をおこなった北部九州の話者が言葉をどのような認識で捉えているのかについて明らかにする。

5.2 分析対象

本章で用いるデータは第2章2.1で示したグロットグラム調査の結果である。調査対象者には語彙や文法、敬語法に関するアンケートのほか、言語意識に関するアンケートを実施した。アンケートは話者の言葉に対する考えや印象について問う内容となっており、問C1、問C2(a)～(e)、問C3(a)～(j)で構成される。得られた結果はグロットグラム図に示し、県別の回答の割合を算出した。以下に調査項目を示す。

〈調査項目〉

問C：ことばに対する考えについて教えてください。

問C1：普段、この地域で話される言葉は方言色が濃いと思いますか。

- 1 方言を使ってしか話さない
- 2 共通語より方言の方が多いと思う
- 3 方言も使うが共通語の方が多い
- 4 共通語しか使わない
- 5 わからない

問C2：全国的に使われる共通語と自分の地域で話される方言を比較しての印象(a)～(e)。

- | | |
|--------------------|------------------|
| (a) 親しみがある（親近感を抱く） | (d) 学校の授業で使われている |
| (b) 目上の人と話す時に使う | (e) 自分が普段使う |
| (c) 洗練されていると思う | |

問C3：(a)～(j)の人物に話しかける際、丁寧な言葉（敬語など）を用いますか。

- | | |
|--------------|------------|
| (a) 親 | (f) 初対面の年上 |
| (b) 兄妹 | (g) 初対面の年下 |
| (c) 妹弟 | (h) 不仲な年上 |
| (d) 学校の担任の先生 | (i) 不仲な年下 |
| (e) 初対面の同世代 | (j) 不仲な同世代 |

問C3の設問における人物設定のなかの「不仲な」が表す意味として、「知人ではあるがほとんど交流がなく日常的に話さない間柄」という関係性を指すものとしている。問C3については身の周りの具体的な人物を実際に想定してもらい、その人物に対する言葉遣いを回答してもらった。話者が想定する人物が実際に話者とどのような関係にあるのかについて具体的には確認していない。蒲谷・金・高木

(2009)で「上下」「親疎」「立場・役割」の3つの軸を中心に考えますが、3つの軸に対する表現主体の認識のしかたが敬語表現において重要である」と述べられるように、話し手に当たる話者が、想定した人物をどのように認識しているかが言葉の運用の上で重要な指標となる。しかしながら、そうした関係性の程度は厳密に指定することは難しく、必ずしも、話者と想定された人物との間で持たれる関係性の認識が、異なる世代や地域の話者間で一致して設定されているわけではないことに留意しておきたい。前述の通り、話者の認識に基づく人物設定を尊重し、「こちらが提示する条件に基づき想定された人物」を採用した。

5.3 調査結果と考察

5.3.1 地域の言葉に対する認識

問C1では、いわゆる「共通語」「標準語」とされる日本全国で用いられる全国共通語と地元の言葉(方言)について、自身が住まう地域でどの程度使われていると思うかを問うた。その調査結果を示したものが図5-1、図5-2である。

自分の地域で話される言葉に関し、共通語的か方言色が濃いかという認識に関して、地域差と世代差が顕著にみられる結果となった。

図5-2を見てもわかるように、福岡県と長崎県では「地元で話される言葉の方言色は濃い」と考えている割合は30%~50%であるのに対し、佐賀県では約80%もの人たちが「方言色が濃い」と回答している。地域を細かく見てみると、福岡県では、豊前方言域に属する小倉・黒崎の話者からは、「共通語の方が多い」(3または4を選択)という認識が強く示された。豊前方言は本州の方言の影響を直接に受け九州方言色が最も薄いとされる言葉であり(陣内1997)、その方言的特徴が地域の人々の認識にも共有されていることがわかる結果だと言えよう。

小倉の70代話者(kkr77)より提供を受けた資料「座談 魚町界隈の今昔」では、昭和8年、小倉に造幣廠が開設され、これを機に東京から人口が流入してきた経緯を取り挙げ、小倉の方言が薄まっていったことについて言及している。以下にそのやり取りを引用する。

小林 いよいよ造幣廠が開所して作業をする時は昭和八年ですね。ずいぶんと東京の方から造幣廠の職員が何千人というか、来たですよ。それで東京言葉も町で出るし、…(中略)

入学 さっきの話で、造兵廠が来たのは、あれは職工と家族を含めて五万人くらい来たそうです。その頃、小倉の人口は七万か八万しかなかったのです。小倉の人口が七、八万の時代に江戸っ子が一遍に五万くらい来たのですよ。

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉				2	3		3	
2	黒崎		3		3	3		5	
3	木屋瀬		2		2	3		3	
4	飯塚		2		2		3	2	
5	内野			2	4		3	4	
6	山家		2		2		3		3
7	原田		1		3		3	3	
8	田代					1	2		3
9	轟木		2		2			2	3
10	中原		1		2		3	2	
11	神崎					2	1		
12	境原			5	2		2		1
13	佐賀		2		2		3	3	
14	牛津		2		2		1	2	
15	小田			2		2			2
16	北方		2		1		2		3
17	塚崎			2		2			
18	嬉野		3		2	2		2	
19	彼杵			3	2		2	3	2
20	松原				5			2	3
21	大村			3	3		2		1
22	永昌		3			2	3	3	
23	矢上		3		2			3	
24	日見		2		2		3		
25	長崎			2		3	2	2	

図 5-1 回答一覧 (C1 : 方言色の濃さ)

- 1 方言を使ってしか話さない
- 2 共通語より方言の方が多いと思う
- 3 方言も使うが共通語の方が多いと思う
- 4 共通語しか使わない
- 5 わからない

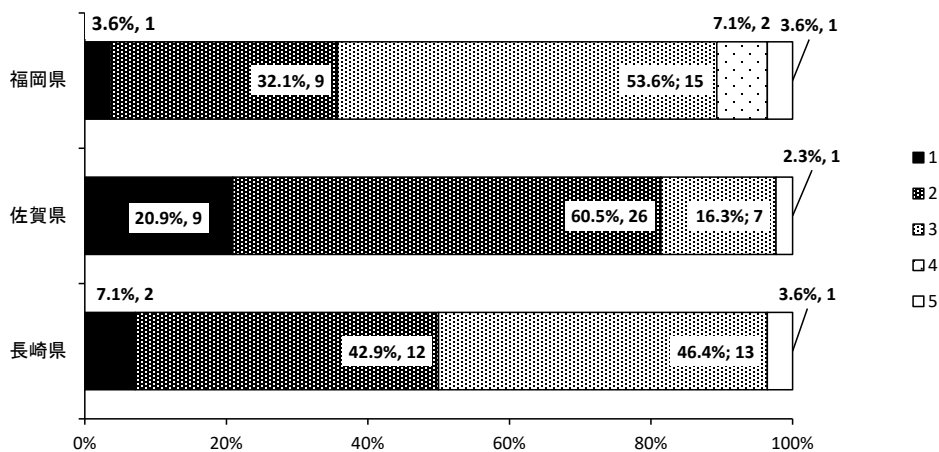


図 5-2 回答の県別割合 (C1 : 方言色の濃さ)

だから、小倉言葉がもう影をひそめてしまって、東京弁が流行った。そういう記憶があります。それも下町言葉。だから、我々商売しおっても、何とも知れん言葉でやってくるですもんね。変な言葉だなど、初めはそんなふうに思いよったけれども、だんだん後にはその言葉に我々も引きずられていってしもうた。だから、余り上品な江戸っ子じゃないけれどもね、半数に近い人間が江戸っ子でしたからね、あの当時。

(「座談 魚町界限の今昔」 p. 504-505 より引用)

豊前方言と筑前方言の境界域に位置する木屋瀬以南の地点では若年層ならびに中年層で「方言色が濃い」(1 または 2 を選択) という回答が得られており、「共通語が多い」との認識を示した壮年層以上の世代とは意見が異なっている。本州方言からの影響で方言が共通語的であるとの認識を示した小倉・黒崎の話者とは異なり、木屋瀬以南での世代差は、現在の方言使用の状況に対する評価の違いが表れた結果であると言えよう。

現代の方言運用について、壮年層以上は昔の運用状況と比較して「共通語化している」との認識を示し、中年層以下は現在の状況で十分に方言が使われているとの認識を示している。第 3 章で示した語彙や文法に関するグロットグラム調査の結果を見ても、若年層における言葉の俚言形の衰退は著しいものがある。この点で壮年層以上にみられる「方言色が濃い」という評価と中年層以下からみられる「方言色が濃い」という評価の実質的な違いが確認できる。何を以て「方言色が濃い」、「共通語が多い」と判断しているのかに不明確な点が残る以上、安易に言及すべきではないかもしれないが、この言語意識の世代差は地元の老年層に俚言形の衰退や地域共通語化の進行が肌で感じられていることを表しているのかもしれない。

佐賀県では「方言色が濃い」とする回答は全地点、全世代で満遍なく確認された。福岡県・長崎県における回答と比較しても「方言を使ってしか話さない」と回答した人が佐賀県に最も多いことも特徴的である。また、福岡県、熊本県と隣接する田代・轟木周辺の地区については 60 代以上において「共通語使用が多い」との回答が得られた。これらの地域は長崎街道でも肥後・薩摩に続く道への分岐点で人の交流が盛んな地域であったため、田代・轟木地区はその以西の地域に比べ、やや方言色が薄く、共通語意識が高いことが特徴としてある。その傾向が今回の調査でも確認されたようである。

佐賀県の調査を通じ印象的であったのが、地元の人々の間で、「○○という話し方をする人は●●地区の人だ」というように、方言的特徴について細やかな区分で地域差を認識し合っている点である。殊に取り上げられたのは、佐賀県で広くおこなわれている動詞の語末特殊音(促音化、長音化)についてと、敬語法「～ンシャ

ル」についてである。こういった方言的特徴への言及は長崎県の各地点でも確認された。

志津田（1971b）ではイエスペルセンがローマにおける地方語即ち方言分岐の原因を交通の途絶においたことを評価しⁱ，その上で次のように述べた。

実際，わが国の方言の分布に就いてみても，その分布がほぼ旧藩時代の藩制区分と等しいのは，かれが司教管区としてあげた例に該当する。宗教は信仰による個人の自由意思に基づくのに，藩治制度の場合は権力の作用に基づくので，その点が違うだけで，ために交通が途絶されたという点は相等しい。しかも，それから来る慣習の相違によって生じた自尊意識が互いに各地域を隔絶させたであろうという想像も不当ではない。旧藩時代は，農は国の宝といわれた。いや，農だけでなく，そういう労働力を失わないために，そういう人々，つまり，人民の他郷への自由な出入を制限し，僅かに手形を発行して許可制としたので，殆んど交通途絶同然の状態であった。その上，藩の政治はそれらの人々に自尊意識を植えつけたので，コトバでも，自郷のコトバをよしとし，他郷のコトバを嘲笑したので，いっそう方言を確定させたと思われる。

（志津田（1971b）『佐賀の方言：下巻 総説編』 pp. 8-9，下線は筆者による）

旧藩区画と方言区画とが一致している例は多くあるが，殊に今回の調査においては鹿島（佐賀県）と諫早（長崎県）の方言的特徴が共通しているという認識が強く持たれているようであった。双方の地域は江戸時代に鍋島藩政下にあったこともあり，方言的特徴を多く共有する地域であるとされ（上村 1973），この認識は彼杵以南の長崎県話者からも広く確認されたものである。

長崎県では若年層を除くほとんどの世代で「方言の使用が多い」との結果が表れた。しかしながら，松原から日見地区にかけては老年層に「共通語使用が多い」との認識が顕わとなっている。これらから，若い世代における自身の方言運用の意識は低いということと，老年層における方言が共通語化したという方言衰退の意識が読み取れる。

長崎県話者若年層のこうした言語意識をもつ要因の 1 つとして，高校生の通学圏が影響しているのではないだろうか。第 1 章図 1-6 にも示されるように，長崎県の九州本島部には 5 つの方言区画があるとされるが，今回調査した高校生話者から，こうした区画をいくつも跨いだ先の高校に通う，または学生寮に入寮して通学するという環境が一般によくあるというⁱⁱ。言語形成期を過ぎた年齢であるといえども，県外に進学した大学生が進学先の地域の言葉の影響を受けて話し方が変わってしまうということがよくあるように，高校生も同様に，未成熟の少年が使

う言葉は交友関係や地域の環境に左右されるものである。若い時期からこのような環境に身を置く彼らが、自分の方言と異なる言葉を使う友人とコミュニケーションを図る以上、出身の言葉ばかりを使ってはいられない。全国的に広く見られる共通語化の現象とは性質を異にする地域共通語化の現状がうかがえた。

5.3.2 方言と「共通語」に対する言語印象

前節では、地域で話される言葉として方言と共通語の使用状況がどのようなかを問い、福岡県の老年層や長崎県の若年層と一部の老年層において「共通語が多い」と認識している結果が確認された。ここでさらに、自分たちの使用する言葉にどういったイメージをもっているのか、「親しみ」と「上品さ」の観点から分析をおこなう。

問 C2 ではいわゆる「共通語」「標準語」とされる日本全国で用いられる全国共通語と地元の方言について、「親しみ」と「上品さ」の観点から話者が抱く言葉の印象（イメージ）を回答してもらった。ここではこの印象（イメージ）のことを言語印象と呼ぶ。

問 C2(a)で「3 両方」を含め、いずれの地域でも約 8 割の人が「方言に親しみを感じる」との認識を示している（図 5-4, 図 5-5）。特に佐賀県では全ての世代において地元の言葉に対する言語印象として親しみの強さが確認された。

この特徴は井上（2007, pp. 22-29）に示される 1997 年の NHK による言語意識の調査の結果でも類似した傾向が報告されている。この NHK 調査では、以下に示す (1)～(3)の言語意識および言語印象に関するデータが集められており、井上（2007, 図 1-2, p. 27-29）ではこの結果を地図に示している。

- (1) 「地元のことばが好きですか」
- (2) 「土地のことばも残すべきですか」
- (3) 「なまりがあるのは恥ずかしいことですか」

(1)～(3)の 3 点は 5 段階評価（++, +, 並, -, --）で集計されているが、九州北部の三県をみると、福岡県と長崎県において(1)「地元のことばが好きですか」と(2)「土地のことばも残すべきですか」が両県とも高く評価（++）されている。佐賀県はいずれの基準も並の評価であり、九州北部の三県とも総じて地元のことばを好み、これからも残していくべきであると考えていることがわかる。

また、問 C2(c)で言葉の品位について問うと、上品な言葉であるかどうかという指標では「両方」と回答したのが全体の過半数を超えた（図 5-7, 図 5-8）。方言と

共通語のどちらにも「上品な」言葉遣いがあり一概にどちらかを選択するということが難しいため、このような結果となったようである。しかしながら注目されるのは、福岡県と長崎県においては約 18%の人が「共通語」と回答していることである。「両方」との認識を示す人が多い中、一定の割合で「共通語」が選択された要因として、「共通語」が広く公の場で用いられる言葉であるという認識が共有されている状況が推察される。「両方」や「共通語」を選択した話者の中には、「共通語」を「いい言葉ですから」「共通語は正式な言葉」などと言った人も少なくない。仕事や会議などの多くの公的場面では基本的に「共通語」を中心としたコミュニケーションがおこなわれるため、厳密に言えば、方言まじりの共通語である可能性もあるが、話者の「共通語」の上品さに対する評価は高いと言えよう。

実際、目上の人と話す時に使用する言葉が「方言」と「共通語」のどちらであると思うのかを確認すると、「共通語」と回答する話者がかなり多くいることがわかる(図 5-6, 図 5-7)。特に長崎県では 50 代以下の年層でそのほとんどが「共通語」と回答しており、目上の人物に対して適切な言葉遣いであるとの認識を強く示している。反対に、福岡県や佐賀県では、長崎県よりも「方言」または「共通語」を選択した話者が少なく、約過半数が「両方」を回答した。

陣内(1997)では九州をフィールドとした記述の中で方言敬語と共通語敬語について触れ、「このふたつの敬語を、その素材敬語(話題の人物への敬語)について、上下関係と親疎関係という人間関係の 2 大要因の中で見ると次の図のようになる(図 5-3)。共通語敬語が目上でありかつ疎である相手に使われるのに対し、方言敬語は目上でありかつ親近感を持つ相手に使われる。つまり方言敬語は「目上意識」と「親しみ」を同時にさせる働きのあることがわかる。」(p. 96)と述べている。この記述からもわかるように、九州地方では、方言を用いた敬語の運用がよくおこなわれており、殊に方言敬語のバリエーションに富む肥筑方言域においてその現象は顕著である。福岡県や佐賀県においては、そうした方言敬語の運用状況が意識され、方言も共通語も使用するという「両方」の回答が多く確認されたのではなかろうか。また、「共通語」の偏りとして、60 代以上の話者と、福岡県の北部、ならびに佐賀県の東部(長崎県寄り)の若年層においてその意識が強いようである。井上(2007)は上述した NHK の言語意識の調査結果解説の中で、「その地方の方言と標準語・共通語との違いが大きいと意識する県」で地方のなまりを恥ずかしいと感じるという意見が多く寄せられていることに触れている。“標準的”とされる全国共通語と、地元で自分たちが使用している言葉の違いが顕著で、かつ、話し手に強く認識されている場合、こういった方言と共通語の使い分けの需要が生まれるのであろう。

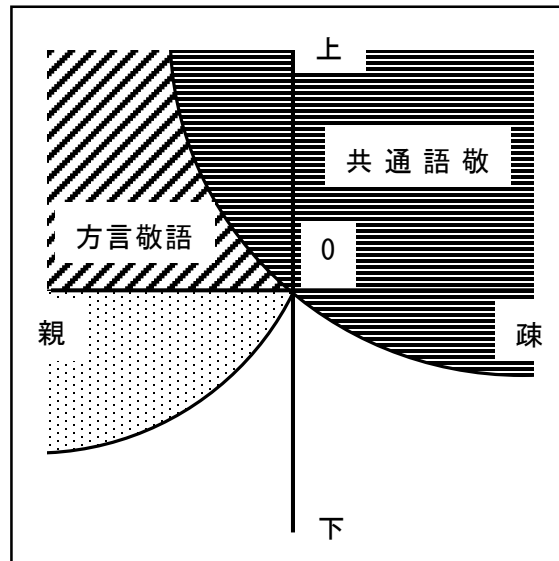
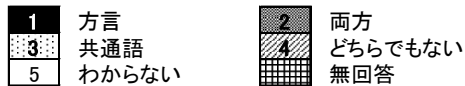


図 5-3 上下関係と親疎関係からみた方言敬語と共通語敬語の特性
(陣内 1997 より作図)

地元の言葉への愛着を維持しつつも、社会活動的な実用性については「共通語」の運用が際立っているため、必然的に共通語への言葉の重要性や信頼性も高まり、このことが「共通語」の品位が高いという言語印象に繋がってくるのであろう。しかし当然のことながら、完全なる「共通語」というものは存在しないため、実態として共通語意識のもとおこなわれる方言と捉えることが適切であると考えられる。特に九州北部では方言形式の敬語の運用も盛んであるため、品位の高いものとして方言と共通語の「両方」を支持する意見も多数聞かれた。ただし、品位が高い言葉として挙げられる方言敬語については、敬意だけではなく親しみを表す機能も有していることから、使用場面における「共通語」との使い分けが行われていると考えられる。

C2：NHKのアナウンサーなどが話すような全国的に使われる共通語と自分の地域で話される方言について、あなたの印象（イメージ）を教えてください。

(a) 親しみがある（親近感を抱く）のは…



		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉			2		1		1	
2	黒崎		1		1	1		2	
3	木屋瀬		1		1				3
4	飯塚		1		4		1		5
5	内野			4	2		2	1	
6	山家		1		1		1		
7	原田		1		1		1		2
8	田代		1			1	1		1
9	轟木					3		1	2
10	中原		1		1		1	1	
11	神崎					2	1		
12	境原		1		1		1	1	
13	佐賀		3		1		2	1	
14	牛津	1			1		2	1	
15	小田		2			1			1
16	北方	1			1		1		1
17	塚崎			2	1	1			1
18	嬉野		1		1	1		2	
19	彼杵		1	1			2	1	1
20	松原						1	1	
21	大村			4	1		1	1	1
22	永昌		5			1		3	1
23	矢上	5			1			1	
24	日見		1		1		2		
25	長崎			1		2	1	2	

図 5-4 回答一覧 (C2(a))

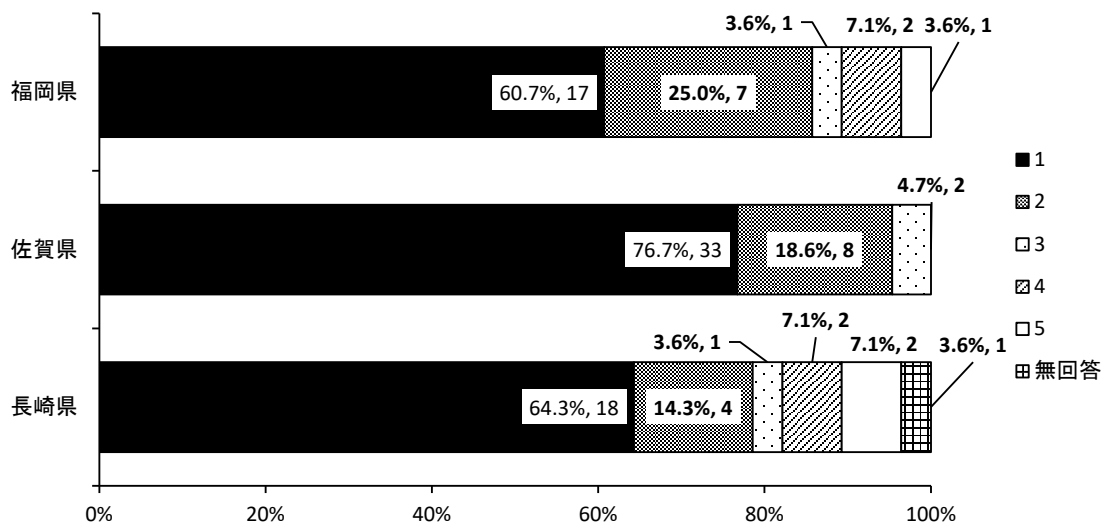
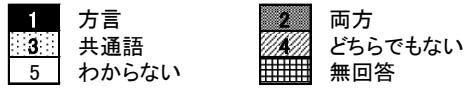


図 5-5 回答の県別割合 (C2(a))

(b) 目上の人と話す時に使うのは…



	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1 小倉				2	3			
2 黒崎		3		3			2	
3 木屋瀬		1		2	2			
4 飯塚		2		2				
5 内野			2			3		5
6 山家		2		2			3	
7 原田		3		2		1		2
8 田代			2					
9 轟木				3		3		3
10 中原		1		2		2		1
11 神崎					3	1		
12 境原		2		2			3	
13 佐賀		3		3		3		3
14 牛津		2		2		3		3
15 小田		3			2			1
16 北方	2			2		2		2
17 塚崎			4	1	2			2
18 嬉野		3		2	2		3	
19 彼杵			3	2		2	3	3
20 松原						2		
21 大村			2	3		3		2
22 永昌		3			3		2	3
23 矢上	3			3				
24 日見		2		3			1	
25 長崎			3		3	1	1	

図 5-6 回答一覧 (C2(b))

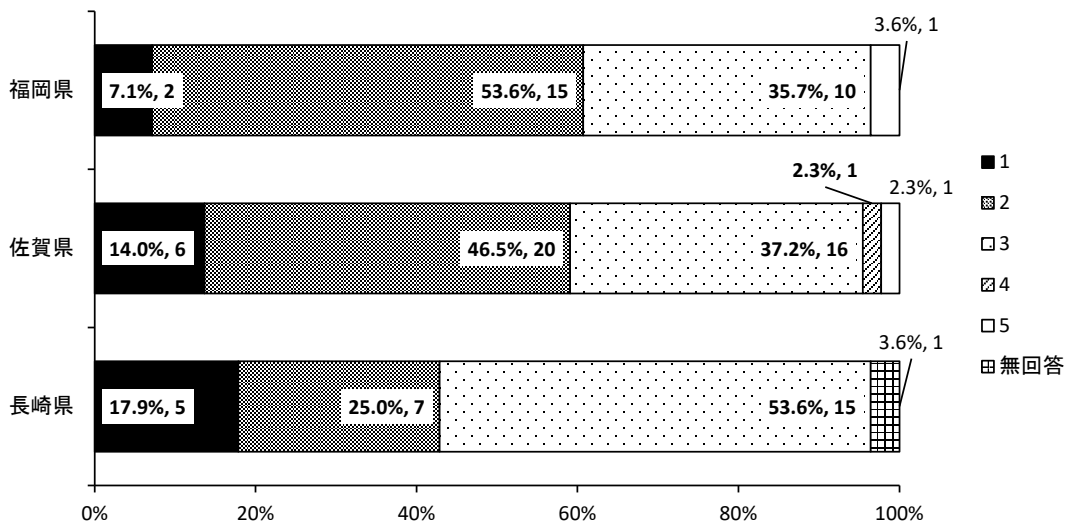
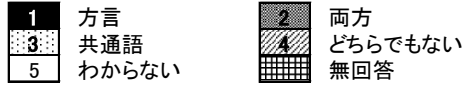


図 5-7 回答の県別割合 (C2(b))

(c) 洗練されている/上品であると思うのは…



	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1 小倉		2		2	2		2	
2 黒崎		2		2	2		3	
3 木屋瀬		2		2	2		2	
4 飯塚		2		2		2		5
5 内野			4	3		2	3	
6 山家		2		2		2		3
7 原田		2		2		3	4	
8 田代		2		2		2		2
9 森木				2		2	4	
10 中原		2		2		4	2	
11 神崎				2	1			
12 境原		2		2		2	3	
13 佐賀		1	5			2	2	
14 牛津		2	4		3	2	2	
15 小田		3			4	2		2
16 北方		2		2		2		4
17 塚崎			4	2	2			4
18 嬉野		2		2	2		2	
19 彼杵			2	3		2	2	3
20 松原						1	2	
21 大村			2	2		2	2	
22 永昌		2			2	2	2	
23 矢上		5		2			2	
24 日見		2		2		3		
25 長崎			3	2		1	3	

図 5-8 回答一覧 (C2(c))

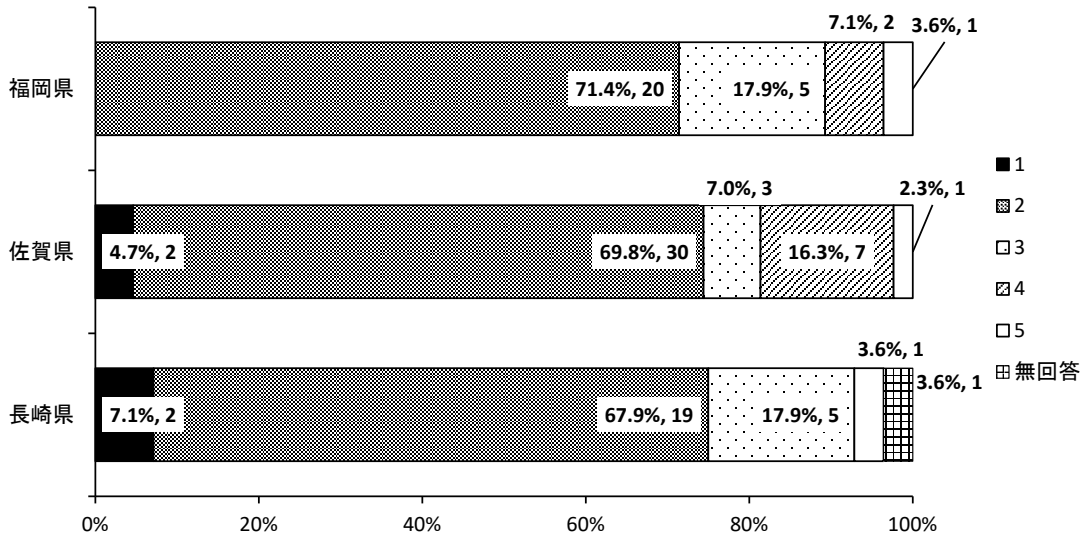
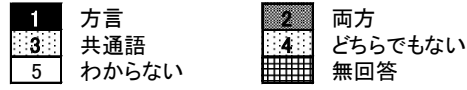


図 5-9 回答の県別割合 (C2(c))

(e) 自分が普段使うのは…



	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1 小倉			3	2	3		2	
2 黒崎		2		2	5		2	
3 木屋瀬		1		1	2		2	
4 飯塚		1		2		2	1	
5 内野			2	3		2		
6 山家		2		1		1		2
7 原田		1		2		1	2	
8 田代		1			2	2		3
9 轟木				2	2		1	2
10 中原		1		2		2	1	
11 神崎				2	1			
12 境原		2		2		1	1	
13 佐賀		3		2		2	2	
14 牛津		2		1		3	2	
15 小田		2			2			2
16 北方	1			1		2		2
17 塚崎			1	1	2			1
18 嬉野		2		2	1		2	
19 彼杵			2	2		2	2	3
20 松原						1	2	
21 大村			2	3		1	2	2
22 永昌		3			2	2	2	
23 矢上	2			1			1	
24 日見		1		2			2	
25 長崎			2		2	3	1	

図 5-10 回答一覧 (C2(e))

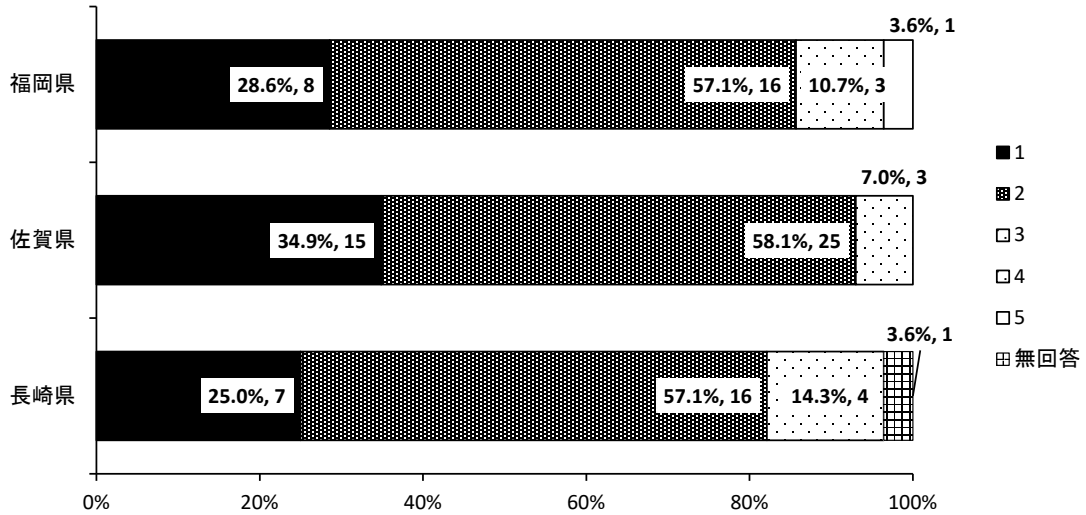


図 5-11 回答の県別割合 (C2(e))

5.3.3 敬意の対象に関する意識

問 C3 では、丁寧な言葉を用いる相手としてどういった人物が当てはまるのかについて回答を得た。身内に対する敬語使用の有無や、上下関係、親疎関係といった敬語運用の基準について、どのような基準が重視され、敬語表現の選択に影響を与えるのかに注目した。

5.2 節で示した(a)～(j)の基準を再度ここに示す。

〈設問〉

- | | |
|--------------|-------------|
| (a) 親 | (e) 初対面の同世代 |
| (b) 兄姉 | (f) 初対面の年上 |
| (c) 妹弟 | (g) 初対面の年下 |
| (d) 学校の担任の先生 | (h) 不仲な年上 |
| | (i) 不仲な年下 |
| | (j) 不仲な同世代 |

〈選択肢〉

- | | | |
|-----------|----------------|----------|
| (1) 使う | (2) 時々使う | (3) 使わない |
| (4) わからない | (5) 兄姉/弟妹をもたない | |

5.3.3.1 敬語使用の地域差

まず(a)～(c)の身内(親, 兄姉, 妹弟)に対する敬語使用の有無と, その比較として(d)学校の担任の先生に対する敬語使用の有無について結果をみる。

家族は社会の最小単位であり, 身内でありながらも上下関係が存在することから, 親族に対する敬語の有無が注目される。

親場面(図 5-13a/b), 兄姉場面(図 5-14 a/b), 弟妹場面(図 5-15 a/b)のそれぞれの場面での敬語使用に関して, 〈使用〉(「使う」と「時々使う」を回答した人)の地域差は確認されなかった。親場面でやや佐賀県での〈不使用〉(「使わない」と回答した人)の割合が高い様子がみられた(図 5-13)。場面差として, 親場面で最も敬語が用いられ, 兄姉場面, 弟妹場面の順に敬語の使用が少なくなる様子が認められるものの, 大きな地域差は見られない結果であった。グロットグラム図に地点別での回答一覧とその分布を示したが, 地域差とみられるような分布の偏りは認められなかった。

一方, 親族ではない「学校の担任の先生」を相手とした場面では, 当然ながら全体的に〈使用〉の割合が高い結果となったが, 中でも特に長崎県においては90%以上にのぼり, 他二県よりも強い敬語使用の意識がみられた。教員を相手にした適切な言葉遣いとして敬語を使用する必要があるという上下関係に基づいた強い規範

意識の表れであろうか。

また、「学校の担任の先生」を相手とした場面でも佐賀県における敬語使用について他二県より「使う」と断言する回答の割合が少ないことが注目される。第4章 図4-3, 図4-4で示したように当該地域においては「オンサル」のようなナサル敬語に由来する方言敬語が常用的に行われていることが知られているが、実態として使用している当事者である話者においては敬語を使用しているという意識が高くないのかもしれない。陣内(1997)が「共通語敬語が目上でありかつ疎である相手に使われるのに対し、方言敬語は目上でありかつ親近感を持つ相手に使われる。つまり方言敬語は「目上意識」と「親しみ」を同時に出せる働きのあることがわかる。」(p. 96, 下線は筆者による)と指摘したように、言語構造としては敬語形式が含まれていても、敬語を使用しているという意識が働いていない実態が推察され、今後その運用の在り方について注目した調査が期待される。

問 C3：次の人に話しかける時，丁寧な言葉（敬語など）をういますか。

(a) 親

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉				3	3		1	
2	黒崎		1		1			1	
3	木屋瀬		3		3	3		2	
4	飯塚		3		3		2	4	
5	内野			3	2		1	2	
6	山家		3		3		1		1
7	原田		3		3		2	2	
8	田代		3			3	3		3
9	轟木					3	3	2	
10	中原		3		2		3	3	
11	神崎					3	3		
12	境原		1		3		3	1	
13	佐賀		3		3		3	1	
14	牛津		3		3	2	5	2	
15	小田		3		3	3			1
16	北方	3			3		2		2
17	塚崎			3	3	3			3
18	嬉野		2		3	3		2	
19	彼杵			3	3		3	3	3
20	松原						2	2	
21	大村		3	2			3	1	
22	永昌		3		2		2	2	
23	矢上	2			2			1	
24	日見		3		3		2		
25	長崎		3		3		2	3	

図 5-13a 親場面での敬語使用（回答一覧）

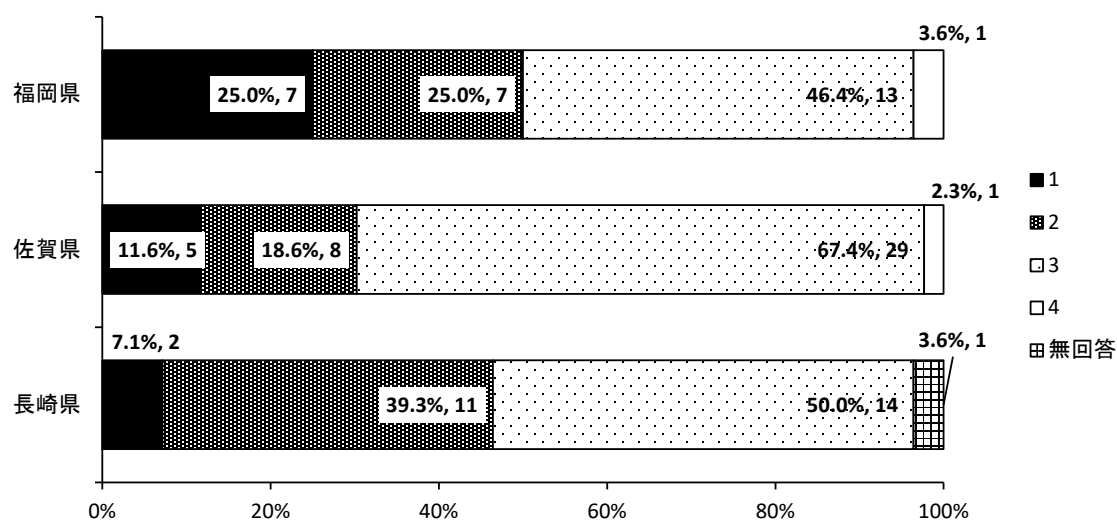
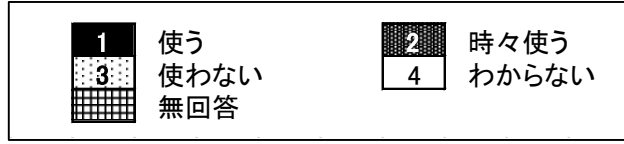


図 5-13b 親場面での敬語使用（地域差）

問 C3：次の人に話しかける時，丁寧な言葉（敬語など）をういますか。

(b) 兄弟



		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉				3	3		2	
2	黒崎				3			1	
3	木屋瀬		3		5	3		3	
4	飯塚		3		3		2	5	
5	内野			3			5	2	
6	山家				3		3		5
7	原田		5		3		2	5	
8	田代		3			3	3		5
9	轟木				3			5	2
10	中原		3		5		3	3	
11	神崎					3	3		
12	境原		3		3		3	2	
13	佐賀		5		3		5	2	
14	牛津		5		5	2	5	1	
15	小田					5			3
16	北方		5		3		3		3
17	塚崎			3	3	3			5
18	嬉野		5		5			2	
19	彼杵			3	3		3	3	3
20	松原							3	5
21	大村			3	3		3		5
22	永昌		5			3	3	2	
23	矢上		3		3			3	5
24	日見			3				2	
25	長崎			5		5	3	3	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

図 5-14a 兄弟場面での敬語使用（回答一覧）

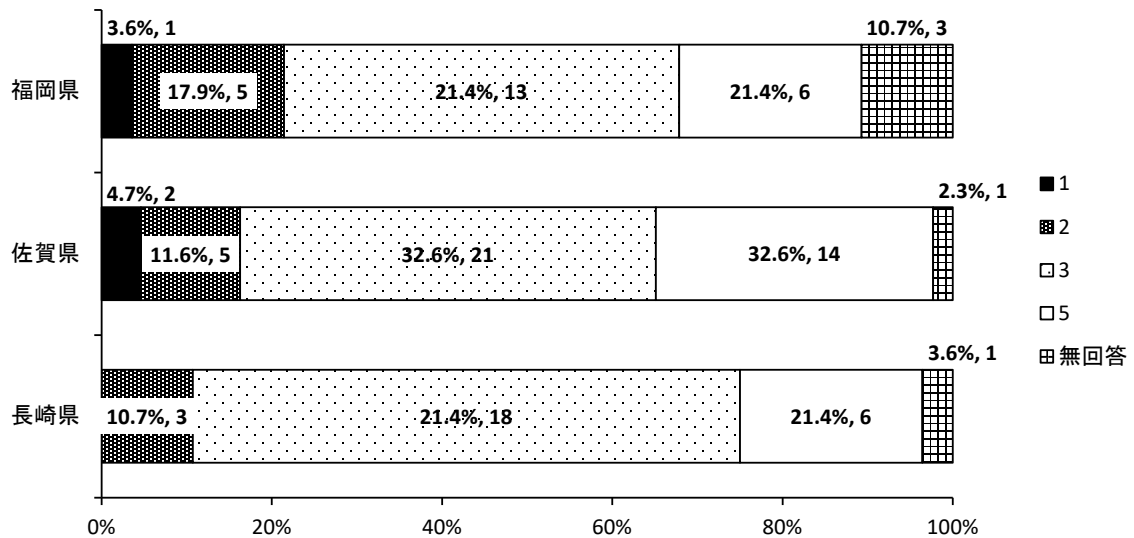
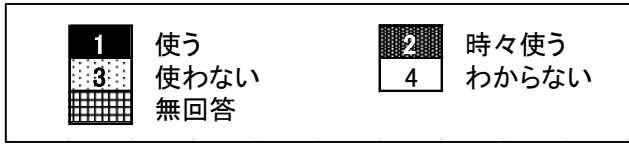


図 5-14b 兄弟場面での敬語使用（地域差）

問 C3：次の人に話しかける時，丁寧な言葉（敬語など）をういますか。

(c) 妹弟



		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉				3	2		2	
2	黒崎		3		3	3		3	
3	木屋瀬		3		3	5		3	
4	飯塚		5		3			5	
5	内野			3	5		3	3	
6	山家		3		3		5		3
7	原田		3		5		5		3
8	田代			3		3	3		3
9	轟木				3			3	2
10	中原		3		3		3	3	
11	神崎				3	3			
12	境原		3		3			2	
13	佐賀		5		3		3	5	
14	牛津		3		3		2	1	
15	小田		5			3			3
16	北方	3			3		5		3
17	塚崎			3	3	5			3
18	嬉野		3		3	3		3	
19	彼杵			5	3		3	5	3
20	松原							3	
21	大村			3	3		3	3	3
22	永昌		3			3	5	2	
23	矢上	3			3			3	3
24	日見		5		3			2	
25	長崎			3		3	5	3	

図 5-15a 弟妹場面での敬語使用（回答一覧）

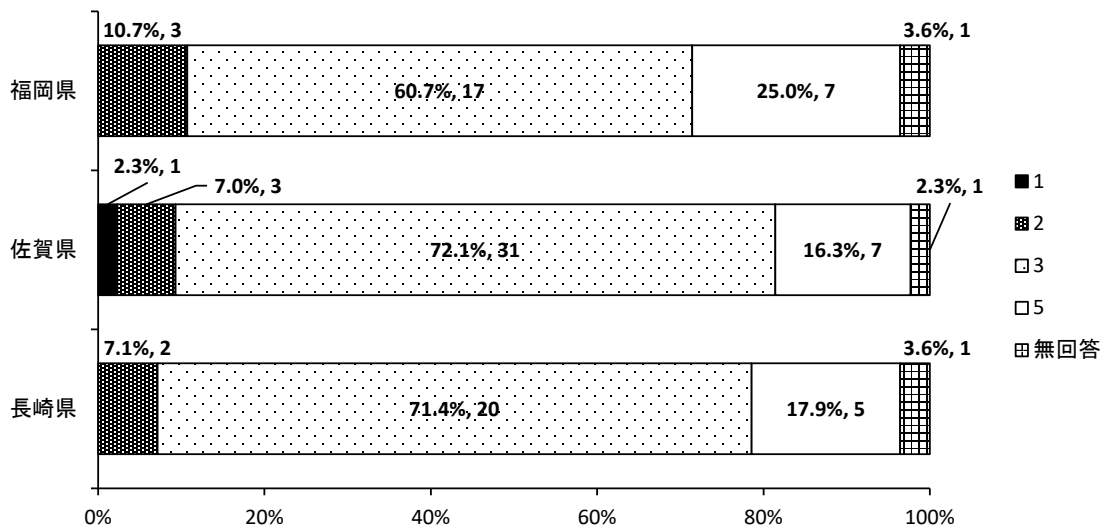


図 5-15b 弟妹場面での敬語使用（地域差）

問 C3：次の人に話しかける時，丁寧な言葉（敬語など）をういますか。

(d) 学校の担任の先生

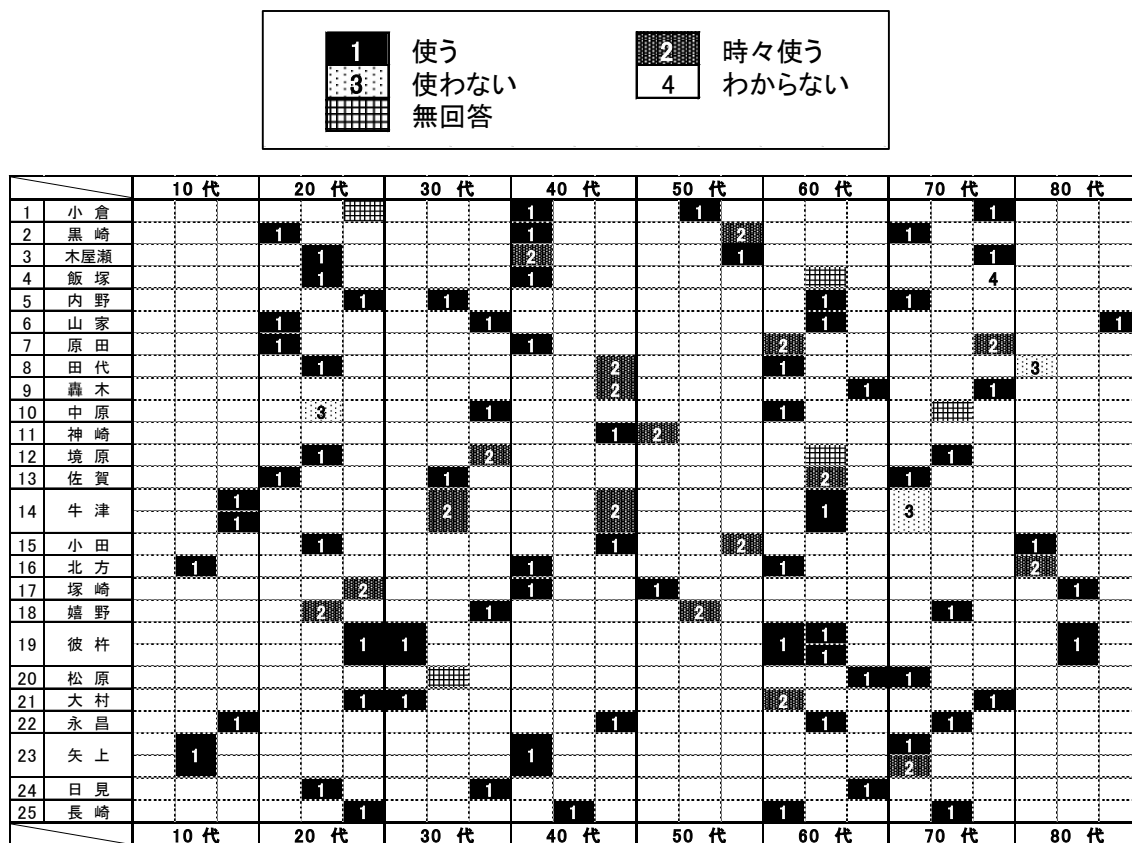


図 5-16a 学校の担任の先生場面での敬語使用（回答一覧）

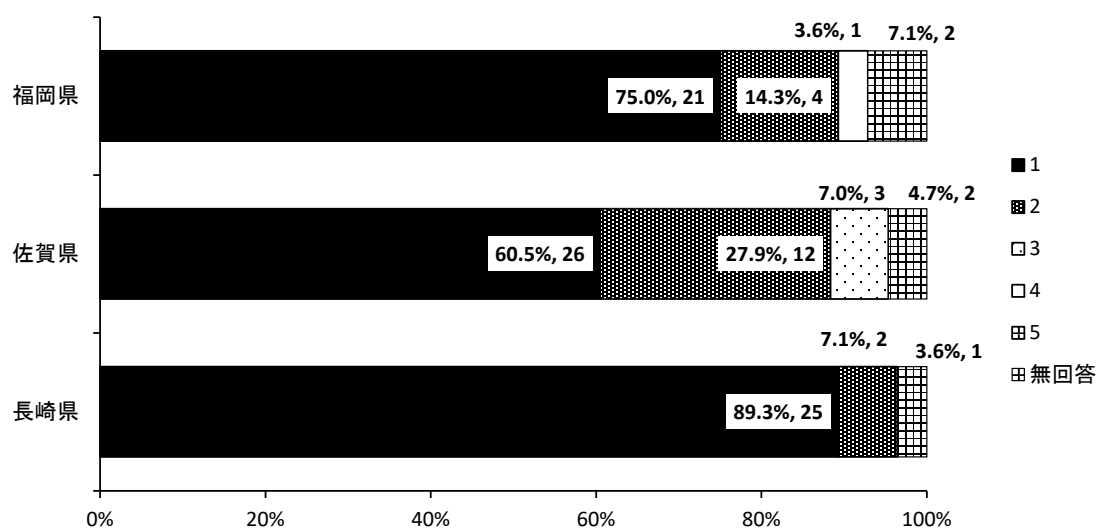


図 5-16b 学校の担任の先生場面での敬語使用（地域差）

5.3.3.2 敬語使用の世代差

続いて、親と兄弟（兄姉/弟妹）、学校の担任の先生に対する敬語使用について、その世代差をみる。表 5-1 はここで取り扱うデータ（世代別話者数）である。今回、調査協力を依頼する際、20 歳ずつの区分（若年層（15-29 歳）、中年層（30-49 歳）、壮年層（50-69 歳）、老年層（70 歳以上））でサンプリングをおこなったため、区分の性質上偏りが生じ、10 代、50 代、80 代において話者数が少ない点を留意願いたい。

話者の世代別に回答を集計した結果、最も敬語を使用する傾向にあったのは 60 代以上の壮年層後半から老年層にかけてであった（図 5-17, 図 5-18, 図 5-19）。

〈使用〉（「使う」または「時々使う」）と回答した人の割合は 40%後半から 50%を超えており、特に「使う」と回答した人が多いことが特徴的である。

「使う」と回答した人の中には戦時中の家庭を振り返り、「父親に対して無礼な言葉遣いは許されなかった時代だった」と言う人もいた。また、〈使用〉の回答が少なかった若年層から中年層のうち、〈使用〉と回答した人の理由として、世襲制の自営業の家庭であることが述べられた。

このような家庭で目上となる人物に対する敬語使用の根幹となる考えは、明治時代に制度化された家父長制度（申 2006）の名残であろう。60 代以上の人達が幼い頃は明治・大正生まれの家族に囲まれた家庭であったことから、父親または跡継ぎとなる長男の立場は絶対的であったと考えられ、当時の家庭と現代の家庭での父親の存在に対する認識は全く異なるものであることは明らかである。

また、世襲制の会社を営む家庭などでは、3 世代での居住形態や、跡継ぎとなる息子と家の存続のために跡継ぎを立派に育てなければならない親との関係性が維持されるため、師弟関係のような上下関係の認識を明確にもつことが家庭内で重要になってくる。このような家庭環境下にある人物にとっては、父親は絶対的な存在であり、このことが本人の敬語使用に強く影響するのではないだろうか。

図 5-20 に示すのは、「学校の担任の先生」に対する敬語使用についてである。ここでは、親族場面において敬語の〈不使用〉が多かった世代を含めた全世代において敬語の〈使用〉が示されている。このことから、「学校の担任の先生」に対する場面では、世代差はほとんど認められない。この場面における敬語使用の意識の背景には、「目上の人に対しては丁寧な言葉を使うものである」という、家族（ウチ）に対して外部の人間（ソト）であるというウチソトの概念が働いていることが明らかである。目上にあたるから敬語を使うという上下関係に基づく基準だけでなく、身内か否かの社会的立場に基づく敬語の使用がおこなわれている様子が窺える。

表 5-1 サンプル数（世代別話者数）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
計	5	18	11	15	7	19	18	6

単位：人

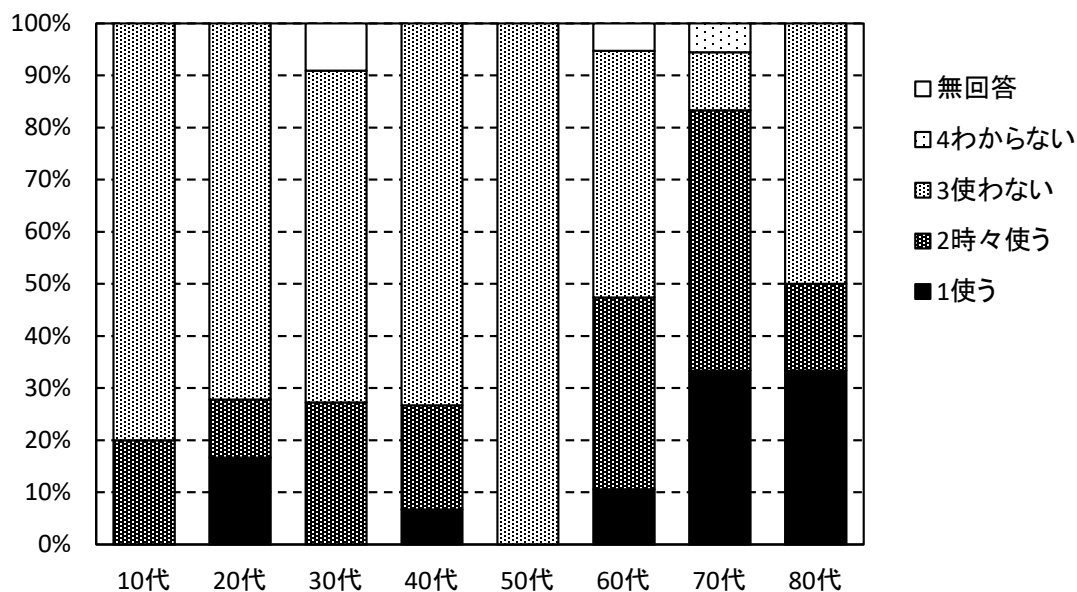


図 5-17 親に対する敬語使用（世代別）

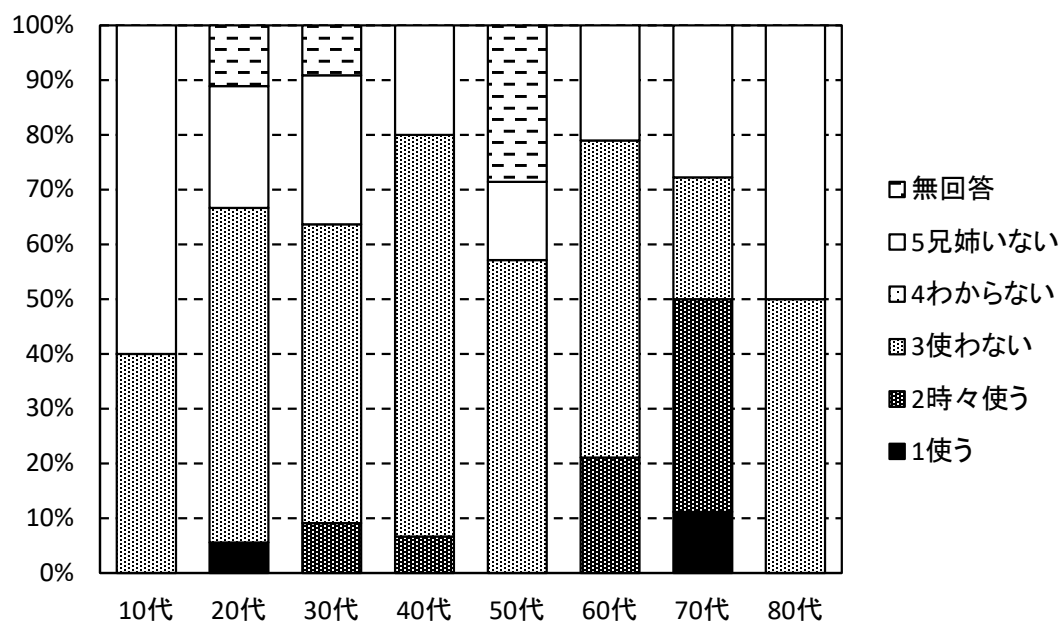


図 5-18 兄弟に対する敬語使用（世代別）

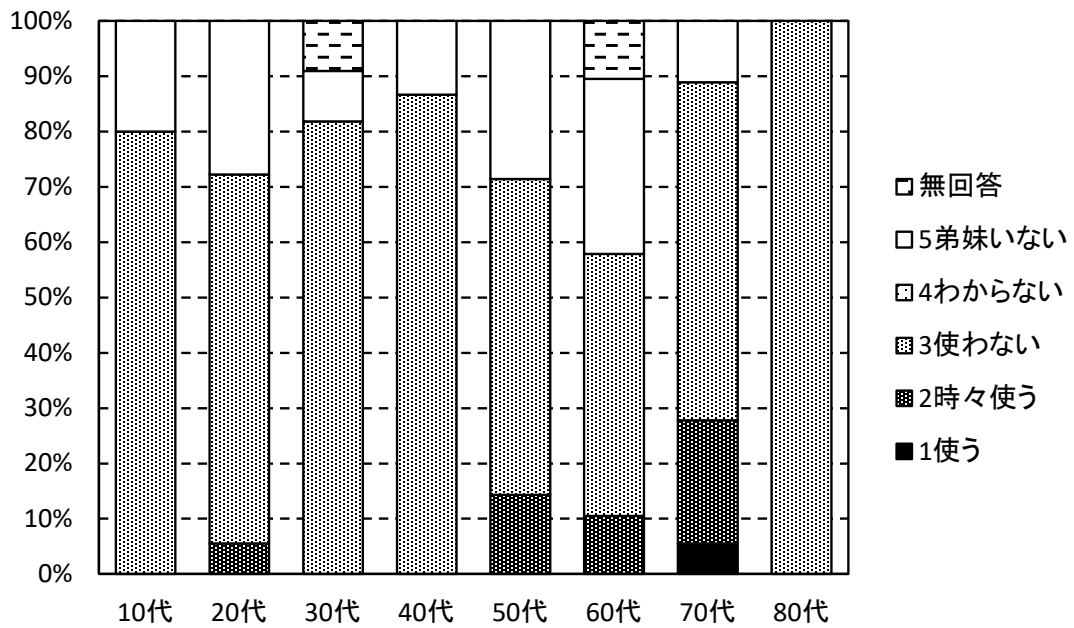


図 5-19 弟妹に対する敬語使用（世代別）

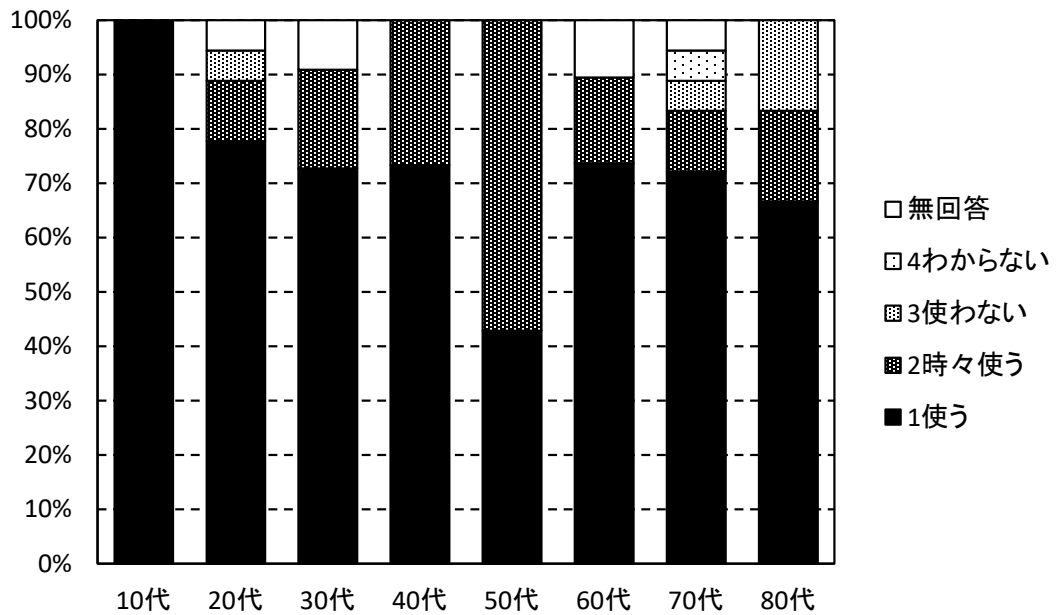


図 5-20 先生に対する敬語使用（世代別）

5.4 言語意識に関するまとめ

ここではグロットグラム調査で得られた言語意識と言語印象に関する調査結果をもとに、長崎街道沿いの人々の言葉に対する認識を明らかにした。

言語意識には地域差がみられた。福岡県は若い世代において「方言色が濃い」との認識を示しているのに対し、壮年層以上になると「共通語が多い」と評価したことから、現代の方言運用に対する世代間の差が明らかとなっている。佐賀県は全地点・全世代において「方言色が濃い」との認識を示し、その中でも旧藩区画に従う形で地域差があることが意識されており、この地域の人々の言葉に対する意識の高さがうかがわれた。また長崎県では、若い世代に高い共通語意識が持たれていることが明らかとなった。

各地でこうした言語意識が確認されたものの、根底には方言に対する親しみがあることがわかった。時と場合によって方言と共通語の使い分けもなされていることから、共通語と方言の間に言語印象の違いが存在し、それによる役割分担もおこなわれているようである。

敬語を使用するかどうかという敬語使用の基準として、身内尊敬の用法は60以上の老年層と一部の若年層において確認された。敬語使用について、家庭(ウチ)に対するソトの人間である先生に対する場面ではほとんどの人が使用することから、社会的立場が上であることは基本としてあるようである。

5.5 シャル敬語の運用と敬語意識

続いて、福岡県飯塚市で運用される方言敬語「(ン) シャル」(以下、「シャル敬語」と言う)について着目し、アンケート調査の結果と談話資料にみられるシャル敬語の運用実態について述べる。また、長崎街道グロットグラム調査で実施したシャル敬語の運用に関する意識調査の結果をまとめ、シャル敬語が行われる地理的分布の範囲を明らかにした後、当該地域における人々がどのような意識でシャル敬語を捉え、使用しているのかについて考察する。

5.5.1 分析対象

5.5.1.1 九州北部地方で行われるシャル敬語

九州地方の北部に位置する福岡県下では、県西部である筑前域を中心に広く「シャル敬語」がおこなわれている。筆者は卒業研究(塩川 2014)での福岡県筑豊地方の二市(飯塚市、田川市)における方言敬語の調査をきっかけに、福岡県飯塚市

を中心におこなわれるシャル敬語の用例を収集してきた。

- (1) アソコノ オクサン, クルマ ノリヨンシャレンメーガ。
あそこの奥さん, (日頃から) 車 [に] 乗ってないでしょ。
 - 話し手 : 50代女性【飯塚出身】
 - 敬意の対象: 近所の70代女性
 - 聞き手 : 話し手の娘である筆者

- (2) コンド ウチニ キンシャートチテ。
今度家にこられるんだって。
 - 話し手 : 60代男性【宮若出身】
 - 敬意の対象: 職場の50代男性
 - 聞き手 : 妻である50代女性

- (3) アソコニ タットンシャーヒトニ キーテミンシャイ。
あそこに立っている人に聞いてみなさい。
 - 話し手 : 70代女性【飯塚出身】
 - 敬意の対象: 初見の20代女性
 - 聞き手 : 筆者

本章で取り扱う「シャル敬語」とは、尊敬の助動詞ナサルに由来する尊敬の助動詞であり（藤原 1978）、動詞の連用形に続き、「イキンシャル」（行かれる）「キンシャー」（来られる）など「ンシャル」（または語末が長音化して「ンシャー」、促音化して「ンシャッ」）の形式で用いられるもののことをいう。

九州方言の方言敬語に関する記述のなかでは、最高の敬意をもつとされる「ナサル」系の敬語の訛形であり、九州方言の先行研究においても、軽い敬意を表す機能や、「親しみ」をあらわす機能が大きいことが指摘されている（陣内 1997・九州方言学会 1991）。女性語として盛んであるという記述もみられるが（岡野 1988・九州方言学会 1991）、『福岡県域言語地図』（1987）には男性による使用が多数報告され、陣内（1997）には「もともとは博多の商家の女性から広まったとされ、現在では男性にも浸透した表現となっている。」という記述もあることから、男女の別にかかわらずおこなわれる表現であると考えられる。

そこで福岡県・佐賀県・長崎県を中心とした九州北部地方におけるシャル敬語の地理的・世代的分布を捉えるために、長崎街道グロットグラム調査の結果を分析する。

長崎街道は江戸時代に整備された脇街道として九州全域と本州とを繋ぎ、歴史

的に人々の往来を支えてきた街道であり、現在は国道として本州の玄関口となる山口県下関市に続く九州北部の主要な道路となっている。この長崎街道沿いに実施されたグロットグラム調査の結果を分析することで、九州北部地方三県におけるシャル敬語の地理的・世代的分布の様相を概観し、さらに先行研究に記述される福岡方言におけるシャル敬語の「軽い敬意を表す」(九州方言学会(1991))、「女性語である」(岡野1988・神部1992)などの性質について、今回のグロットグラム調査の結果と比較することにより、シャル敬語の現状を捉えることを試みる。

5.5.1.2 シャル敬語に関する先行研究

まず、シャル敬語の全国的な地理的分布を報告したものとして藤原(1978)が挙げられる。藤原(1978)の「方言敬語法の研究附図」第8図には「「～ンサル」類尊敬表現法分布概況図」が報告されており、これによると「ンシャル」を用いる地域としては福岡県の筑前全域、筑後域の北部、佐賀県および佐賀県と長崎県の県境域にその分布が報告されている(図5-21)。

藤原(1978)ではこの「ンシャル」について、「「ンサル」「ンシャル」ことばとなると、これは、筑前方面につながって、佐賀全県下が、そのいちじるしいものを示す。」(p.399)と言及しており、さらに、「「ンシャル」などは、また、筑後北部にも見られる。「～ンシャル」が、いくらかの「～ンサル」とともに、筑前によくおこなわれているのは注目をひく。(中略)「シャ」形の方が、筑前では、他地方以上によくおこなわれるありさまになっている」(p.400)と、福岡県北部および西部から佐賀県にかけて盛んにおこなわれる様子を指摘している。こうした指摘や図5-21からもシャル敬語の分布を概観することができる。また、上村(1998)には「(3)「なさる」系の、(イ)行キンシャル…両筑・佐賀県・大分県一部。」(p.58)という記述も確認され、福岡県の筑前筑後両地域に加え、佐賀県全域と大分県の一部地域にも分布していることが報告されている。

前述した藤原(1978)による分布概況図には本章で取り扱うシャル敬語の分布が右上がりの太い破線で描かれ、佐賀県下全域は「～ンサル」(右上がりの実線)と交互に描画されているが、あくまで概況を示すものであり、福岡県下以外の地域におけるシャル敬語の地理的な分布についてその詳細を読み解くことは難しい。

また、九州方言学会(1991)には九州各県におこなわれる敬語表現についてまとめられており、ナサル系の敬語として本章で取り扱うシャル敬語への言及を確認することが出来るものの、一部では未然形に接続する「せらるる・させらるる」に由来するシャル敬語(サッシャル)との別が判断できない記述もみられる。以下にその一例を引用する。

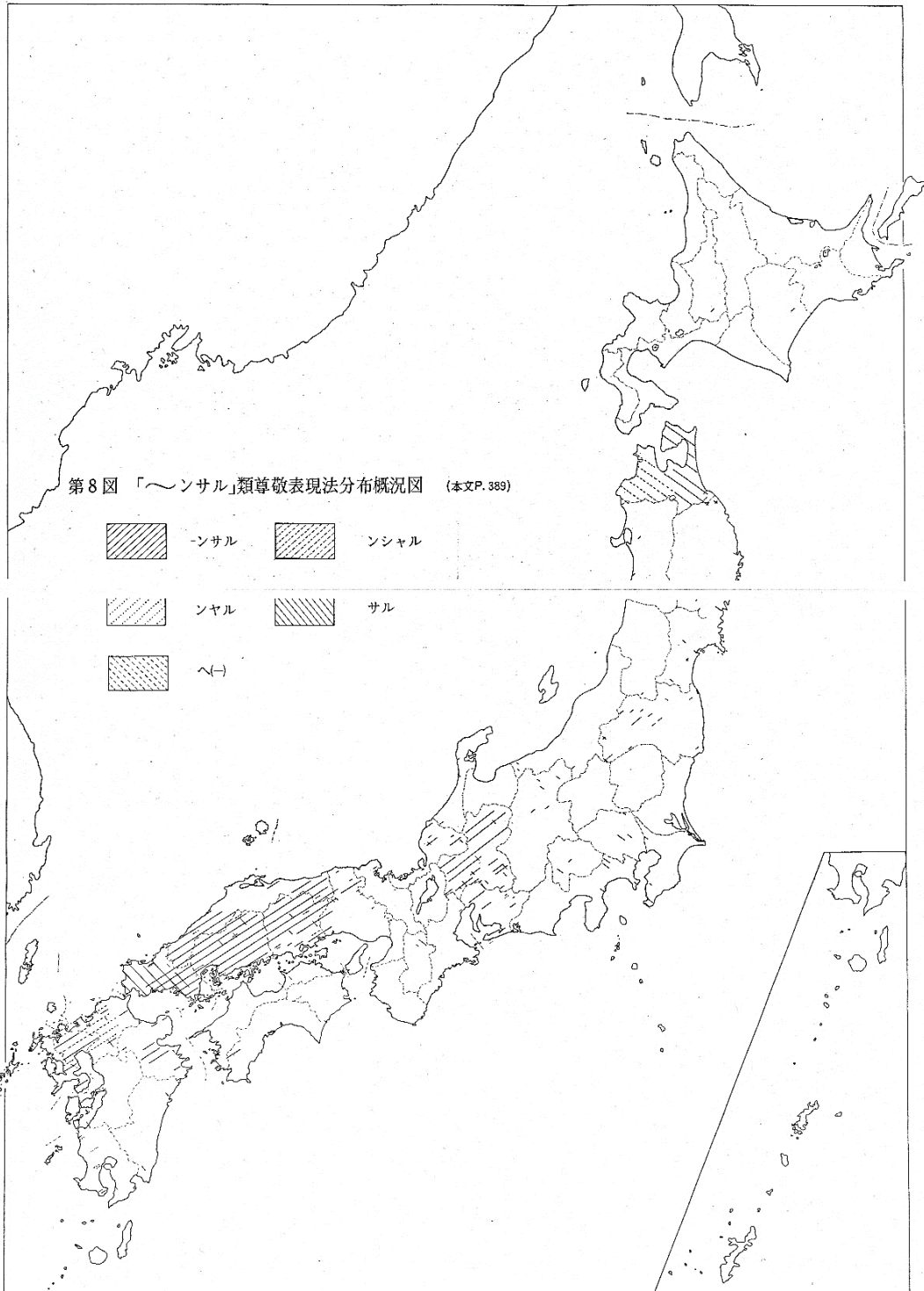


図 5-21 「「～ンサル」類尊敬表現法分布概況図」
 (藤原(1978)「方言敬語法の研究附図」第8図を引用)

＜九州方言学会（1991）にみられるシャル敬語の記述＞

九州方言の各県別解説

(3) ①ナサル 筑前・筑後（熊本県境を除く。）、敬意は最高。近時、訛形、ンシャルが福岡市とその周辺に女性語として盛んである。（福岡県社家町，p. 206）

(4) 佐賀東部西部地区ともに敬意を加えるのにンサル・ゴザルを用いる。活用はラ行五段に準じるが、命令形がンサイ・ゴザイとなる。（中略）鳥栖地区ではゴザルも用いるが、よりていねいなのはッシャルである。イカッシャル・ヨマッシャルなど。（中略）東松浦地区ではゴザルは用いない。鳥栖地区と同じくシャルを用いる。（佐賀県， p. 215）

(5) 敬語は地方別で若干相違がみられる。対馬はゴザル系・シャル系，壱岐はゴザル系・シャル系・ス系，平戸・北松浦はオ～ス系，大村・東彼杵はス系，諫早・北高来はス系，島原・南高来はス系・ナハル系，長崎はス系・オ～ス系，福江・南松浦はシャル系・ナハル系である。（長崎県， p. 223）

ここに取り挙げた記述(3)～(5)は、本章で調査対象とした福岡県，佐賀県，長崎県に関する県別の敬語表現に関する記述である。この場合，(3)は本章で目標とするシャル敬語であることは明らかであり，(4)はせらるる由来の「サッシャル」敬語であることが読み取れる。しかしながら(5)にみられる記述からは「シャル系」がどちらを言い指すのか，その判断は難しい。

このような現状を鑑み，今回のグロットグラム調査では「ンシャル」に着目した調査をおこなうことによって，先行研究の記述の検証を可能にし，調査対象地域におこなわれるシャル敬語現況に迫りたい。

5.5.1.3 分析対象データ

ここで分析対象となるデータは第2章2.1で示した「九州北部地方におけるグロットグラム調査」の調査結果に基づくものである。調査概要の詳細は第2章2.1(1)～(6)を参照されたい。取り扱う質問項目は調査で使用した「敬語表現に関する質問票」(第2章2.1(4))の内容であるⁱⁱⁱ。

5.5.2 シャル敬語の運用

5.5.2.1 アンケート調査に基づくシャル敬語

これより調査の結果を示しつつ、シャル敬語が分布する地域およびその世代について概観する。

まず、調査対象地域の各地点各世代の話者にシャル敬語を使用するかどうかを問うた結果、シャル敬語が分布する範囲として北は木屋瀬の40代、南は矢上の70代であることが確認された(図5-22, 記号: ■)。ただし、矢上の70代話者は「昔使っていたが今は使っていない」という内省を示しており、今回調査した範囲で現在も使用が確認される地域は永昌が南端ということになる。

ここで注目されるのは、福岡県の筑前域から佐賀県の嬉野に至るまでの分布については地理的連続性を認められるものの、永昌のみ孤立して分布しており、嬉野から永昌に至る3地点(彼杵, 松原, 大村)にはシャル敬語が行われていないという点である。これらの地域からは「佐賀や諫早の言葉であり、自分は使わない」(sng62, sng66a, sng84, mtb68ほか)との内省が得られた。少なくとも彼杵から大村にかけての地区の言葉としてシャル敬語がおこなわれていないことが確認された^{iv}。

今回の調査結果をグロットグラム図上に示した際、シャル敬語の地域的連続性が嬉野でとどまり、永昌に孤立して確認される一つの要因として、旧国の区分と険しい地形が挙げられるだろう。永昌は今でこそ長崎県の地域だが、旧藩区分に従うと佐賀の鍋島藩に相当し、長崎の大村藩とは旧国の区分が異なっていたという歴史がある。松原, 彼杵や大村の話者にはこの区画の違いが強く認識されており、永昌の言葉がこれらの地域と異なるのは属した藩が違うからであると断言していた。また、地理的条件をみても、嬉野から彼杵を経て永昌に至る間には多良岳山地が広がっており、この山地が旧国の区画と一致していたことも一因と考えられる。これらのことから、嬉野以西の地域におけるシャル敬語の地理的連続性は嬉野から鹿島・大浦を經由して永昌に至っていることが推定される。

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉			●	—	—		—	
2	黒崎		—			—		—	
3	木屋瀬		—		■	—			●
4	飯塚		■		■		■	■	■
5	内野			—	—		■	■	
6	山家		■		■		■	■	■
7	原田		■		■		■	■	■
8	田代		■		■	—			—
9	轟木				■		—	■	■
10	中原		—		■		■	■	■
11	神崎				■	■		■	
12	境原		■		■		■	■	
13	佐賀		—		■		■	—	■
14	牛津		■		■		■	■	
15	小田					—			■
16	北方	■			■		■		■
17	塚崎			■	■				■
18	嬉野		■		■	■		■	
19	彼杵			—	—		—	—	—
20	松原			—			—	—	
21	大村			●			●		—
22	永昌		—			■		■	■
23	矢上	●			—			—	
24	日見		—		—		—	—	
25	長崎			N	●		—	—	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

- 使う
- 自分は使わないが聞いたことはある
- 聞いたこともない
- N 無回答

図 5-22 シャル敬語を使用する地域と世代

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉			□	⊖	⊖		⊖	
2	黒崎		N		N		N	N	⊖
3	木屋瀬		⊖		■		N		⊖
4	飯塚		■		■		■	■	■
5	内野			⊖			■	■	
6	山家		■				N	N	■
7	原田		■		■		N	N	N
8	田代		■		■		○		○
9	轟木				■		N	N	N
10	中原		N		N		N	■	
11	神崎				N	■			
12	境原		N		□		■	N	
13	佐賀		N		□		□	○	
14	牛津		□		□		□	□	
15	小田		■		N		○		□
16	北方	N			N		■		■
17	塚崎		■		□	□	■		□
18	嬉野		■		■	N		■	
19	彼杵			⊖	⊖		⊖	⊖	⊖
20	松原			⊖			⊖	⊖	⊖
21	大村			N			□	⊖	⊖
22	永昌		N			■	■	■	⊖
23	矢上	N						○	○
24	日見		N		N		N	○	○
25	長崎			N	●		⊖	⊖	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

- 使う(シャ形)
- 使う(サ形)
- 使う(サ形・シャ形併用)
- ⊖ 聞いたことはあるが自分は使わない
- 使わない
- 聞いたこともない
- N 無回答

図 5-23 使用するシャル敬語の語形

さらに、シャル敬語を「使用する」と回答した地点を中心に、こういった形式でシャル敬語を使用するのかを問うた(図 5-23)。ここで注目されるのは佐賀県の境原から塚崎にかけての地域には「ンサル・ンサ(一)」(以下サ形, 記号: \square) が優勢の地域が存在していることである。

藤原(1978)では佐賀県下全域におけるサ形とシャ形について全域に盛んであると記述されていたが、今回の調査の結果、サ形のみを用いるという地域とシャ形との併用が行われている地域が存在するという地域差を見出すことができた。特に、シャ形とサ形を併用する小田・北方・塚崎では、シャ形よりもサ形の方が敬意が高い表現であるとみなしており、言葉の形式のみならずそれに伴う敬意についても地域差を認めることができる。

シャル敬語を使用するかどうかという運用面に関する分布は明らかな世代差を確認できなかった(図 5-22)。つまり、1980年代から盛んにおこなわれていると指摘されているシャル敬語は依然としてその勢力を維持しているということになる。シャル敬語の使用が維持されている理由を現段階で明らかにすることは難しいが、中学生や高校生にもおこなわれている現状があることから、身近な方言敬語として行われていることが窺える。

5.5.2.2 シャル敬語に対する意識

シャル敬語の地域的分布を明らかにするにあたって、冒頭で触れたシャル敬語に関する先行研究に言及される特徴がどこまでみられるのか、話者に尋ね、その内省を得た。

まず、「シャル敬語は女性言葉だと思うか」という質問をおこない、「はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ」の四択で回答を求めた(図 5-24) ^v。

シャル敬語は元々博多の商家の女性から広まった表現である(陣内 1997)とされ、故に、先行研究においてはシャル敬語が女性言葉であったとする記述は諸所にみられる(岡野 1988・陣内 1997・九州方言学会 1991・神部 1992)。その一方で、相手の動作に対して～ンシャルという敬語を伴わせるため、柔らかい言葉遣いの印象を与え、ゆえに次第に男性にも浸透したと(陣内 1997)とも言われている。岡野(1987)では老年層にあまりみられず、少年層を対象にした調査結果でシャル敬語の勢力が優勢なさまが明らかになっていることから、1980年代当時すでに男性の間にもシャル敬語の浸透が進んでいたと考えられる。

地点別にみても、半数以上で「はい」(＝女性言葉だと思う)と回答した地域は、飯塚、内野、中原、神埼、佐賀、小田、嬉野、彼杵であった(図 5-24)。世代別に分けた場合、若年層から老年層にかけて段階的に「はい」の割合が多くなっ

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉			NR	2	4		NR	
2	黒崎		NR		4	4		4	
3	木屋瀬		4		4	4		1	
4	飯塚		4		4		2	2	
5	内野			1	4		1	1	
6	山家		4		4		2		4
7	原田		4		4		4	1	
8	田代			4		4	4		4
9	轟木				4			NR	4
10	中原		4		2		4		
11	神崎				2	4	4	2	
12	境原		4		2		4	4	
13	佐賀		3		4		2	1	
14	牛津	4			1	4	4	1	
15	小田		2			2	1		4
16	北方	4			4		4		2
17	塚崎			4	3	4			4
18	嬉野		2		2	4		4	
19	彼杵			4	2		2	2	2
20	松原				3		2	1	
21	大村			NR	NR		4	3	
22	永昌	4				4	2	4	4
23	矢上	NR			NR			1	
24	日見		NR		1			NR	
25	長崎			NR			4	3	NR

1	はい
2	どちらかといえばはい
3	どちらかといえばいいえ
4	いいえ
NR	無回答

図 5-24 シャル敬語は女性言葉かどうか

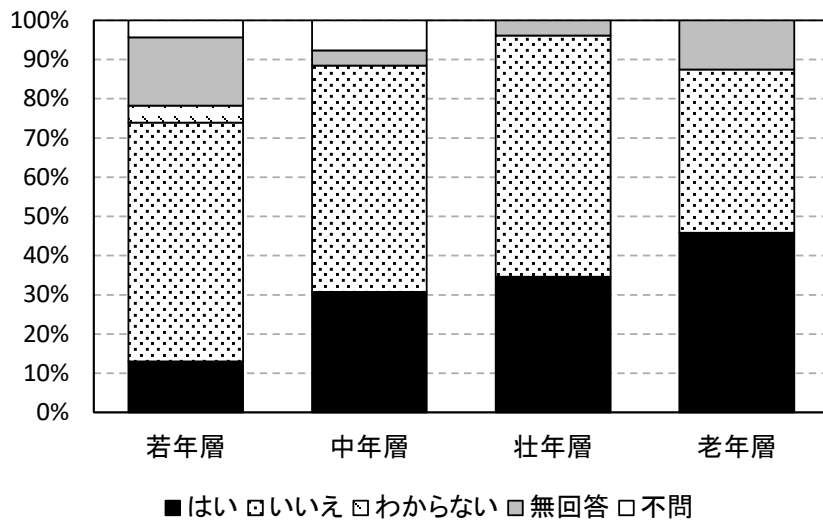


図 5-25 シャル敬語は女性言葉かどうか (世代別集計)

ており（図 5-25）、老年層世代では未だ「シャル敬語は女性語である」とのイメージをもつ話者が多く、若い世代になるにつれて性差のある言葉であるとの認識は薄まるようである。

「全く男性が言わないわけではないが、女性の方が圧倒的に多い」〈izk64〉や「性別に関わらず使われるが、女性の方がよく使うかもしれない。女性はシャー、男性はサー」〈ktk80〉のように、頻度の観点から「女性言葉である」と回答した例もみられる。男性が用いることを認めていることから、現状としてシャル敬語は「女性語である」との認識は当てはまらず、男性女性の両方に用いられ、相対的に女性が多く使用している表現であるとみなすことができよう。

続いて、シャル敬語の敬意度について考察する。

シャル敬語は「敬意は最高」（九州方言学会 1991）とされるナサル敬語に比べ、サ行音の口蓋化が生じた訛形であるためか、軽い敬意を表す敬語であるとされる。命令形の「ンシャイ」はやわらかな命令や勧奨表現となり、優しい印象を与えるため、シャル敬語を平叙文で用いずとも命令形の形であれば用いるという地域は多い。今回の調査では「シャル敬語はとても丁寧な表現だと思うか」と問うことで、尊敬語として敬意が高いものかそうでないのかという話者の認識を確認した。

結果として、佐賀県下におけるシャル敬語の丁寧さが比較的高い割合を示した（図 5-27）。図 5-23 で示したように、佐賀県下はサ形によるシャル敬語の運用が盛んであるため敬語として丁寧であるという意識が高いものと推察される。

調査時に得たこの問に対する話者の内省をみると、佐賀県下の地点では「ンサルもンシャルも目上に対して使う。ンサルはンシャルより丁寧」〈urs25〉や「オラシタよりオンシャッタ・オンサッタの方が丁寧」〈ktk42〉のように、シャル敬語のサ形とシャ形の違いを認識している地点が確認された。

また、さほど丁寧ではないという意見として、「語調は和らぐが、尊敬語のような意味はない。」〈kyn78〉や「漁師言葉である」〈tkk29〉といった内省も得られた。シャル敬語が使われる土地や職業の印象が言葉の丁寧さを左右している例もあるようである。「親しみ」や「柔らかみ」があるといった先行研究にみられる意見も多く、「敬意の対象によって敬意度が変わる」〈urs39〉とした、シャル敬語が誰に対して行われるかによってその丁寧さも変化するという内省も得られた。

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉			NR	3	3		NR	
2	黒崎		4		2	4		3	
3	木屋瀬		4		1	3		3	
4	飯塚		4		3			3	
5	内野			2	4		2	2	
6	山家		2		2		2		3
7	原田		2		4		1	1	
8	田代			2		2	2		2
9	轟木				4			NR	1
10	中原		2		3		1	NR	
11	神崎				1	1			
12	境原		4		2		1	2	
13	佐賀		4		4		4	2	
14	牛津	4			1	1	3	1	
15	小田			2		2			1
16	北方	4			1		2		2
17	塚崎			3	2	2			3
18	嬉野		2		2	4		3	
19	彼杵			3	3		3	4	2
20	松原				3			3	1
21	大村			NR	NR		NR		1
22	永昌		4			2	2	2	
23	矢上	NR			NR			2	
24	日見		2		2		2	NR	
25	長崎			NR	NR		1	NR	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

1	はい
2	どちらかといえばはい
3	どちらかといえばいいえ
4	いいえ
NR	無回答

図 5-26 シャル敬語はとても丁寧な言葉かどうか

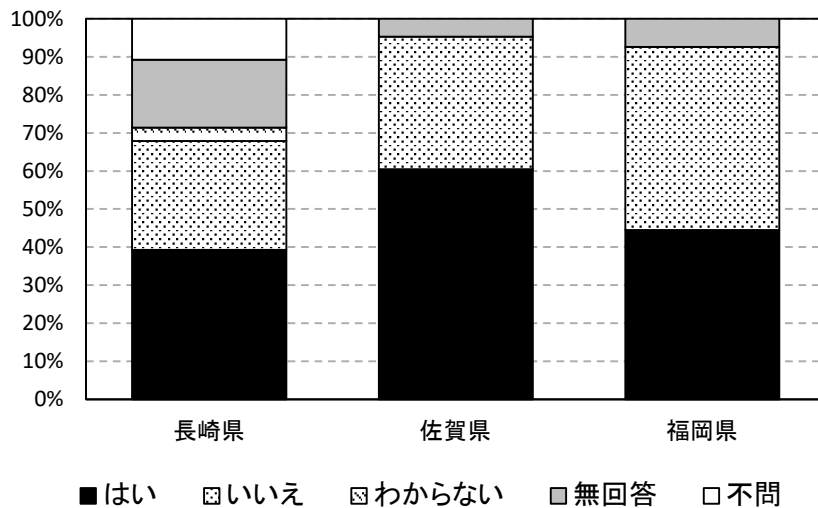


図 5-27 シャル敬語はとても丁寧な言葉かどうか (県別集計)

5.6 談話資料にみるシャル敬語

前項では、九州北部地方において広くシャル敬語またそれに類する敬語が行われている現状を確認した。元来、シャル敬語はナサル敬語由来の尊敬語とされることから、動詞の連用形に接続し、動作主を上向きに待遇する尊敬語的用法を持つとされる。以下に尊敬語的用法としてのシャル敬語の例を示す。

- (4) [昭和天皇ワ]イクツデ ナクナンシャッタト ヤローカネー。
[昭和天皇は]いくつで 亡くなられたの だらうかねー。
- 話し手 : 70代女性 a【飯塚出身】
 - 敬意の対象：昭和天皇
 - 聞き手 : 友人である70代女性 b

用例(4)は当然ながら話し手である70代女性 a が昭和天皇と面識があるわけではないが、敬意の対象である〈話題の人物〉であり、明らかに目上の人を待遇する表現としてシャル敬語が用いられている^{vi}。

しかしながら、筆者がこれまでに収集した談話資料を整理すると、シャル敬語の運用が単なる尊敬語的用法ばかりではないことが明らかとなった。まず、冒頭に示した談話資料に基づくシャル敬語の用例について再掲する。

- (1) アソコノ オクサン、クルマ ノリヨンシャレンメーガ。
あそこの奥さん、(日頃から)車 [に] 乗ってないでしょ。
- 話し手 : 50代女性【飯塚出身】
 - 敬意の対象：近所の70代女性
 - 聞き手 : 話し手の娘である筆者
- (2) コンド ウチニ キンシャートチテ。
今度家にこられるんだって。
- 話し手 : 60代男性【宮若出身】
 - 敬意の対象：職場の50代男性
 - 聞き手 : 妻である50代女性

(3) アソコニ タットンシャーヒトニ キーテミンシャイ。

あそこに立っている人に聞いてみなさい。

- 話し手 : 70代女性【飯塚出身】
- 敬意の対象: 初見の20代女性
- 聞き手 : 筆者

用例(1)～(3)は筆者が福岡県飯塚市において収集した自然談話の中で確認されたシャル敬語の用例である。各用例について、飯塚市出身で会話の場面に立ち会った筆者の内省に基づき、使用されたシャル敬語の意味を整理すると次のようになる。

用例(1)は話し手である50代女性(筆者の母、飯塚市の生え抜き)が、日頃から付き合いのある近所の70代女性を〈話題の人物〉として、日常的に自動車を運転していないことを言いさしたものである(聞き手は話し手の娘である筆者)。この場合のシャル敬語は尊敬の念を表すというよりも、普段付き合いのある間柄での年上に対する丁寧さを持たせた程度であり、尊敬語的用法とは言えない。

用例(2)は福岡県宮若市出身の60代男性(筆者の父)の発言で、話し手である60代男性が、職場の同僚にあたる50代男性を〈話題の人物〉として、その同僚の男性が今度話し手宅を訪問することを、妻である50代女性(= (1)の話し手)に伝える場面での用例である。わざわざ自宅に足を運んでもらうことに対し恐縮する気持ちが伴っているものの、〈話題の人物〉である50代の男性は話し手の部下にあたる人物であることから、上下関係としては話し手が上の立場となる。職場の同僚として丁寧にもてなすという意味での丁寧さは伴っているが、尊敬語として行われているとは言い難い。

用例(3)は飯塚市生え抜きの70代女性が店の前を通りがかった初見の女性を指して発した例である。聞き手は調査で挨拶をした程度の知り合い(筆者)である。

〈話題の人物〉として「タットンシャー」は初見の20代女性を指し、「キーテミンシャイ」は聞き手(筆者)への指示を意味する。これら2つのシャル敬語はいずれも自分よりずっと若く、知り合いではない人物を相手に行われており、動作主に敬意を表すような尊敬語的用法には当てはまらない。さらに話し手と話題の人物、または聞き手との間には、用例(1)・(2)で見られたような親しみを抱くような関係性もない。しかしながら、この短い発話の中に登場する2人の人物それぞれの動作にシャル敬語を伴わせているのである。

もう少しシャル敬語の用例を挙げてみよう。

(5) [突如因縁をつけてきた見知らぬ老人に話し手が反論した後の様子について]
タジタジシナガラネ、モーヒラアヤマリモシシヤレンヤッタトヨ。

たじたじしながらね、もう平謝りもなさらなかったのよ。

- 話し手 : 70代女性【飯塚出身】
- 敬意の対象：見知らぬ老年男性
- 聞き手 : 筆者

(6) [飼い猫が来客にすり寄る様子を見て]

アー、ネコガ オボエチョンシャーネー。

あー、猫が (あなたのことを) 覚えてるね。

- 話し手 : 60代男性【宮若出身】
- 敬意の対象：発話者自身の飼い猫
- 聞き手 : 筆者

(7) [市役所窓口に来た地元のお婆さんがやや濡れていたのを見て]

アラー、アメガ フリヨンシャッタトデスカ。

あらー、雨が 降っていたのですか。

- 話し手 : 20代男性【飯塚出身】
- 敬意の対象：雨？
- 聞き手 : 市役所窓口に来た地元のおばあさん

用例(5)は飯塚市出身の70代女性が〈話題の人物〉である見知らぬ老年男性が謝らずに立ち去った様子を聞き手(筆者)に伝える場面である。話し手である70代女性は筆者が幼少期に通っていた保育園の先生で、親しい間柄である。シャル敬語の対象としては話題の人物である「突如因縁をつけてきた見知らぬ老人」であり、不愉快な思いをしたことを伝えようとしているにも関わらず、シャル敬語が用いられている。

用例(6)は話し手である60代男性が飼っている猫が、久しぶりに帰省してきた聞き手(筆者)のことを覚えており、すり寄る様子を見て発せられた用例である。当然、動詞「覚える」の動作主である「猫」に対して尊敬語としてシャル敬語が行われたとは考えにくい。筆者のことを記憶しているという飼い猫に対する親愛の気持ちを表しつつ、「猫」が記憶している状況を聞き手(筆者)と共有することを意図したような使われ方をしている。このような動物を対象に方言敬語が行われる例は岸江(1998)、辻(2009)などでも検討されており、続く第6章において調査結果に基づき、現状を検討したい。

加えて、用例(7)は難解な用例である。この例は、市役所に勤務する飯塚市出身

の20代男性が過去の例に市役所窓口に来た地元のおばあさんに対して話しかけた時のことを振り返って述べた用例である。シャル敬語は「フ里昂ンシャッタトデスク」の形で行われており、シャル敬語が接続している動詞は「降る（降りよる）」である。通常、シャル敬語のような尊敬の助動詞は動詞に接続し、その動作を行う動作主を丁重に遇する（敬意を表現する）意味を持つ。しかしながら、(7)の例をみると、動詞「降る」の動作主は「雨」である。太陽や月といった天体、雨・風・雷といった気象現象などを対象とした自然崇拜が背景にあるならば、「雨」に対する敬意を表現した例としてみることは可能だが、当該の20代男性がそのような意図で発話したわけではないことは確認されている。

このように従来考えられてきたシャル敬語の枠組みから外れたような用例が自然談話資料の中から確認されている。シャル敬語だけでなく、日本語において行われる尊敬語の敬語表現は対象を持ち上げることで敬意を表すが、持ち上げるだけでなく、改め、遠ざける（日本語記述文法研究会編 2009）ことによって、一定の心的距離を保ち、配慮を示すことになる。出来事に対する心的距離を、シャル敬語を行うことでそれを示し、客観的事実として描写することに繋がっているのかもしれない。

5.7 シャル敬語の運用と敬語意識まとめ

以上、グロットグラム調査の結果にもとづき、九州北部地方におけるシャル敬語の地域差と世代差について概観し、先行研究における記述との比較をおこなった。

長崎街道沿いの25地点において4世代の世代調査をおこなったことにより、現在当該地域でおこなわれるシャル敬語の地域差と世代差の実態に迫ることができた。

シャル敬語が分布する地域ではその使用の有無に世代差は確認されず、先行研究で指摘されるように盛んにおこなわれる日常的な表現として分布している様子が明らかになった。具体的には、北は木屋瀬（北九州市八幡西区）から嬉野（嬉野市）、永昌（諫早市）に至る地域において、その使用の実態が確認された。また、収集された自然談話において確認されたシャル敬語の多様な用いられ方が確認され、シャル敬語の丁寧さに関する地域差が示唆された。過去に研究方法やその成果に対する検証が行われているものの、グロットグラム調査の性質上、各世代1名ずつという点で、敬語の運用や敬語意識について個人差の影響を排除することはできていない。今後は特定の地域を深掘りするような記述的な視点での追調査を検討していく必要があるだろう。

ⁱ 志津田（1971b）の記述の多くは次の文献の内容について論述するものである。Otto Jespersen, “Mankind, Nation and Individual from a Linguistic point of view” 1925, 新村出訳『人類と言語』p. 51-53

ⁱⁱ 事実、長崎県では「長崎県立高等学校の通学区域に関する規則」（昭和 31 年 1 月 17 日長崎県教育委員会規則第 1 号）第 3 条において、「（1）全日制の課程以外の課程」や「（2）全日制の課程における普通科以外の学科」、「（3）全日制の課程における普通科のうち五島高等学校スポーツコース、波佐見高等学校陶芸デザインコース、行き高等学校東アジア歴史・中国語コース及び対馬高等学校国際文化交流コース」については県全域から志望することが出来るとしている。

ⁱⁱⁱ これまでに談話資料などから収集してきたシャル敬語の用例に基づき問題を作成した質問群であるが、振り返ると設問の内容が特定の回答を期待しているような恣意的な構成であることが否めない。この点については、今後の研究課題として検討、対応していきたい。

^{iv} 印象的であったのが、佐賀県から長崎県下の調査対象地域においては老年層から壮年層世代、若い地域では中年層世代の話者から旧藩区画の違いについて言及されることが多くあった点である。特に鍋島藩所属であった諫早の地域に対しては、大村藩所属であった地域の人々からは敵対視されている様子が窺えた。このため、これらの周辺地域においては自分の地域の言葉かどうかに関する認識が明確に主張された。

^v シャル敬語に対する認識に関する質問はほぼ全ての地点において実施したが、当然、シャル敬語を使用しない話者にも質問がなされているため、使用語彙としての話者の意識と、理解語彙としての話者の意識が反映されたデータであり、この点については今後厳密な区別をしたうえで調査・分析を試みる必要がある。

^{vi} 天皇を対象に行う敬語としては、厳密にはシャル敬語ではやや敬意が不足した、くだけた印象を与えさえる。

第6章

素材待遇形式の振る舞いにみる方言敬語運用の実態と動態

6.1 本章の目的

第5章では九州北部地方においてシャル敬語が行われている地域を概観し、その運用の在り方に従来の方言敬語とは異なる特徴がみられることを示唆した。そこで示したシャル敬語の用例のうち、会話の中に登場する話題の人物に対し敬意を表す、いわゆる素材待遇の場面において、従来考えられてきた敬語とは異なる用いられ方をしている点に着目し、第6章ではシャル敬語の振る舞いについて考察する。

なお、以下に示す図表の中には既出のものも含まれるが、論考の流れをスムーズにするために再掲することとした。図表番号は章内での通し番号とし、他章からの再掲であっても、新たに番号を付している。

九州地方の北部に位置する福岡県下では、県西部である筑前域を中心に広くシャル敬語がおこなわれている。重複となるが、シャル敬語とは、尊敬の助動詞ナサルに由来する尊敬の助動詞であり（藤原 1978）、動詞の連用形に接続しイキンシャル（行かれる）、キンシャル（来られる）などンシャルの形式で用いられるⁱ。

九州方言の方言敬語に関する記述では、最高の敬意をもつとされる方言敬語としてナサルがあり、その訛形であるシャル敬語は軽い敬意を表す機能や、「親しみ」をあらわす機能が大きいとされてきた（九州方言学会 1991・神部 1992・陣内 1997）。また、福岡県下におこなわれるシャル敬語に関して、男女の別に関わらずおこなわれる表現だが（岡野編 1987・陣内 1997）、女性語ⁱⁱとして盛んであると言われている（岡野 1988（p. 34-37）・九州方言学会 1991）。

このような特徴をもつとされるシャル敬語だが、筆者が福岡県飯塚市でこれまでに収集した用例からその使用場面の多様さがうかがわれた。前章でも示したその用例(5)～(7)を以下に再掲する（用例の下段に示す訳文は筆者による）。

(5) [突如因縁をつけてきた見知らぬ老人に話し手が反論した後の様子について]
タジタジシナガラネ、モーヒラアヤマリモシシヤレンヤッタトヨ。

たじたじしながらね、もう平謝りもなさらなかったのよ。

- 話し手 : 70代女性【飯塚出身】
- 敬意の対象：見知らぬ老年男性
- 聞き手 : 筆者

(6) [飼い猫が来客にすり寄る様子を見て]

アー、ネコガ オボエチョンシャーネー。

あー、猫が (あなたのことを) 覚えてるね。

- 話し手 : 60代男性【宮若出身】
- 敬意の対象：発話者自身の飼い猫
- 聞き手 : 筆者

(7) [市役所窓口に来た地元のお婆さんがやや濡れていたのを見て]

アラー、アメガ フリヨンシャッタトデスカ。

あらー、雨が 降っていたのですか。

- 話し手 : 20代男性【飯塚出身】
- 敬意の対象：雨？
- 聞き手 : 市役所窓口に来た地元のおばあさん

これらの用例は上述したシャル敬語の特徴とは少し異なった振る舞いをみせている。軽い敬意や親愛の気持ちを伴わない(5)をはじめ、親愛の気持ちを伴った場合には(6)のように動物を主語とした場合にも適用することができしており、さらには(7)にみられるように天候を主語とした場合にも用いられている。しかし、(7)の敬意の対象については話題となっている「雨」に対する敬語と見做すよりも、問いかけている相手(ここでは「地元のお婆さん」)に対する敬語と見ることもできそうであるⁱⁱⁱ。

このように、福岡県飯塚市では様々な局面で用いられるシャル敬語がどのような地域に用いられ、どのような振る舞いを見せているのか。その実態を解明するべく、長崎街道グロットグラム調査を実施した。本章では、この調査の結果から九州北部地域におけるシャル敬語の地理的・世代的分布の様相を明らかにする。さらに用例(6)(7)に挙げた「猫」「雨」に対するシャル敬語の使用について、その用法に違和感があるかどうか(受容度)に関する分布図を示した上でシャル敬語の位置づけについて検討する。

6.2 シャル敬語に関する先行研究

方言敬語に関する研究は数多く存在するが、本章で取り扱うシャル敬語の全国的な地理的分布を報告したものとして藤原（1978）が挙げられる。藤原（1978）の「方言敬語法の研究附図」第8図には「「～ンサル」類尊敬表現法分布概況図」が報告されており、福岡県の筑前全域、筑後域の北部、佐賀県および佐賀県と長崎県の県境域にその分布が報告されている。当該の図は第5章図5-21を参照されたい。

前章において、藤原（1978）では、この「ンシャル」について、「「ンサル」「ンシャル」ことばとなると、これは、筑前方面につながって、佐賀全県下が、そのいちじるしいものを示す。」(p. 399)と言及している。さらに、「「ンシャル」などは、また、筑後北寄りにも見られる。「～ンシャル」が、いくらかの「～ンサル」とともに、筑前によくおこなわれているのは注目をひく。(中略)「シャ」形の方が、筑前では、他地方以上によくおこなわれるありさまになっている」(p. 400)とあるように、シャル敬語が筑前地方において盛んにおこなわれる様子を指摘しており、九州北部地域におけるシャル敬語の分布を概観することができることを指摘した。そこでも述べたように、この藤原（1978）による分布概況図はあくまで概観するにとどまるものであり、その描画方法から分布の詳細を読み解くことは難しい。また、上村（1998）には「(3)「なさる」系の、(イ)行キンシャル…両筑・佐賀県・大分県一部。」(p. 58, 「ン」は原文ママ)との記述があり、福岡県と佐賀県以外にも大分県の一部地域に分布することを指摘しているが、具体的な地域は詳述されていない。

このほか、前章において、九州方言学会（1991）には九州各県におこなわれる敬語表現についてまとめられており、ナサル系の敬語としてシャル敬語への言及を確認することができることについても述べた。そこでも、一部では動詞未然形に接続する「せらるる・させらるる」に由来する（藤原 1955）サッシャル敬語との別が判断できない記述が確認される（実際の記述は第5章5.5.1.2 シャル敬語に関する先行研究を参照されたい）。

このように、先行研究からシャル敬語の使用域を詳細に見ようとするのには限界がある。無論、ここに取り挙げた先行研究の記述の中には、方言敬語の体系の位置づけの中でサッシャル敬語とシャル敬語とを記述し分ける必要がないとしてまとめて記述されたものもあるだろう。

本章6.1において(5)～(7)に示した福岡県飯塚市の例のように、シャル敬語は従来考えられてきた運用方法（軽い敬意を表す、親しみを表す）の枠組みに囚われない振る舞いをみせていることから、当該地域における方言敬語の運用面に何かしらの変化が起きているといえよう。ここに取り挙げるのはシャル敬語という一語形に過ぎないが、辻（2009）に詳しい京都市方言のハル敬語の枠組みでは不特

定の人や「極めて疎」の人物に対してハルが用いられることが指摘される (p. 93) など、方言敬語が絶対敬語的な従来の敬語運用とは異なった振る舞いをみせている事例は既に指摘されているところである。しかし、九州北部地域における敬語運用の変化に関する報告は未だ少なく、シャル敬語に着目してその地理的世代的分布および運用の実態を明らかにすることは、当該地域における方言敬語運用の事例の提示にも繋がるものと意義付ける。

6.3 グロットグラム調査の概要

第 2 章において述べた通り、グロットグラム調査はある地域間で直線状に地点を配し、各地点で世代調査を行うことによって地理的、世代的観点から言葉の動態を探る調査方法である。新潟県糸魚川市における糸魚川調査 (W・A・グロータース 1976) に始まり、徳川 (1993 : pp. 313-376)、井上 (1991, 2010) などに代表される数多くの研究成果が存在する。

グロットグラム調査法を採用したことで、九州北部地方におけるシャル敬語の地理的な広がりや敬語使用の世代差を広く把握することが可能となった。また、長崎街道は江戸時代に整備された道であるが、今なお国道として当該地域の人々の交流を支えている背景から、長崎街道沿いでの言葉の関係性を捉えることを目指した。

以下、6.3.1 よりグロットグラム調査の概要を示す^{iv}。調査は全て筆者 1 名によるものである。

6.3.1 グロットグラム調査

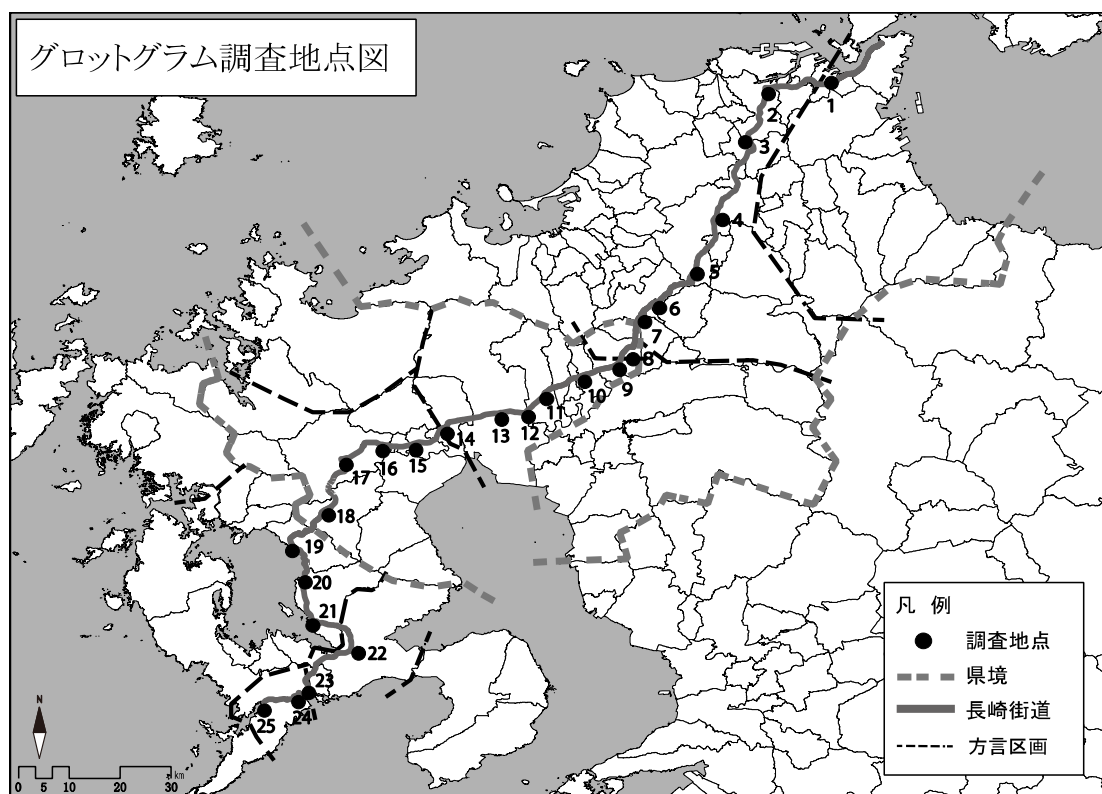
グロットグラム調査の概要については第 2 章で述べたため、ここには簡潔にその要点をまとめる。

- ①調査期間 : 2015 年 8 月 4 日ー同年 10 月 28 日
- ②調査形式 : 面接調査 (必ずしも一対一ではない)
- ③調査項目 : 語彙・文法項目 92 問, 敬語表現に関する項目 20 問
- ④調査対象地域 : 旧街道 (長崎街道) 沿いにある旧宿場町 25 地点

※再掲となるが調査地点については図 6-1 を参照されたい。

⑤話者 :

若年層（15歳-20代）、中年層（30-40代）、壮年層（50-60代）、老年層（70代以上）の四世代生え抜きの男性を対象とし、結果として計99名の話者から協力を得た。各世代の内訳は若年層23名、中年層26名、壮年層26名、老年層24名である。話者にはそれぞれ「地点名+年齢」から成る話者IDをあてがい、内省を引用する。各地点の年齢の分布と共に図6-2に示す。



- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1:小倉(福岡県北九州市小倉北区) | 14:牛津(佐賀県小城市) |
| 2:黒崎(福岡県北九州市八幡西区) | 15:小田(佐賀県杵島郡江北町) |
| 3:木屋瀬(福岡県北九州市八幡西区) | 16:北方(佐賀県武雄市) |
| 4:飯塚(福岡県飯塚市) | 17:塚崎(佐賀県武雄市) |
| 5:内野(福岡県飯塚市) | 18:嬉野(佐賀県嬉野市) |
| 6:山家(福岡県筑紫野市) | 19:彼杵(長崎県東彼杵郡東彼杵町) |
| 7:原田(福岡県筑紫野市) | 20:松原(長崎県大村市) |
| 8:田代(佐賀県鳥栖市) | 21:大村(長崎県大村市) |
| 9:轟木(佐賀県鳥栖市) | 22:永昌(長崎県諫早市) |
| 10:中原(佐賀県三養基郡みやき町) | 23:矢上(長崎県長崎市) |
| 11:神崎(佐賀県神埼市) | 24:日見(長崎県長崎市) |
| 12:境原(佐賀県神埼市) | 25:長崎(長崎県長崎市) |
| 13:佐賀(佐賀県佐賀市) | |

図6-1 長崎街道グロットグラム調査地点

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1 小倉			kkkr28					kkkr77
2 黒崎		krs20		kkrs41		krs57		krs71
3 木屋瀬		kyn26		kyn42		kyn59		kyn78
4 飯塚		izk25		izk42			izk64	izk78
5 内野			ucn29	ucn35			ucn65	ucn72
6 山家		yme23		yme38			yme65	
7 原田		hrd22		hrd40		hrd61		hrd77
8 田代		tsr26			tsr47		tsr63	tsr80
9 轟木				tdr49			tdr67	tdr77
10 中原		nkb25		nkb37		nkb60		nkb75
11 神崎				knz48	knz52			
12 境原		skb24		skb39			skb64	skb76
13 佐賀		sag20		sag36			sag65	sag72
14 牛津		usd17a usd17b		usd36		usd49		usd66
15 小田			oda24		oda47		oda57	oda81
16 北方	ktk16			ktk42		ktk60		ktk80
17 塚崎		tkr29		tkr40		tkr50		tkr85
18 嬉野		urs25		urs39		urs56		urs76
19 彼杵		sng28	sng31			sng62	sng66a sng66b	sng84
20 松原			mtb35				mtb68	mtb71
21 大村		omr28	omr31			omr60		omr78
22 永昌		eis17			eis47		eis64	eis75
23 矢上	ygm14			ygm40			ygm71a ygm71b	
24 日見		him24		him37			him67	
25 長崎		ngs28		ngs44		ngs63		ngs75
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

図 6-2 話者の年齢および話者 ID 一覧

6.3.2 シャル敬語に関する調査項目

本章で扱う調査項目は次の通りである^{vi}。問 1 は選択肢形式としたが、回答の理由やその土地で聞かれる事象について可能な限り尋ね、各々内省報告を記録した(内省調査)。さらに問 1 で「(1)よく使う」と回答された地点を中心にどのような形式(シャル形・サル形)で使用するかを確認し、その内省の結果を図 6-4 にまとめた。内省調査は口頭による確認であったため、各話者の調査時間の制約などにより、内省を十分に得られなかった地域が多数ある。

問 1:「先生が言いよンシャル」「同級生の〇〇さんが歩きよンシャー」といった言葉を使いますか。

- (1) よく使う
- (2) この土地で使われているのを聞いたことはあるが自分は使わない
- (3) 聞いたこともない
- (4) わからない

問 3: 友人に「先生はいないよ」という場合、「いないよ」の部分はどう言いますか。また、このとき訪ねてきたのが違うクラスの先生だった場合はどう言いますか。

問4：あなたは久しぶりに親友の家にお邪魔しました。すると親友宅で飼われているペットの猫があなたの足にすり寄ってきました。その様子を見た親友が「猫が（あなたのことを）覚えとんしゃーね。」と言いました。この「猫が覚えとんしゃーね」という友人の表現に違和感を覚えますか？

- (1) とても違和感がある (2) やや違和感がある (3) 違和感はあまりない
(4) 違和感は全くない (5) わからない (6) その他

問5：あなたが自分の家に訪ねて来た父親の職場の上司に対して、丁寧に「雨は降っていましたか？」と尋ねるときどのように言いますか。この時、「雨は降りよんしゃったですか？」という言い方をすることに違和感がありますか？

- (1) 違和感がある (2) 違和感はない (3) わからない (4) その他

なお、調査方法の前提として、使用するかどうかに関する問では使用語形が「ンシャル」の形をとるかどうか（つまり、話者がサッシェル敬語と混同していないかどうか）を確認した上で回答を得た。2節に示した引用(5)からもわかるように、今回の調査対象地域の中には先行研究でサッシェル敬語が用いられる地域であると指摘される地点(8:田代)が含まれているため、調査の目的とするシャル敬語とサッシェル敬語について話者が混同した状態で回答することがないように細心の注意を払った。

6.4 調査結果および考察



6.4.1 シャル敬語の地域差および世代差

まず、シャル敬語を使用するかどうかを問うた結果（問1）、シャル敬語が用いられる範囲として北は小倉の50代、南は矢上の70代であることが確認された（図6-3、記号：■参照）^{vii}。ただし、図6-4に示す矢上70代話者の内省を考慮すると現在も使用が確認される地域は永昌が南端ということになる^{viii}。

ここで注目されるのは、福岡県の筑前域から佐賀県の嬉野に至るまでの分布については地理的連続性を認められるものの、永昌のみ孤立して分布しており、嬉野から永昌に至る3地点（彼杵、松原、大村）にはシャル敬語がおこなわれていないという点である。これらの地域では「佐賀や諫早の言葉であり、自分は使わない」（sng62, sng66a, sng84, mtb68ほか）との内省が得られており、敬語形式についてもオラッサンなど（ラ）ス敬語や共通語形がみられるのみで（図6-4・図6-5）、

少なくとも彼杵から大村にかけての地区の言葉としてシャル敬語がおこなわれていないことが確認された。

シャル敬語の地域的連続性が嬉野で留まり永昌に孤立する状況は、旧国の区分と険しい地形が要因となっていると考えられる。長崎県諫早市に位置する永昌は、旧藩区分に従うと佐賀の鍋島藩に相当し、彼杵から大村にかけての地域を治めた大村藩とは旧国の区分が異なっていた歴史があり、彼杵から大村の話者にはこの区画の違いが強く認識されていた。また、地理的条件をみても、嬉野から彼杵を経て永昌に至る間には多良岳山地が広がっており、この山地が旧国の区画と一致していたことも一因となっていると考えられる。

さらに、シャル敬語を「使用する」と回答した地点を中心に、どういう形で使用されているのかについて内省を得た(図 6-4)。ここで注目されるのは佐賀県の境原から塚崎にかけての地域にはサル・サ(一/ッ)(図 6-4, 記号: 参照)が優勢の地域が存在していることである。藤原(1978)では佐賀県下全域におけるサル形とシャル形について全域に盛んであると記述されていたが、今回の調査の結果、サル形を使うという地域(境原・佐賀・牛津)と、サル形とシャル形を併用する地域が存在するという地域差が明らかとなった。シャル形とサル形を併用する地域(小田・北方・塚崎・嬉野, 図 6-4; 記号: および図 6-5・6-6 参照)では、シャル形よりもサル形の方が敬意は高い表現であるとみなしているようである(内省(8)(9))。

- (8) (設問の例を読んで)人によって違う。市長さんがキンサッタ/近所のおばあちゃんがキンシャッタになる。キンサッタの方が改まっていると思う。

〈urs39〉

- (9) ンサルはンシャルより丁寧。目上の人(親, 近所の人)に対して使う〈urs76〉

シャル敬語を使用するかしないかという使用面に関する分布について、図 6-3 に示す通り明らかな世代差を確認することができなかった。つまり、藤原(1978)や岡野編(1987)などによって1970年代後半から1980年代の記述で盛んにおこなわれていると指摘されているシャル敬語は、福岡県下の一部地域や佐賀県下では依然としてその勢力を維持しているということになる。

こうした以前からのシャル敬語の分布を維持しながらも、運用面では、福岡県下と佐賀県下に見られるシャル敬語の回答状況は大きく異なった(図 6-5・図 6-6)。図 6-5・6-6 に示すのは問3における回答である。問3では「(友人/先生に対して)先生は居ないよ」と言う時どのように言うか、第三者待遇場面における敬語の

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉				—	■		—	
2	黒崎		—		—	—		—	
3	木屋瀬		—		■	—		—	
4	飯塚		■		■		■	■	•
5	内野		—	■			■	■	
6	山家		■		■		■		
7	原田		■		■		■	■	■
8	田代		■		■		—		—
9	轟木				■			■	
10	中原		—		■		■	—	
11	神埼				■	■			
12	境原		■		■		■	■	
13	佐賀		—	■	■		■	—	
14	牛津	■	■		■		■	■	
15	小田		■		■		—		■
16	北方	■			■		■		■
17	塚崎		■		■				■
18	嬉野		■		■			■	
19	彼杵			—	—		—	—	—
20	松原							—	
21	大村			•			•	—	
22	永昌		—			■	■	■	
23	矢上	•			—			■	
24	日見		—		—		—	—	
25	長崎			N		•		—	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

- よく使う
- 聞いたこともない
- 聞いたことはあるが自分は使わない
- N 無回答

図 6-3 シャル敬語を使用する地域と世代

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉			♯	—	■		—	
2	黒崎		N		N	N		N	
3	木屋瀬		—		■	N		—	
4	飯塚		■		■		■	■	
5	内野		—	—			■	■	
6	山家		■		N		N		■
7	原田		■		■		N	N	
8	田代		■		■		—		—
9	轟木				■		N	N	
10	中原		N		N		N	■	
11	神埼				N	■		■	
12	境原		N		□		■	N	
13	佐賀		N		□		□	—	
14	牛津		□		□		□	□	
15	小田		□		N		—		□
16	北方	N			N		□		□
17	塚崎		□		□		□		□
18	嬉野		■		■	N		■	
19	彼杵			—	—		—	—	—
20	松原							—	
21	大村			N			♯	—	
22	永昌		N			■	■	■	
23	矢上	N			—			—	
24	日見		N		N		N	—	
25	長崎			N				—	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

- 使う（シャル形）
- 使う（サル形）
- ◻ 使う（サル形・シャル形併用）
- 昔は使っていたが今は使わない
- 聞いたことはあるが使わない
- ♯ 聞いたこともない
- N 無回答

図 6-4 シャル敬語の使用に関する話者内省

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉				○	○		○	
2	黒崎		○		○	○		h	
3	木屋瀬		○		○	○		○	
4	飯塚		○		■		■	○	
5	内野			○			○	○	
6	山家		○		○		○		○
7	原田		○		○		○	○	
8	田代		∞		○		∞	h	○
9	森木				○		∞	h	
10	中原		○		○		○	○	
11	神埼				■	○		○	
12	境原		○		○		■	○	
13	佐賀		○		○		○	○	
14	牛津	○	○		○		○	○	
15	小田		■		■	○	○	○	○
16	北方	○			○		○	○	○
17	塚崎		○		○		○		○
18	嬉野		■		○			○	
19	彼杵			○	○		○	○	○
20	松原			○			○	○	○
21	大村			○			○	○	○
22	永昌		○		○		○	○	○
23	矢上	○			○		○	○	○
24	日見		○		○		○	○	○
25	長崎			○	○		○	○	○
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

- オンシャラン類 □ オンサラン類 ∞ オラッサランヨ h イナイ類 ∩ オンナレン類 ∞ オツチャナカ
- オンシャレン ● オンサレン ♪ オラッサン ○ オラン類 } オイナンナカ ∞ オツテナカ
- オンシャナカ ■ オンサナカ ∩ オランバイ ∩ オイナカ類 △ オイヤラン類 N 無回答

図 6-5 友人に対して「先生は居ないよ」と返答する場面の「居ないよ」

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉		■		h			h	
2	黒崎		■		h			■	
3	木屋瀬		N		○		■	○	
4	飯塚		■		○		■	○	
5	内野		h		○		h	h	
6	山家		h		■		h	○	∞
7	原田		h		h		h	○	
8	田代		■		h		∞	○	
9	森木		h		h		∞	h	
10	中原		h		h		h	h	
11	神埼		h		h		h	h	
12	境原		h		h		h	h	
13	佐賀		N		h		h	h	
14	牛津	h	h		h		h	h	
15	小田		h		h		h	h	○
16	北方	h	h		h		h	h	○
17	塚崎		h		h		h	h	h
18	嬉野		h		h		h	h	h
19	彼杵		h		h		h	h	h
20	松原		h		h		h	h	h
21	大村		h		h		h	h	h
22	永昌		h		h		h	h	h
23	矢上	h	h		h		h	h	h
24	日見		h		h		h	h	h
25	長崎		N		h		h	h	h
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

- オンシャラndeス □ オンサラン類 ♪ オラッサンデス類 h イマセン ∩ オイナカ類
- オンシャレン (デス) ● オンサレン h イラッサイマセン } オイナンナカ ○ オラン類
- オンシャナカデス ■ オンサナカデス ∩ オラレマセン類 ◆ オツチャナイデス ▲ オイヤランデス
- オリンシャナイ類 ∞ オラッサランヨ ○ オリマセン類 ∞ オツテナカ (デス) N 無回答

図 6-6 先生に対して「先生は居ないよ」と返答する場面の「居ないよ」

使用について問うた。図 6-3 で広くシャル敬語を用いるとした福岡県下および田代-佐賀間では、先生に対する場面であればシャル敬語や共通語形による敬語を用いるが、友人に対する場面では若年層を中心に広く非敬体のオランが用いられており、友人に対する場面ではシャル敬語が用いられたのは飯塚・神埼・境原・佐賀の話者 5 名のみであった。一方、同じくシャル敬語を盛んに用いるとした佐賀県下でも、牛津から嬉野にかけての地域では聞き手が友人であっても先生であっても、若年層から老年層にかけてシャル敬語の使用が確認される（図 6-5・図 6-6）。

これら第三者待遇場面におけるシャル敬語の運用には明らかな地域差が認められる。福岡県下および田代から佐賀にかけての地域では飯塚や神埼、境原など一部地域を除き聞き手（対者、ここでは友人か先生か）が誰であるかによって、敬語を使用するかどうか左右される傾向にある。その一方で、牛津から嬉野にかけての佐賀県西部の地域では、世代に関わらず聞き手が誰であろうと一貫してシャル敬語を用いる傾向にあり、旧来の、伝統的な敬語運用がなされていることが明らかとなった。

また、シャル敬語に限らず見れば、こうした伝統的な敬語運用の傾向は長崎県の彼杵から永昌の中年層以上にかけても窺うことができる。これらの地域では、対友人場面において 30 代以上の話者のほとんどがオラッサンを用いており、対先生場面でもオラッサンデスやオラレマセン、共通語形（イラッシュイマセン）の敬語を使用している。これに対して、彼杵から永昌の若年層および矢上から長崎にかけての対友人場面では主として非敬体のオランが用いられ、対先生場面ではイマセン、オリマセンといった丁寧語形が多い。

仮説の域を出ないものの、敬語運用にこうした地域差が生じる一つの要因として都市部との距離、ひいては文化圏を共有しているかどうかに関わっているのではないかと考える。今回の調査地点には含まれないが、第三者待遇の対者敬語化の傾向がみられた福岡県下の地点ならびに佐賀県の田代-佐賀間は、公共交通機関を用いても 1 時間圏内の地域であり、福岡市と生活圏を共有する地域である。『九方基』にみられた記述(4)「近時、(ナサル)の訛形、ンシャルが福岡市とその周辺に女性語として盛んである。」(九州方言学会 1991, ()の記述は筆者による挿入)からも推察されるように、福岡市は北部九州におけるシャル敬語の中心的な地域であり、その周辺では敬語形式のみならず、敬語運用の在り方についても共有されているのではなかろうか。

ただし、この点については今回のグロットグラム調査では検証できない範囲の問題であり、あくまでも一つの仮説としてその可能性の言及に留める。

6.4.2 シャル敬語の振る舞いとその受容度

ここで本章の冒頭で示した福岡県飯塚市におけるシャル敬語の用例について考えてみたい。先述した通り、用例(5)～(7)にみられるシャル敬語の振る舞いは、従来記述されてきたシャル敬語の性質とは異なる一面をみせている。しかしこれはあくまでも筆者が現地で偶然遭遇した事例であり、一般化できる事象であるという確証は得られていない。そこで、グロットグラム調査で上記用例と同様の場面を設定し、これらの場面におけるシャル敬語の使用に違和感があるかどうかの聞き取り調査を実施した。なお、シャル敬語をその対象に使用することについて不自然さを感じる(使い方が間違っている/おかしいと感じる)場合、その用法は「受容されていない」と表現する。つまり、話者にとってその用法がどれだけ許容できる使い方なのかを「受容」という言葉を用いて表現する。また、その違和感の程度を表す表現として「受容度」という言葉を用いる。質問文は前節において既出であり(問4・問5)、その結果を図6-7および図6-8に示す。

用例(6)に示したものと同様の「猫が(あなたのことを)覚えとんしゃーね」という表現について、比較的多くの話者が理解を示した(図6-7)。シャル敬語を用いるとする福岡県および佐賀県に注目してみると、福岡県では若年層から老年層にかけて広く猫に対してシャル敬語を使用することを受容する様子が確認されるのに対し、佐賀県では中年層以上にその分布が偏っている。福岡県に比べて佐賀県の若年層ではシャル敬語を猫に対して使用することへの受容度が低い様子が見えてくる。

この状況は旧来の敬語運用をとる様子が確認された図6-5・図6-6の結果と矛盾しない。つまり、佐賀県下の若年層にはシャル敬語は狭義の「尊敬語」としての認識がなされているため、一般に敬語の対象とならない猫に対してシャル敬語を用いるのは不自然であると結論付けられたのである。

他方、この用法を受容した福岡県や佐賀県の中・老年層話者から最も多く挙げられたのが「猫をペットとして可愛がっているなら(言える)」という理由である。質問文内で「友人宅で飼われているペットの猫」と指定しているためか、飼われている猫を家族の一員のように認識してシャル敬語を用いたとする意見が地域に偏ることなく多くみられた。先行研究に指摘されるような「親しみを表す」(陣内1997)機能はこうした理由に拠るものであり、図6-7に示す結果から福岡県下や佐賀県の中・老年層ではシャル敬語の親愛語的用法が受け入れられていると言えるだろう。

今回の調査で全世代的に親愛語的用法が可能であるとの認識を示す福岡県に対し、佐賀県下では若年層と中・老年層話者の間に差がみられたが、佐賀県下に生じたこの世代差の背景には敬語運用に関する規範意識の違いが存在するのであろう。

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉				■	■		■	
2	黒崎		□		□	■		■	
3	木屋瀬		■		■	○		■	
4	飯塚		■		○		□	□	
5	内野			○			○	○	
6	山家		○		○		□		■
7	原田		■		○		■	■	
8	田代				○				□
9	轟木		○		■		○	■	
10	中原		□		□		○	■	
11	神埼			□		□		■	
12	境原		○		○		■	■	
13	佐賀		□		□		□	■	
14	牛津		□		□		□	□	
15	小田		■		■		■		□
16	北方	■			○		□		■
17	塚崎				■	■			□
18	嬉野		□		□			■	
19	彼杵			■	□		□	○	○
20	松原			■			○	○	
21	大村		■	■			○	■	
22	永昌		■		■		■	■	
23	矢上	■			○			■	
24	日見		□		□		□		
25	長崎			N	■		○	N	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

○ とても違和感がある ■ あまり違和感はない ・ わからない
□ やや違和感がある ■ 全く違和感はない N 無回答

図 6-7 「猫」に対するシャル敬語の使用（問 4）に関する受容度

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1	小倉				○	■		○	
2	黒崎		○		○	■		N	
3	木屋瀬		○		○	N		N	
4	飯塚		○		○		○	○	
5	内野		○		■		○	○	
6	山家		○		○		○	○	○
7	原田		■		○		■	○	
8	田代		○			N	N		N
9	轟木				N		N	○	
10	中原		■		○		○	○	
11	神埼				■	○		○	
12	境原		○		○		○	○	
13	佐賀		N		N		N	○	
14	牛津		○		○		○	○	
15	小田		○		○		○		○
16	北方	○			○		○		■
17	塚崎		○		○	○			■
18	嬉野		○		○			N	
19	彼杵			○			○	○	○
20	松原			○			N	○	
21	大村		○				○	○	
22	永昌		○		○		■	○	
23	矢上	○			○			■	
24	日見		○		○		○	○	
25	長崎		○		○		○	N	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代

○ 違和感がある ■ 違和感はない ・ わからない N 無回答

図 6-8 「雨」に対するシャル敬語の使用（問 5）に関する受容度

親愛語的用法が老年層から受け継がれていないのか、またはこれから習得していくものなのか。グロットグラム調査の結果だけでは結論付けることができない事象であり、この検証の機会を別稿に譲ることとしたい。

この他の可能性として念頭に置いていたのが、井上(1981)が指摘する「敬語体系全体の丁寧語化」であった。本章に取り挙げる一連のシャル敬語の用例も、目の前に親しみを持って比較的丁寧に話すべき相手がいる場面で確認されていることから、丁寧語化の現象の一事例のようにもみえる。

特に、わずかばかりの事例であるが用例(7)や図6-8の「雨」に対するシャル敬語の使用を受容する現象は、「親しみを表す」(陣内1997)機能や「親愛語」(岸江1998)としての枠組みから説明することは難しい。

しかしながら、図6-7と図6-8の結果を比較してみると、明らかに「雨」に対するシャル敬語は不自然であるとする認識が強い。「丁寧語化」が進行しているのであれば、主語が「猫」であろうと「雨」であろうとシャル敬語が用いられておかしくないはずであることから、現段階としてシャル敬語の丁寧語化を裏付けることはできない。

ただし、シャル敬語が軽い敬意や親愛語として盛んに用いられている現状があるということは、シャル敬語という敬語形式の待遇度の低下(敬意の逡減)、ひいては敬語運用における「丁寧語化」へとつながる可能性を示唆していると考えられる。今回の調査結果から、福岡県下や佐賀県下の中年層以上においてシャル敬語を用いた親愛語的用法が認められたが、親愛語的用法の進行と敬語運用の丁寧語化は異なる次元の現象でありながらも、シャル敬語の敬意が逡減した結果と見れば全く無関係の現象ではないだろう。丁寧語化の現象については今後の動向に注目すべき現象であるといえる。

6.5 本章の結論

以上、グロットグラム調査の結果にもとづき、九州北部地方におけるシャル敬語の地域差と世代差について概観し、先行研究における記述の検討をおこなった。グロットグラム調査を通じて、現代の当該地域におけるシャル敬語の地域差と世代差について明らかにすることができた。

シャル敬語が分布する地域内ではその使用の有無に関する世代差は確認されず、先行研究と同様、依然として使用状況が維持されていることが分かった。しかし、第三者待遇場面におけるシャル敬語の使用には明らかな地域差並びに世代差が認められた。福岡県下および田代から佐賀にかけての地域では聞き手(対者、ここでは友人か先生か)が誰であるかによって、敬語を使用するかどうか左右される傾向にある。一方で、牛津から嬉野にかけては世代に関わらず聞き手が誰であろうと

一貫してシャル敬語を用いる傾向にあり、旧来の、伝統的な敬語運用を維持していることが明らかとなった。長崎においても長崎を中心とした矢上から長崎にかけての地域と、彼杵から永昌にかけての地域との間には、福岡県・佐賀県と類似した敬語運用の地域差が窺われた。

また、筆者が福岡県飯塚市で集めた用例の内、主語が「猫」「雨」である場合のシャル敬語の使用に関する受容度についても調査結果を示した。「雨」に対するシャル敬語の使用によって、井上（1981）に指摘されるような「丁寧語化」の可能性が示唆されたが、現状として一般化されるものではなく、「猫」にシャル敬語を使用した「親愛語」としての用法が認められるにとどまった。ただし、現段階における仮説として今後「敬語体系全体の丁寧語化」（井上 1981）が敬語の運用の中で進行していく可能性も捨てきれず、図 6-7・図 6-8 に示すシャル敬語の事例はその現象の途上段階にあるものとして示す価値があるものである。

シャル敬語は木屋瀬（北九州市八幡西区）から嬉野（嬉野市）、永昌（諫早市）にその使用の実態が確認されており、今後は嬉野・鹿島から永昌に続く地域における地域的な連続性の検証をおこなう必要がある。更に仮説的であるものの福岡市とその周辺地域という関係性によって敬語運用の地域差が生じている可能性も窺われたため、今後は社会言語学的な検証を視野に取り組む必要があるだろう。

今回、シャル敬語を「よく使う」地域とシャル敬語がどのような形式で用いられるのかについて図 6-3・図 6-4 にまとめたが、調査対象地域で実際に使用される敬語形式はシャル敬語に限らないことから、図 6-5 から図 6-8 に示す結果ではシャル敬語の使用が少なく思える部分もある。これは設問の場面や各地域での敬語体系を構成する敬語形式のバリエーションの違いも関わっていると考えられる。この詳細は今後の調査に託されることとなる。今後は各地点におこなわれる他の方言敬語の表現との関係性についても注目したい。

ⁱ 地域によっては語末が長音化（ンチャー）または促音化（ンチャッ）した形をとる。

ⁱⁱ この場合の「女性語」とは、女性の方がよく用いる言葉という意味である。

ⁱⁱⁱ 用例（7）は誤用の可能性が捨てきれないが、このほか「病院に見舞いに来た患者家族に対して」「ソトワ アメガ フリヨンシャッタデスカ?」（飯塚 20 代女性）も確認されている。この問いかけを受けた飯塚市生え抜き 50 代女性は「あの子（＝発話者）は敬語の使い方がおかしい。」との指摘をしており、地元の人々の間でも適切かどうかの認識が分かれるようである。

^{iv} グロットグラム図の作成にあたっては、国立国語研究所による言語地図作成用プログラム（プラグイン）を利用した。凡例の記号は清水勇吉氏（神戸大学バリュースクール）が作成した記号用特殊フォント「紋字朗君」を利用した。

<http://chizunohikidashi.jimdo.com/>

^v 話者は5年以内の外住歴は不問とし、各自治体の教育委員会や公民館に紹介を依頼した。原則として、各地点4世代1名ずつ計4名を目標に調整を試みたが、地点によっては人数が少ない箇所がある（轟木3名、神埼2名、日見3名）。また、1地点4名を達成しているものの、世代の偏りがある地域もある。このほか今回ご協力頂いた話者のうち矢上の若年層話者（ygm14）は若年層の年齢（15歳-29歳）に満たなかったが、調査年度に15歳を迎える方であったため問題ないものとした。

^{vi} 問2はシャル敬語に対する意識を問う設問であり、第5章で取り扱ったため、ここでは分析対象としていない。

^{vii} 問1を問う段階では形式にシャル形とサル形のどちらを取るか（または併用するのか）については不問としており、いずれを使用する場合も「(1)よく使う」として図6-3に表示している。内省を得ることができた地点に限定されるが、シャル形をとるかサル形をとるかの形式の別に関しては図6-4にまとめた通りである。

^{viii} 今回の調査は話者を男性に限定した調査であることから、シャル敬語を使用する地域の範囲や運用方法に関する意識調査の結果には性差がある可能性があることをここに断っておく。「使わない」「聞いたことがあるが使わない」とされた地点についても、女性を対象に調査を行えば異なった結果がみられるかもしれない。この可能性については今後検証していく必要があるだろう。

第7章

方言敬語の分布の特異性

7.1 本章の目的

日本語における方言区画に関する研究は東条（1927）に始まり、語彙・文法・アクセント・音韻などの観点から様々な研究者による見直しと提案が重ねられてきた（楳垣 1964）。方言区画はその地域で行われる方言の差異や共通性から見出された境界地域を基準に、地理的に境界線が設けられたものである。言語体系以外にも音韻やアクセント、語彙、文法、敬語法など、方言に関する個別の事象を基準として区画を設けることも可能であり、日本語の方言区画と言っても様々な種類の方言区画案が提唱・議論されている。この展開については安部（2015）に詳しい。

また近年では、コンピュータ技術の発達と共に高度な計算が実現できるようになったことで、方言区画の算出方法や表現方法の幅が広がり、これに伴い計量的な方言区画の検証を試みた例も多い（井上 2001・岸江 2009・半沢 2017 など）。しかし、その多くは日本列島を視野に入れた広域な方言区画の提案である。一方、岸江（2009）ⁱのように、狭い地域、例えば県内を対象に計量的手法を適用した方言区画の提案は限られており、今後取り組まれていくべきものであるだろう。

そこで本章では、筆者が2015年に実施したグロットグラム調査（第2章2.1参照）の結果をもとに、統計的手法の一つである数量化Ⅲ類を用いて九州北部地域の方言区画の再考を試みる。九州地方は古くからの方言を残存させる地域であることから、これまでも総合的研究（九州方言学会 1969）をはじめ、数多くの研究成果が報告されてきた。しかしながら、九州地方の方言区画を見直さんとする試みは少ない。

方言調査法の一つであるグロットグラム調査は、その性質上、検証できる範囲は線上の地点に限られるが、今回調査対象となった長崎街道は江戸時代から現代にいたるまで重要な幹線として機能していることから、九州北部地方の人口交流を支えてきた。これらの地域に注目することにより、肥筑方言とされる地域の言葉を世代的特徴と地理的特徴の観点から広く概観することが可能である。長崎街道上に位置する各地点の方言が、方言区画上どのように分割されるのか、語彙・文法・敬語法それぞれの観点からこの検証を試みる。

7.2 グロットグラム調査と方言区画

7.2.1 先行研究における九州北部地方の方言区画

東条(1954)は、日本の本土方言を語法や語形などの方言的特徴に基づき、次のように系統立てて区分している(図7-1)。この東条(1954)の方言区画論に従うと、調査対象地域の三県は九州方言に含まれ、調査地点の大部分は肥筑方言に属していることがわかる(図7-2)。

肥筑方言域には九州地方の人口の約半数が住んでおり、この地域で話される方言は最も九州方言らしい特徴をもつと言われている(上村1973・秋山1981)。主な

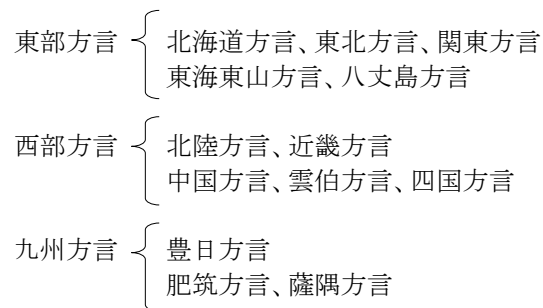


図7-1 日本の方言区画(東条操編1954, p.32)

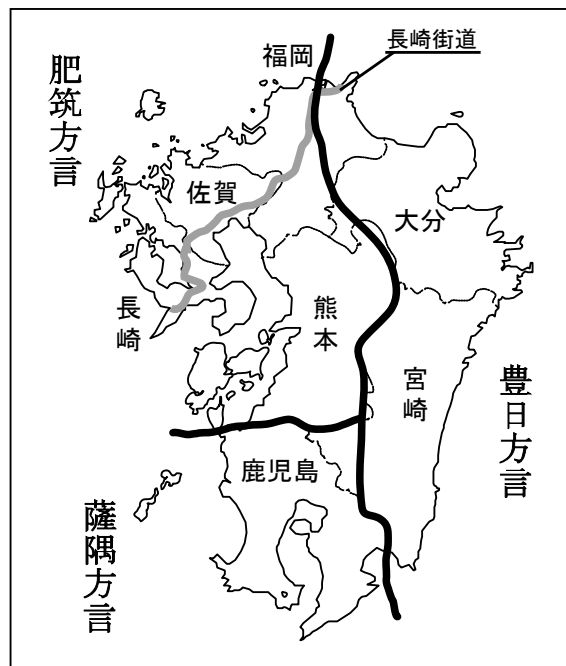


図7-2 九州方言区画と長崎街道(陣内1997より作図)

特徴として、文末詞バイ・タイ（もう来たバイ(もう来たよ), ちゃんと寝らんけんタイ(ちゃんと寝ないからよ)), 接続助詞バッテン(さっき食べたんバッテン(さっき食べたのだけど)) や、カ語尾形容語(天気がヨカ(=天気が良い), フトカ大根(=大きい大根)) などの使用を挙げることができる(東条編 1951)。ただし、福岡県東部の方言は、大分や宮崎の方言的特徴と共通するため、豊日方言に分類される。具体的には旧藩領域における豊前国に属した地域がこれに該当する。

日本語の方言区画は近世の旧藩区画に準ずるものが多く、九州地方も例外ではない。肥筑方言は九州西部方言とも呼ばれ、旧藩の区画では、肥前(佐賀県・長崎県)と肥後(熊本県)、筑前・筑後(福岡県)に分類され、長崎県の五島列島や熊本県の天草などの方言も肥筑方言に含まれる。長崎街道が通る三県の方言区画についてはすでに陣内(1997)、小野(1983)、坂口(1998)等による先行研究がある。

福岡県は筑前方言、豊前方言、筑後方言の三区画に分類することができる(陣内 1997)。陣内(1997)によると、「豊前方言は本州方言の影響を直接に受け九州方言色が最も薄いのに対し、筑後方言は肥前、肥後へ連なる九州方言色をよく残している。また筑前方言はこの両者の中間的性格を帯びていると言える。」(p. 2)と述べている。

佐賀県下は小野(1983)によって唐津地区、佐賀西部地区、佐賀東部地区、田代地区の四区画に分けられる案が示されている。小野(1983)は、佐賀県下は、南部の旧佐賀藩、北部の旧唐津藩、東部の旧対馬藩(田代地区)の三つが大きく対立するとしており、さらに南部の旧佐賀藩域は小城郡の西境を以て東西に分かれることを指摘している。

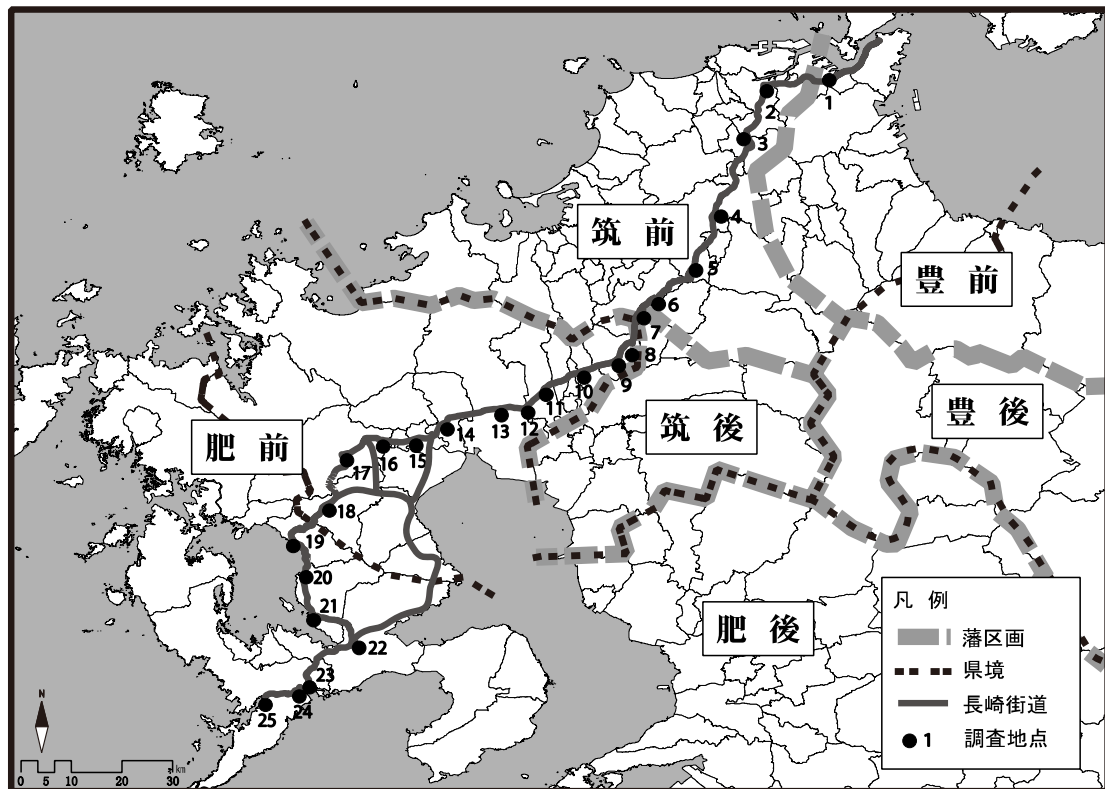
坂口(1998)は、長崎県下を「大局的には四区画、細分すると八区画に分割」(p. 2)されると述べている。長崎県の地勢は、県本土そのものが半島の多い複雑な地形をしており、壱岐・対馬や五島列島のような離島が多く、県面積も限られる。そのなかで方言区画を八区画も有するのは、近世の時代に多くの藩に分かれていたことが要因となっていると考えられている。

7.2.2 長崎街道と方言区画

長崎街道は江戸時代に整備された脇街道の一つで、鎖国政策下、唯一外国との貿易が認められていた長崎から、九州と本州の玄関口である小倉に続く約 228km の街道である。その道程は当時の豊前国、筑前国、肥前国という三国を横断するものであった。詳細を示すと、小倉・黒崎・木屋瀬・飯塚・内野・山家・原田の 6 宿駅は筑前の黒田領、田代は肥前対馬領、轟木より中原・神埼・境原・佐賀・牛津・小田・成瀬・塩田・嬉野までの 10 宿駅は肥前佐賀領、彼杵・松原・大村の 3 宿は肥前大村領、諫早・矢上は肥前佐賀領、日見と長崎は幕府領であったとされる(関家

2003)。

長崎街道は、江戸時代、長崎から江戸につながる主要幹線であり、海外文化を日本全国に伝える重要な役割を果たしてきたⁱⁱ。この街道には小田一嬉野間で2通りのルートがあり、成瀬・塩田を経由するルートのほか、有明海に沿って小田から鹿島（佐賀県鹿島市）を経由して永昌（長崎県諫早市）に至るルートもある。関家（2003）によると、成瀬・塩田を経由するルートは「塩田通り」と呼ばれ、享保十三（1728）年ごろまで長崎街道本来の幹線であったが、塩田一嬉野間を流れる塩田川がしばしば洪水に見舞われたために、延享二（1745）年以降は小田一北方一塚崎を経由して嬉野一彼杵へと出る塚崎ルートに変更されたようである。今回の調査は、後に整備された北方・塚崎を経由するルートを選び、実施した（図7-3）。



- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1: 小倉(福岡県北九州市小倉北区) | 14: 牛津(佐賀県小城市) |
| 2: 黒崎(福岡県北九州市八幡西区) | 15: 小田(佐賀県杵島郡江北町) |
| 3: 木屋瀬(福岡県北九州市八幡西区) | 16: 北方(佐賀県武雄市) |
| 4: 飯塚(福岡県飯塚市) | 17: 塚崎(佐賀県武雄市) |
| 5: 内野(福岡県飯塚市) | 18: 嬉野(佐賀県嬉野市) |
| 6: 山家(福岡県筑紫野市) | 19: 彼杵(長崎県東彼杵郡東彼杵町) |
| 7: 原田(福岡県筑紫野市) | 20: 松原(長崎県大村市) |
| 8: 田代(佐賀県鳥栖市) | 21: 大村(長崎県大村市) |
| 9: 轟木(佐賀県鳥栖市) | 22: 永昌(長崎県諫早市) |
| 10: 中原(佐賀県三養基郡みやき町) | 23: 矢上(長崎県長崎市) |
| 11: 神崎(佐賀県神埼市) | 24: 日見(長崎県長崎市) |
| 12: 境原(佐賀県神埼市) | 25: 長崎(長崎県長崎市) |
| 13: 佐賀(佐賀県佐賀市) | |

図7-3 長崎街道と調査地点および藩区画の位置関係図

7.3 研究方法

7.3.1 分析対象

本章で利用するデータは、著者が2015年8月から同年10月にかけて収集した長崎街道グロットグラム調査の結果である。調査の詳細は前章までに既出であるため、以下に簡潔に示す。

この調査では、小倉（福岡県北九州市）から長崎（長崎県長崎市）にかけての旧宿場町25地点で、各地4世代（若年層：15歳以上29歳以下，中年層：30歳以上49歳以下，壮年層：50歳以上69歳以下，老年層：70歳以上）を対象とした面接調査を実施した。協力が得られた話者の数は25地点，計99名となる。各世代の話者数を示すと，若年層23名，中年層26名，壮年層26名，老年層24名となる。調査地点の地理的な位置関係は図7-3を参照されたい。

7.3.2 分析方法

7.3.2.1 分析データ

本稿で分析対象としたデータは「ものもらい」「塩辛い」などの語彙項目と，アスペクト形式や動詞の活用などを基本とした文法項目，キンサッタ（いらっしゃった），コラシタ（来られた）のような敬語表現に関する項目であり（表7-1），合計37項目・191語形であるⁱⁱⁱ。内訳を示すと，語彙項目は14項目から得られた回答75語形，文法項目は11項目から得られた回答53語形，敬語法に関する項目は12項目から得られた回答63語形である。ただし，敬語に関する項目では特定の語形を使用するか否か（使用する，使用しない）を問うた回答も集計の対象にしており，必ずしも個別の語形ばかりで構成されているわけではないことに留意したい。

表 7-1 集計対象項目一覧

語彙項目		動詞項目		敬語項目	
項目名	質問法	項目名	質問法	項目名	質問法
ものもらい	2	主格ガノ	1	シャル敬語使用	3
塩味が濃い	2	開いている	1	シャル敬語は女性言葉である	3
塩味が薄い	2	開いていた	1	シャル敬語の丁寧さ	3
瘡蓋	2	降っていた	1	シャル敬語は古い表現か	3
柿のへた	2	降っている	1	(友人ニ先生ハ) いないよ	1
亀の甲羅	2	散っている	1	(先生Aに先生B) いないよ	1
神主	2	飲むことができない (状況不可能)	1	(友人に先生は) いなかったよ	1
盗む	3	飲むことができない (能力不可能)	1	(先生Aに先生Bは) いないよ	1
面白い	1	飲むことができない (心的要因)	1	猫にシャル敬語の使用が可能か	1
仲間に入れる	3	動詞仮定形	1	(友人に先輩が) 来たよ	1
ととも	1	動詞命令形	1	(友人に) 入りなさい	1
まずい	1			(見ず知らずの人に) 入りなさい	1
美味しい	1				
怖い	1				

7.3.2.2 数量化Ⅲ類

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	
1	話者	小倉20	小倉40	黒崎20	黒崎40	木屋瀬20	木屋瀬40	飯塚20	飯塚40	内野20	内野30	山家
2	1モ/モライ	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	
3	1メ休*	0	1	0	0	1	1	0	1	0	1	
4	1フ キモノ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
5	1インノクツ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
6	1メトッホ*	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
7	1メモライ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
8	2ショッパ イ	1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	
9	2ショカライ	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	
10	2カライ	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	
11	3ウスイ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
12	3ショアマイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
13	3ミス クサイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
14	3サビ ナイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
15	6カサブ タ	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	
16	6ト-	0	1	0	0	0	1	0	0	1	1	
17	6ツ-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	

図 7-4 数量化Ⅲ類における回答処理方法の例（40代以下の語彙データ）

数量化Ⅲ類は統計学における多変量解析の手法の一つである。設問間やサンプル間の類似度を得点化することで、設問やサンプルの類似度を二次元のグラフ上に表し、データに潜在する特徴の似通ったカテゴリーを明らかにする方法である。

質問票では話者が日常会話で使用する方言語形を求めたため、回答データを1/0型のデータに置き換える必要があった。そこで、Excel を利用し、回答された語形を「使用する」か「使用しない」かを基準とし、1（使用）/0（不使用）のダミー変数に置き換える処理を行った上で、集計結果を便宜的に「40代以下」と「50代以上」のデータに二分し、それぞれに数量化Ⅲ類を適用した。図 7-4 は語彙項目に関する40代以下の話者の回答データをダミー変数に置き換えたものの参考画像である。

得られたサンプルスコア（1軸・2軸）を散布図上に示したものが図 7-5 から図 7-10 となる。散布図上は似た傾向を持つものが近い距離にプロットされるようになっており、原点（0, 0）に近いほど軸の特徴に左右されていない因子であるとみることができる。

7.4 研究結果

7.4.1 語彙

図 7-5・図 7-6 の第 1 軸を見てみると、原点付近を境に大きく二分されている様子を読み取ることができる（図 7-5 および図 7-6：実線 (A)）。両図に共通して、第 2 象限・第 3 象限（図左）にプロットされている話者グループ（小倉・黒崎・木屋瀬・内野・飯塚・原田）はいずれも福岡県内の地点であり、第 1 象限・第 4 象限（図右）には佐賀県と長崎県の地点が混在していることから、語彙の類似性に関しては＜福岡方言＞に対し＜佐賀方言・長崎方言＞で対立している様子が窺える。ただし、＜佐賀方言・長崎方言＞の中にも牛津・小田・北方・塚崎・嬉野がまとまって第 4 象限に偏りをみせており（破線円 (B)）、これらの地域は佐賀西部地区（小野 1983）に該当することから、他の佐賀県・長崎県の地点と比較すると、なんらかの独自性があると読み取ることが可能である。

また、図 7-5・図 7-6 を比較してみると、地域差の中に世代差が存在する様子を窺うことができる。50 代以上のデータについて、第 2 象限から第 3 象限にかけて広くプロットされた福岡県話者群（図 7-6 破線 (C)）が、40 代以下の図 7-5 になる

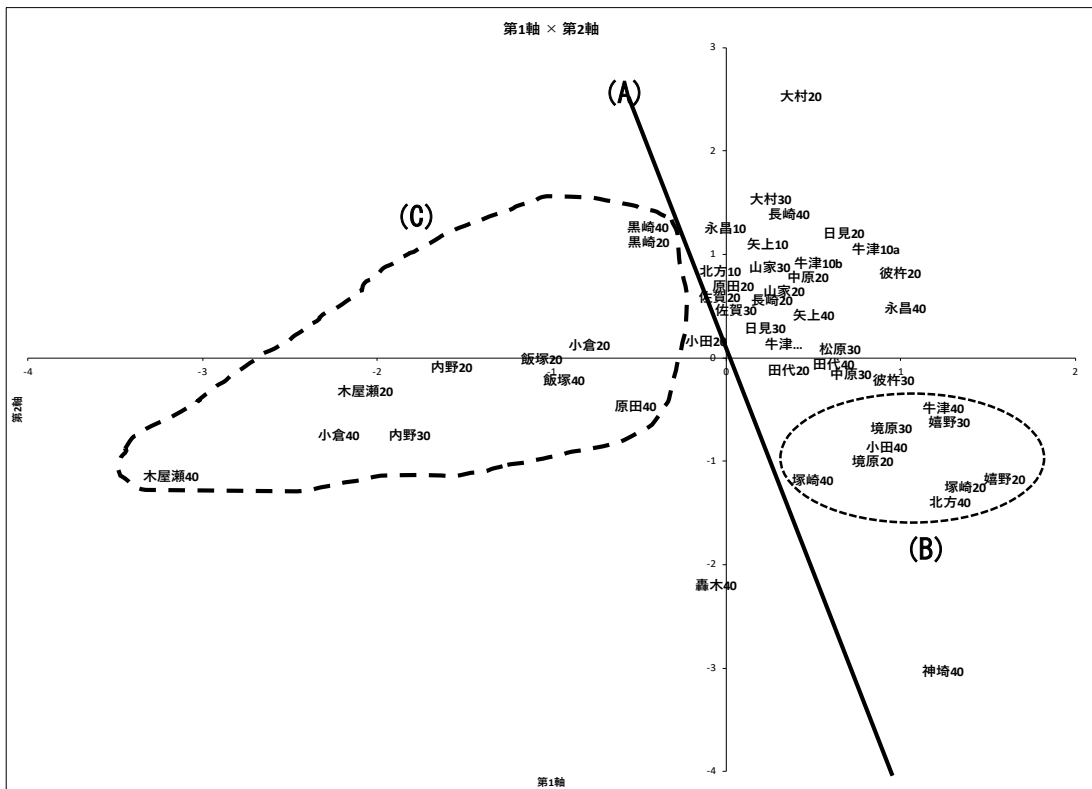


図 7-5 数量化Ⅲ類による話者のパターン分類（語彙，40 代以下）

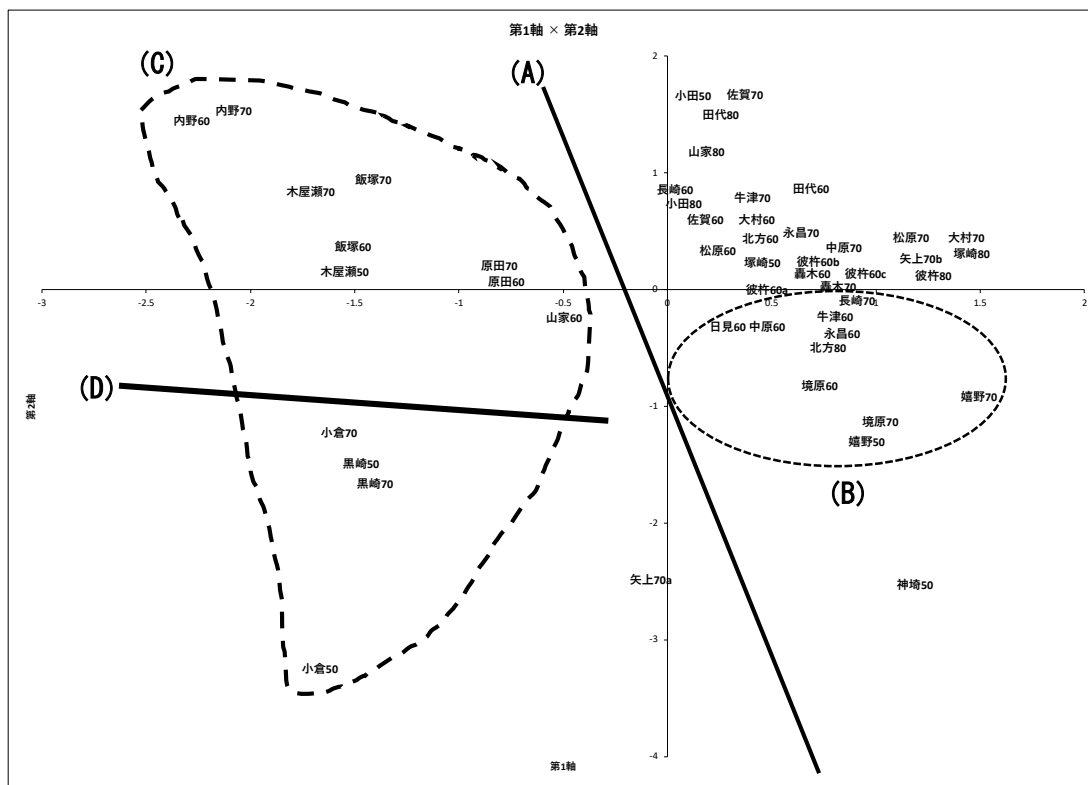


図 7-6 数量化Ⅲ類によるパターン分類（語彙，50代以上）

と第1軸付近に集まっており、拡がりが乏しい（図 7-5 破線(C)）。さらに図 7-6 の第2軸を基準にしてみると、実線(D)を境に福岡方言が二分され、＜筑前方言・筑後方言＞と＜豊前方言＞の対立をみることができるが、40代以下ではこの傾向は確認されない（図 7-5）。

このことから、図 7-5・図 7-6 における破線(C)の拡がりの差は世代間にみられる地域性の有無とみなすことができる。つまり、福岡方言話者のなかでも、50代以上の世代の話者には各地方言の地域性が維持されているのに対し、同地域の40代以下の若い世代では、その細やかな地域差が縮小している状況があることを示唆している。

7.4.2 文法

図 7-7・図 7-8 は、文法に関する回答の数量化Ⅲ類の結果である。語彙の結果と同様、実線(E)を境に分布パターンを大きく二分することが可能である。

文法の類似性についても<福岡方言>に対し、<佐賀方言・長崎方言>という対立の存在が窺える。また、この場合、図 7-7・図 7-8 両図の破線(F)には大半の福岡方言話者が含まれるが、40 代以下の若い世代については木屋瀬・飯塚・内野が実線(E)を境に破線(G)の地点群と対立するように布置されていることが特徴的である(図 7-7 破線(F))。

また、50 代以上では原点 (0, 0) 付近に寄った地域が存在することも注目される(図 7-8 破線(H))。原点付近に集中しているということは、つまり、1 軸・2 軸の要因に左右されていない地域ということである。具体的な地名を見てみると、原田・山家・轟木・中原・松原・永昌など、図 7-1 に示した方言区画の境界地域付近の地点であることがわかる。そこで使用される方言が中間的性格を帯びている地域とみることができ、若い世代にはその傾向はみられない(図 7-7 破線(G))ことも注目される。

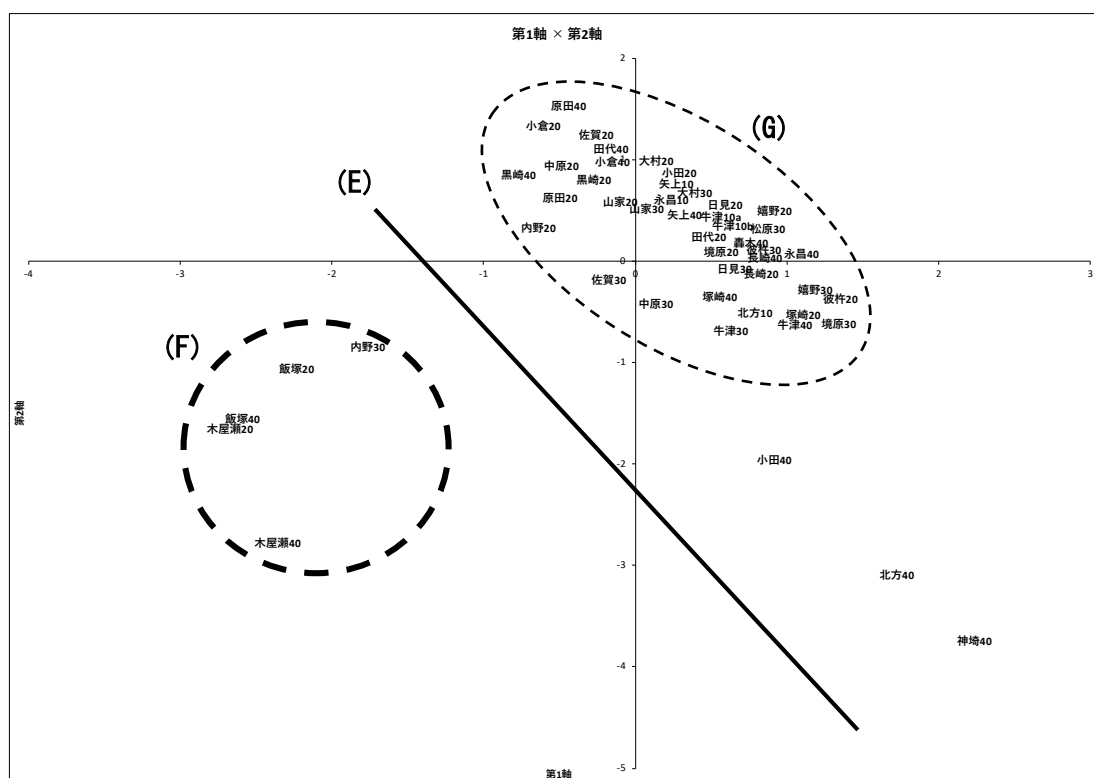


図 7-7 数量化Ⅲ類による話者のパターン分類(文法, 40 歳以下)

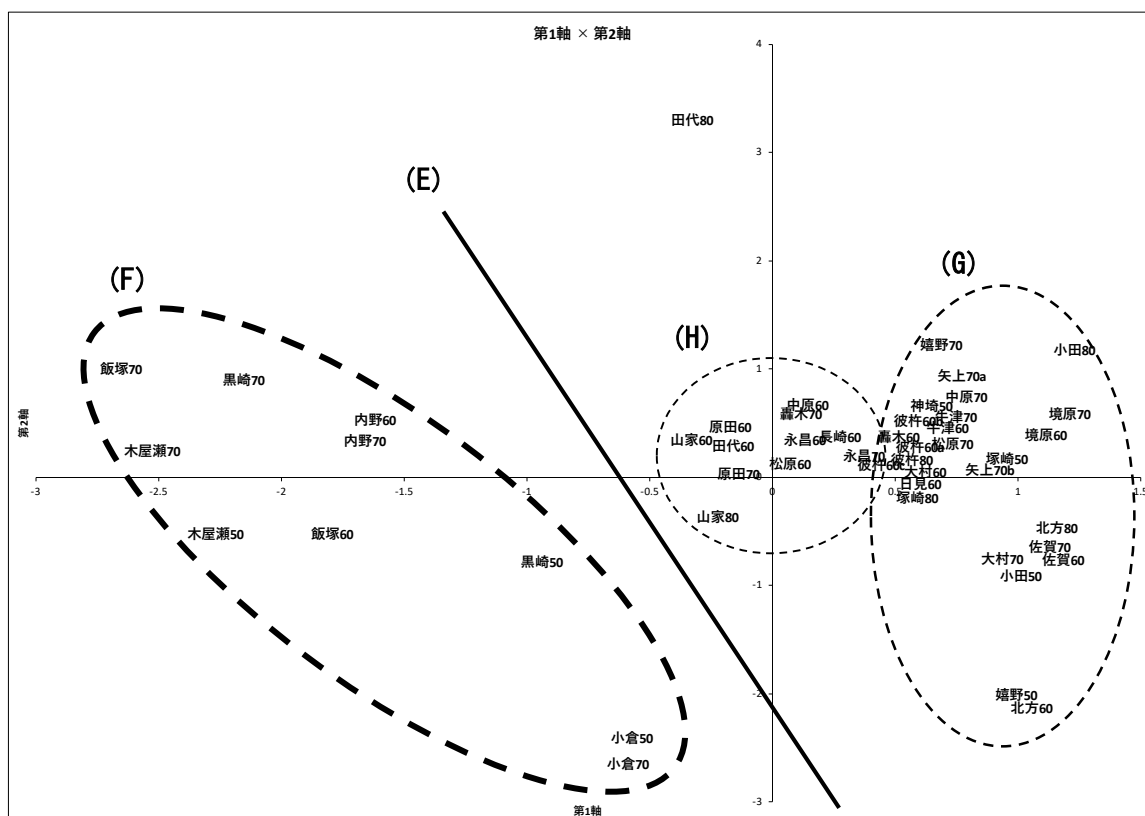


図 7-8 数量化Ⅲ類による話者のパターン分類（文法，50 歳以上）

7.4.3 敬語法

図 7-9・図 7-10 には敬語法に関する集計結果を示した。図 7-9・図 7-10 は語彙・文法における四図と異なり，サンプルが馬蹄形に広く分散しているのが特徴的である（図 7-9・図 7-10 点線(I)）。

両図の破線(K)内には敬語形式の一種であるシャル敬語（イキンシャル(行かれる)，キンシャル(来られる)）の使用が認められ，これに対する破線(J)には敬語形式のラス敬語（イカス(行かれる)，コラス(来られる)）を使用する地域が集中している。この結果は，先行研究に報告される北部九州における敬語形式の分布と合致する（九州方言学会 1969・藤原 1978）。このことから，第 1 軸には使用する方言敬語形式の差異が表れていることが分かる。

また，線で囲まれていない地点については，共通語形の敬語形式の使用（イラッシャル，コラレルなど）が多かったことが影響している。例えば，豊日方言域である小倉・黒崎・木屋瀬（いずれも福岡県）は，従来方言敬語の形式が共通語形と同形であり，バリエーションも少ない地域であるとされてきた（陣内 1997，p. 46）。

九州方言学会（1969）には「豊前および豊前ざかいの筑前」に敬語形式ナハルがみられるとの報告もあるが，今回の調査結果ではこういった方言の敬語形式は確

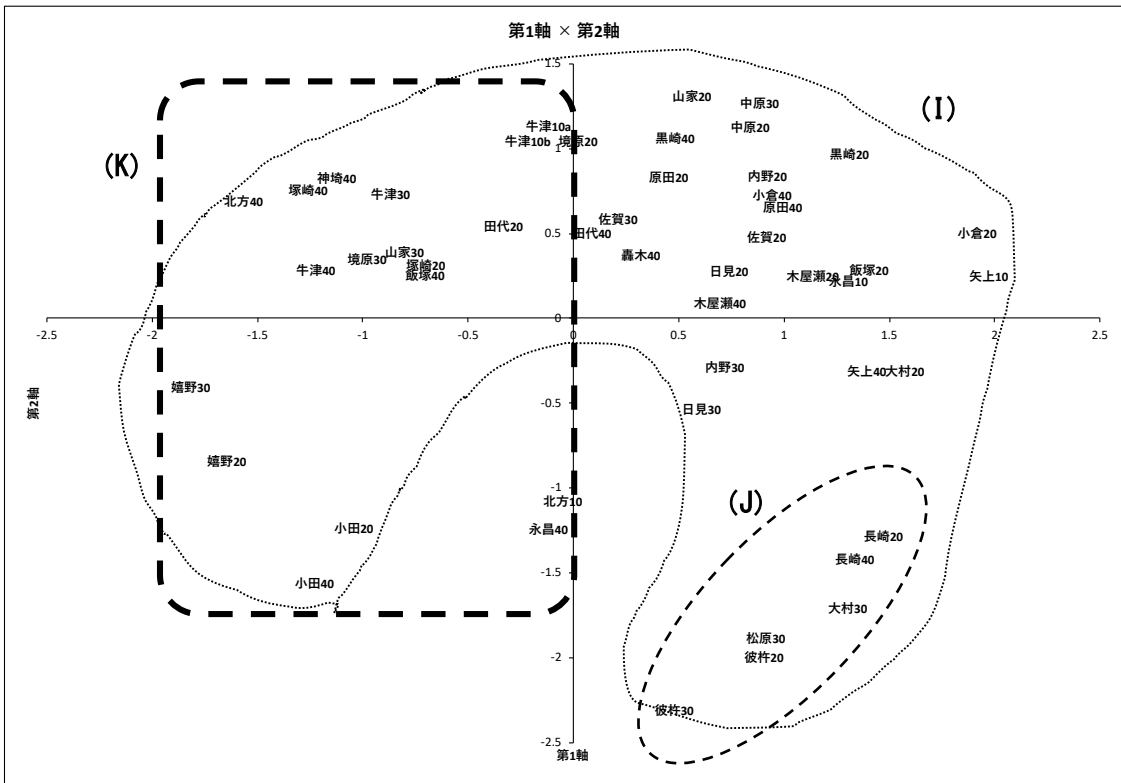


図 7-9 数量化Ⅲ類による話者のパターン分類（敬語法，40歳以下）

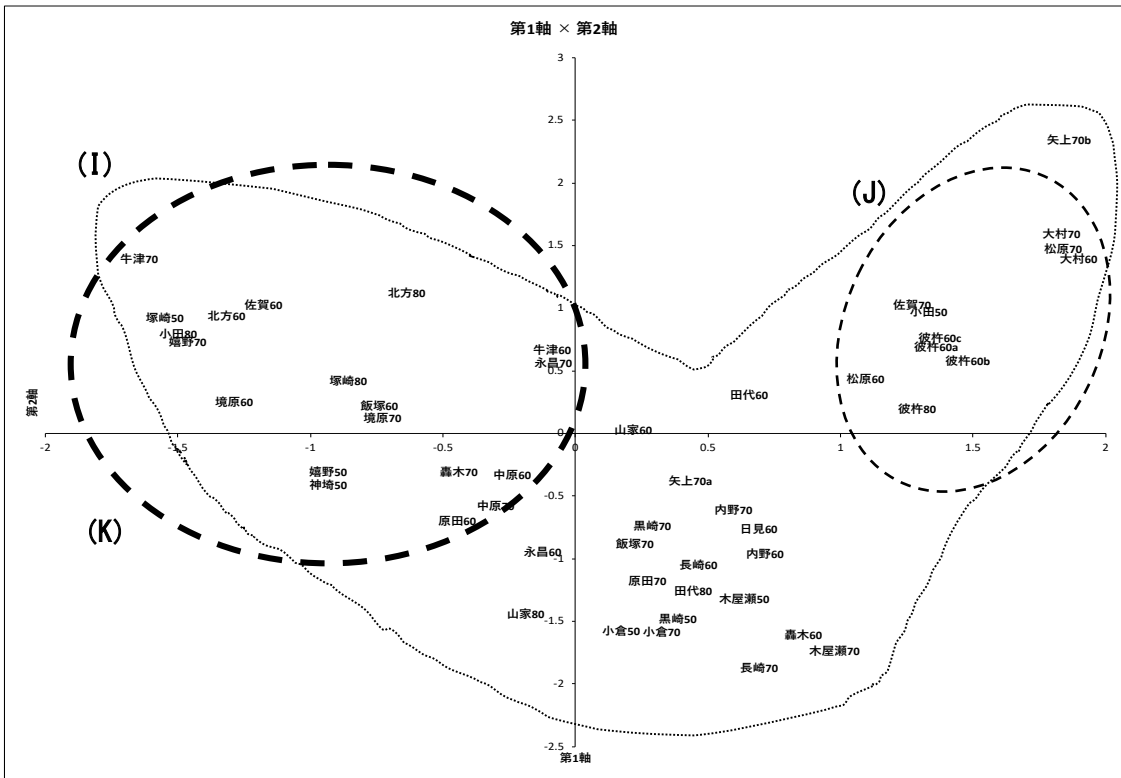


図 7-10 数量化Ⅲ類による話者のパターン分類（敬語法，50歳以上）

認められず、数量化Ⅲ類においても世代を問わず共通語的であるという結果が得られた。馬瀬（1981）以降、日本の方言研究学界ではテレビの影響による方言の共通語化が指摘されてきたが、方言敬語の運用についてもその現象の一端が窺える。

方言敬語に関する項目では、語彙・文法の結果と異なり、馬蹄形の分布を示すという結果が特徴的であった。本来ならば、1軸・2軸の因子に影響を受けた結果が図7-5から図7-8にある直線(A)・(E)で話者分布が大きく二分されることが期待されるのだが、方言敬語の結果(図7-9・図7-10)はそうならなかった。敬語表現という回答の性質上、決まった敬語形式を頻用しない地域や普段使用する敬語形式ではなく共通語形を回答する話者が存在し、これによって破線(K)・(J)の地域の周辺に付置に繋がったものと考えられる。

本来は方言敬語を使用するはずの地点で共通語形が回答された地点(飯塚20, 飯塚70, 佐賀30, 永昌10, 永昌60)については、方言敬語を使用する地域と共通語形の敬語を使用する地域間に存在する中間地域としての敬語体系を有している可能性が推察される。異なる言語体系(A, B)が接触する地域の人々が、語形Aでもなく語形Bでもなく、折衷案的に語形Cを用いるようになる現象は徳川・真田編(1991)にも報告されており、このような現象が飯塚, 佐賀, 永昌の人々の敬語体系にも生じている可能性がある。敬語体系の内容に関する議論については、今回の調査結果からその詳細を検討することは困難であるため、その機会は別稿に譲ることとしたい。

7.5 本章の結論と課題

7.5.1 数量化Ⅲ類の結果に関する考察

長崎街道グロットグラム調査の結果に数量化Ⅲ類を適用し、語彙・文法・敬語法における話者別の回答の傾向を可視化した結果、語彙・文法と敬語法との間で方言区画の様相が異なることが明らかになった。

まず、語彙・文法については<福岡方言>に対して<佐賀方言・長崎方言>という対立が成り立っていることが明らかとなった。従来、九州北部域は、九州方言の中の肥筑方言と呼ばれる方言区画でひとまとめに扱われてきたが(東条編1954・陣内1997ほか)、福岡県と佐賀県・長崎県の間には一つの大きな境界線が存在していることが確認された。特に、文法における福岡県下の話者の地域性は顕著である。木屋瀬・飯塚・内野では、アスペクト形式(イッチョー(行っている), キチョー(来ている))や命令表現(シー, センネ(しろ))において、他地域には見られない回答が集中しており、このような特徴が他地域と切り離される要因となり、差別化につながったと考えられる。

次に、語彙・文法の結果からは若年層の共通語化の進行と、それによる地域差の縮小が窺われた。40代以下の結果において地域性の乏しさが明らかとなり、相対的に九州方言学会（1969）に報告されるような地域特有の語形を回答した50代以上の話者との世代差が浮き彫りとなった。これらは語彙・文法項目において著しい特徴となっている。九州方言色が薄いとされる豊日方言域の地点（小倉・黒崎）や人口移動の要衝である田代・轟木、長崎などの若い世代を中心に、この傾向が顕著であった。このような地域差の縮小現象について、若年層の言語形成にメディアが影響していることが考えられる。テレビ放送が開始された昭和28年以降、都市で使用される言葉が地方で視聴できるようになったことで、各地方言の共通語化が指摘されてきた（馬瀬1981）。九州北部の地域も例外ではなく、若年層を中心に語彙・文法項目を中心に共通語化の現象が起こっているものと考えられる。

これに対し、敬語法では、使用する敬語表現の類似性によって分布が分かれたことが特徴的であった。数量化Ⅲ類の結果に即して推測される九州北部地方における敬語の境界域を図7-11に整理してみると、必ずしも地理的連続性を持たない地域間の類似性が存在しており、敬語体系の分布の複雑さを窺わせる。

仮定的ではあるものの、この複雑な分布の要因としてまずは「佐賀の敬語表現」が挙げられよう。佐賀の敬語表現については、九州方言学会（1969）や小野（1983）によって、隣接する調査地点（神埼・境原や牛津～嬉野）と共通することが報告されている。しかし、若年層において共通語的表現が回答され、老年層で用いられた表現は彼杵など長崎方面でも使用されるラス敬語であったため、結果として、地理的連続性の途切れに繋がってしまった。同一の調査内容であったにも関わらず、回答される内容が周辺地域と異なる結果となった背景には、佐賀において敬語体系の変化が生じている可能性が考えられる。ただし、今回の調査は敬語体系に言及するには調査場面（項目）が限定的であったため、今後この可能性を注視したい。

また、中間地域的性質を持つ地点が存在することも、この分布の遠因となっているだろう。敬語法の結果には世代差があまり見られないことから、世代を超えて敬語表現が受け継がれている状況が窺えるが、その一方で、決まった方言敬語を使用する地域である飯塚や佐賀、永昌の若い世代の話者が、小倉・黒崎・木屋瀬のような中間地域の地点に混ざって分布するなど、図7-9・図7-10内で現れた馬蹄形の分布が目を引く。中間地域であるが故の言語衝突の結果、使用される敬語表現に共通語的表現が浸透しつつあるのかもしれない。

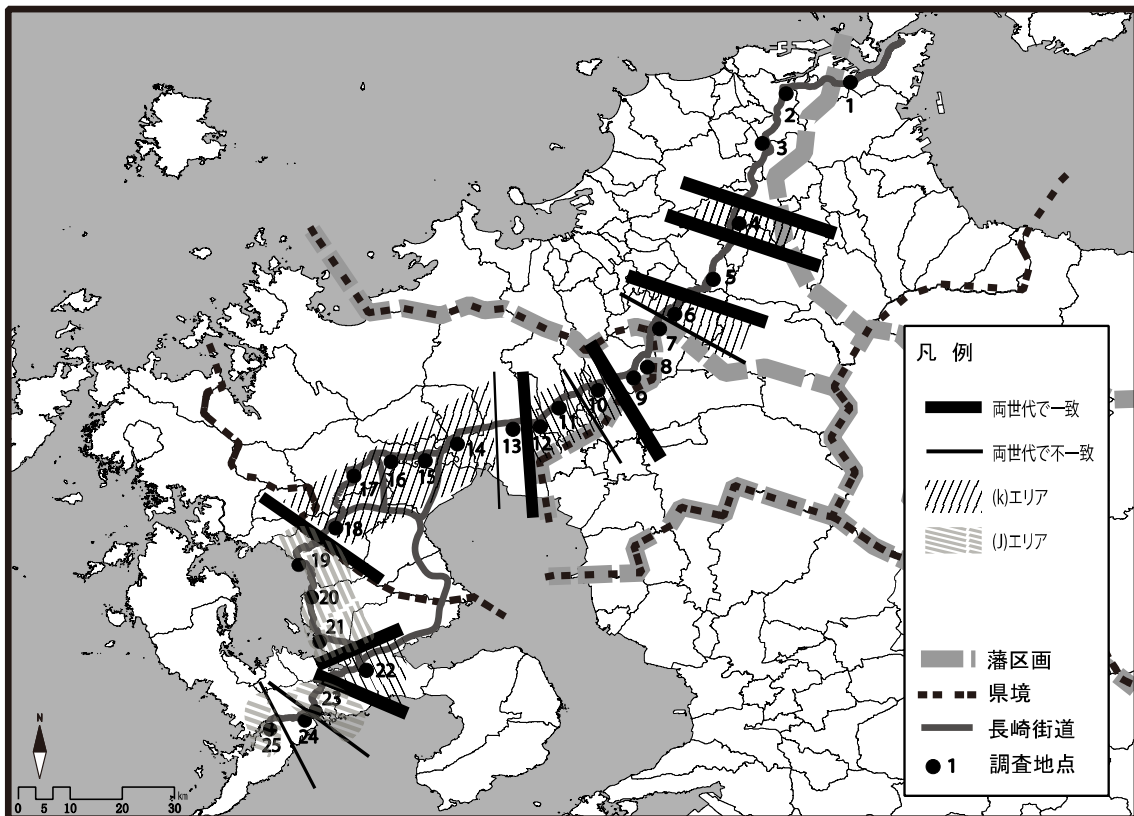


図 7-11 数量化Ⅲ類の結果に基づく敬語体系の境界域

7.5.2 今後の課題

今回の数量化Ⅲ類を適用したデータは限られた項目のみを取り扱ったものであり、今後扱う項目を増やしたり別の項目を分析対象としたりすることによって異なった結果が導き出される可能性は残る。しかしながら、同手法を用いたことにより、定説とされる当該地域の方言区画とは異なる区画を導き出せたことから、一定の有効性を示すことができたものとする。

今後は今回取り扱うことができなかったデータも含めて、より総合的な分析を試みたい。

ⁱ 岸江 (2009) は、従来の大阪府方言区画に関する先行研究を整理したうえで、「大阪府言語地図」のうち、ハル、ヨル、トル等の待遇形式をはじめ、アスペクト形式、文末などの融合現象の使用の有無のほか、語彙形式の使用の有無を含め、大阪府の方言区画において

重要だと判断される要素計 60 項目を選び、数量化Ⅲ類によって大阪府の方言区画について検討を試みた。分析の結果、山本（1982）において北中河内方言に属するとされる寝屋川市や四条畷市などの方言が摂津方言に分類されたり、泉北方言であるはずの堺市方言が摂津・河内方言に位置づけられたりするなどの結果が得られている。

ⁱⁱ 飯塚，内野，山家が位置する福岡県飯塚市（「長崎街道」，発表年不明）によると，江戸時代の鎖国下にあった日本において，長崎街道が江戸幕府の西洋やアジアとの対外交渉の拠点であり，諸大名の参勤交代やオランダ人・中国人の交易，献上品の運搬に重要な役割を果たしたという。

ⁱⁱⁱ これらの調査項目は国立国語研究所編（1968）や九州方言学会（1969）など先行研究で調査されたものを中心に選定されている。

III. 結論

第8章

九州北部地域における方言の動態

8.1 本論のまとめ

以上、九州北部地方において実施した長崎街道グロットグラム調査の結果に基づき、1960-1980年代を中心とした言語地理学的研究の成果との比較を通じて当該地域における言語変異について様々な角度から分析を行った。

第3章では長崎街道グロットグラム調査の結果を概観すべく、語彙項目・文法項目について地理的・世代的分布の現状を俯瞰した。第3章で明らかになったことは、東条編(1954)に提唱される方言区画の枠組みに囚われない方言分布の現状があるということである。地理的分布(地域差)について世代差という視点を掛け合わせるにより、言葉の拡がりや共通語化の様相を多角的に捉え、当該地域における「共通語化」や「地方共通語化」に類する経年変化の状況を指摘した。

第3章で認められた方言の諸相を受けて、第4章・第5章・第6章では九州北部地域における方言敬語に焦点を当てた分析を行った。語彙・文法に係る方言とは異なり、敬語法の地理的・世代的分布は複雑であり、これに焦点を当てた詳細な分析を行うことにより、長崎街道上の方言の動態を浮き彫りにした。

さらに第7章では統計的手法の一つである「林の数量化Ⅲ類」を活用して語彙・文法・敬語法という項目別に解析を試みた。先行研究に述べられる方言区画を整理した上で、グロットグラム調査に基づく長崎街道上の地域における方言区画について再考を試みた。語彙・文法・敬語法の三視点について話者の世代にも注目した分析を行い、三県の言語的類似性に関する関係性を明らかにするだけでなく、方言敬語運用の特異性を指摘した。個別語彙、個別文法レベルで形態的な違いのみを分析するのではなく、語彙・文法・敬語法を包括的に解析したことで、当該地域方言のシステムに存在する差異を見出した。

語彙・文法項目において共通語化が進行する中、福岡県から佐賀県下にかけて行われるシャル敬語は、全世代が使用するという点で特異であると言える。本来、尊敬の意味を表すために用いられていたはずのシャル敬語だが、「親愛語」(岸江1998・辻2009)や対者敬語(丁寧語)的な振る舞いを見せており、こうした方言敬語システムの変容は当該地域に限ったものではないことも予想、期待される。今

後、各地で行われる方言敬語の研究においては、伝統的に行われてきた敬語形式の違いや敬意度の差に着目するだけでなく、地域方言の体系の違いを前提とした様々な視点からのアプローチにより研究が展開されるべきであり、本研究はそうした研究の先駆けとして位置付けることができる。本研究は九州地方における方言敬語研究の進展に資するのみならず、日本諸方言に存する方言敬語の歴史や日本語における敬語運用に一石を投じるものである。

8.2 今後の研究課題及び展望

これまでの言語地理学的研究では、言語地図上に描いた地理的分布を俯瞰することにより、言葉の伝播や言語接触による方言形性の史的展開を読み解いてきた。共時的な方言の地理的分布を言語地図に描き、研究成果を積み重ねてきたことで、半世紀から 100 年近くも前の日本諸方言について、当時行われていた言葉の数々を把握することができる。現代において言語地理学的研究を推進することは、言語地理学的研究が隆盛した 1960 年代当時の研究成果に立ち返り、比較研究を行うことに繋がり、言語地理学的研究の新たな節目を迎えているとも言えよう。

本研究では世代差という社会学的研究の視点を含めることにより、当該地域における方言の動態をより多角的に分析することができた。

これらの研究成果はグロットグラム調査に基づくものであるために、1 地点当たりの話者数が少ないことや、調査地点の広がり在线上に限られてしまうことで課題を抱える一面があるものの、10 代から 80 代の 99 名もの話者により、各地方言の現状が描かれ、浮き彫りになった成果は今後の九州方言の研究に資するものとなった。

重ねて述べることになるが、本研究で採用したグロットグラム調査や言語地理学的研究は言葉の変遷を地理的に捉える点で、言語史的資料価値を有し、見かけ時間上の言語変異を明らかにすることができる。ただし、これらの研究方法のみにとどまるのではなく、記述的研究や、文献・自然談話資料のような方言資料に基づく研究、統計的手法の援用など、多角的な視点からのアプローチを試みることにより、より総合的な視点での方言研究が実現する。本研究の成果を補完し、より一層進展を図るためにも、今後とも言語地理学的研究と社会言語学的研究の相補完的な視点に基づく調査研究を展開したい。

参考文献・参考 URL 一覧

参考文献

- W・A・グロータース(1976)『日本の方言地理学のために』平凡社
- 秋山正次(1981)「九州特有方言分布相と九州方言区画」『佐賀龍谷短期大学紀要』27号, pp.20-34, 九州龍谷短期大学
- 愛宕八郎康隆(1982)「肥前長崎地方の「砂糖味がうすい」の表現法について」『長崎大学教育学部人文科学研究報告』31, pp.1-9, 長崎大学
- 阿部新(2001)「日本における方言調査法」[http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/results/cours\(2001\)/abe_jp.htm](http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/results/cours(2001)/abe_jp.htm), 東京外国語大学
- 安部清哉(2015)「方言区画論と方言境界線と方言圏の比較研究」『人文』13, pp.21-55, 学習院大学
- 石田瑞麿(1997)『例文 仏教語大辞典』小学館
- 井上史雄(1981)「敬語の地理学」『國文學 解釈と教材の研究』26(2), pp.39-47, 學燈社
- 井上史雄(1989)『言葉づかい新風景(敬語と方言)』秋山書店
- 井上史雄(1991)『東海道沿線方言の地域差・年齢差(Qグロットグラム)』東京外国語大学語学研究所
- 井上史雄(2001)『計量的方言区画』明治書院
- 井上史雄(2003)『日本語は年速1キロで動く』講談社現代新書
- 井上史雄(2007)『変わる方言 動く標準語』pp.22-29, 筑摩書房
- 井上史雄(2009)「ことばの伝わる速さ: ガンポのグロットグラムと言語年齢学」『日本語の研究』5, 3, 日本語学会
- 井上史雄(2010)『北陸方言の地理的・年齢的分布(北陸グロットグラム)』平成20年-平成22年度科学研究費補助金基盤研究(C)「北陸新方言の地理的社会的動態の研究」(研究代表者: 井上史雄)研究成果報告書
- 榎垣実(1964)「方言区画論小史」日本方言研究会編『日本の方言区画』東京堂
- 江端義夫(2006)「尊敬敬語法助動詞「～ラレー」の言語地図年代学的研究」広島大学大学院教育学研究科紀要第2部55号
- 大西拓一郎(2013)「言語地理学とは何か」中日理論言語学 国際フォーラム2013(於 同志社大学)発表資料
- 大西拓一郎(2017)「蛇の目と波紋: 野草や小動物の方言を例に」大西拓一郎編『空間と時間の中の方言: ことばの変化は方言地図にどう現れるか』朝倉書店
- 大西拓一郎編(2016)『新日本語地図: 分布図で見渡す方言の世界』朝倉書店
- 岡野信子(1988)『福岡県ことば風土記』葦書房
- 岡野信子編(1984)『下関市北九州市言語地図』梅光女学院大学方言研究会
- 岡野信子編(1987)『福岡県域言語地図』梅光女学院大学方言研究会
- 岡野信子編(1989)『筑後川流域言語地図』梅光女学院大学方言研究会
- 奥村三雄編(1989)『九州方言の史的研究』桜楓社
- 小田匡保(2003)「日本における仏教諸宗派の分布: 仏教地域区分図作成の試み」『駒澤地理』39, pp.37-58, 駒澤大学
- 小野志真男(1983)「佐賀県の方言」『講座方言学9 九州地方の方言』国書刊行会
- 金沢裕之(1991)「言語意識と方言」徳川宗賢, 真田信治編『新・方言学を学ぶ人のために』pp.117-131, 世界思想社
- 蒲谷宏・金東奎・高木美嘉(2009)『敬語表現ハンドブック』大修館書店
- 榎まちづくり飯塚(詳細不明)「長崎街道と筑前六宿」『内野宿～飯塚宿 長崎街道を歩く』観光パンフレット飯塚観光協会
- 鎌田良二(1981)「関西に於ける地方共通語化について」『国語学』第126集, pp.1-12, 日本語学会

- 上村孝二(1973)「九州方言の諸相」『鹿児島短大研究紀要』12, 鹿児島県立短期大学
- 上村孝二(1983)「1 九州方言の概説」『講座方言学9:九州地方の方言』pp.1-28, 国書刊行会
- 上村孝二(1998)『九州方言・南島方言の研究』秋山書店
- 神部宏泰(1980)「九州西部方言の形容語—カ語尾形容詞を中心に—」『国語教育研究』26 上号, pp.536-546, 広島大学教育学部光葉会
- 神部宏泰(1992)『九州方言の表現論的研究』和泉書院
- 菊地康人(1997)『敬語』講談社学術文庫
- 岸江信介(1998)「京阪方言における親愛表現構造の枠組み」『日本語科学』3, pp.23-46, 国立国語研究所
- 岸江信介(2009)「2.大阪語とは何か:大阪語の歴史的背景と方言区画」真田信治監修, 岸江信介・中井精一・鳥谷善史編著『大阪のことば地図』和泉書院
- 木部暢子著, 平山輝夫編者代表(1997)『日本のことばシリーズ46 鹿児島県のことば』明治書院
- 木部暢子(2002)平成13年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(C)(1))「データベースによる音声言語地図の開発・作成に関する研究」九州方言地図集(『九州方言の基礎的研究』より)研究成果報告書 No.1(研究課題番号 13610663)木部暢子
- 九州方言学会(1969)『九州方言の基礎的研究』風間書房
- 桑原ちひろ(2015)「嬉野方言の待遇表現について—「～ンシャル」形式を中心として—」九州大学文学部人文学科言語学・応用言語学専門分野卒業研究論文
- 国語調査委員会(1905)『音韻分布図』国書刊行会
- 国語調査委員会(1906)『口語法分布図』国書刊行会
- 国立国語研究所編(1966-1974)『日本言語地図』全6巻, 大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編(1989-2006)『方言文法全国地図』全6巻, 財務省印刷局
- 小林隆・篠崎晃一編(2007)『ガイドブック方言調査』ひつじ書房
- 坂口至(1998)「[総論]「位置と区画」平山輝男編者代表『日本のことばシリーズ42 長崎県のことば』明治書院
- 佐藤亮一(2000)「方言の調査法に関する一考察」『玉藻』36巻, フェリス女学院大学国分学会, pp.216-225
- 佐藤亮一監修, 小学館辞典編集部編(2002)『お国ことばを知る 方言の地図帳』小学館
- 佐藤亮一監修, 小学館辞典編集部編(2004)『標準語引き 日本方言辞典』小学館
- 真田信治(1990)『地域言語の社会言語学的研究』和泉書院
- 真田信治(2001)『標準語の成立事情』PHP 研究所
- 真田信治編著(1998)『九州におけるネオ方言の実態』平成7年-平成9年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1)「西日本におけるネオ方言の実態に関する調査研究」研究成果報告書
- 塩川奈々美(2014)「筑豊地区における方言敬語の記述的研究」徳島大学総合科学部卒業研究
- 塩川奈々美(2015)「談話資料にみる飯塚市方言のシャル敬語」第157回変異理論研究会発表資料
- 塩川奈々美(2016)「北部九州における言語変異:長崎街道グロットグラム調査を通じて」徳島大学大学院総合科学教育部修士論文
- 志津田藤四郎(1970)『佐賀の方言』上巻・体言編佐賀新聞社(第2版1998)
- 志津田藤四郎(1971a)『佐賀の方言』中巻, 佐賀新聞社(第二版1999)
- 志津田藤四郎(1971b)『佐賀の方言』下巻, 佐賀新聞社(第2版2000)
- 柴田武(1969)『言語地理学の方法』筑摩書房
- 柴田武(1965)「方言の消長」(日本語の歴史6 新しい国語への歩み)平凡社
- 清水勇吉編(2015)『九州言語地図:簡易版』徳島大学日本語学研究室
- ジョアン・ロドリゲス原著, 土居忠生訳註(1955)『日本大文典』三省堂
- 尚学図書(1989)『日本方言大辞典(全三巻揃)』小学館
- 申蓮花(2006)『日本の家父長的家制度について—農村における「家」の諸関係を中心に—』『地域政策研究』第8巻, 第4号, pp.99-104, 高崎経済大学地域政策学会

- 陣内正敬(1996)『地域語の生態シリーズ 地方中核都市方言の行方—九州』 pp.93-152, おうふう
- 陣内正敬(1997)「総論」「位置と区画」「方言の特色」平山輝男編者代表『日本のことばシリーズ 40 福岡県のことば』 明治書院
- 住田幾子(1986)「肥筑方言に見られる心情訴え文について」『日本文学研究』 22, pp.1-10, 梅光女学院大学日本文学会
- 関家敏正(2003)「I 長崎街道を歩く」長野暹編『佐賀・島原と長崎街道』 pp.2-55, 吉川弘文館
- 滝浦真人(2008)『ポライトネス入門』 研究社
- 竹田晃子(2015)「国語調査委員会による音韻口語法取調の現代的価値：岩手県の第二次取調稿本の分析を事例として」『日本語の研究』 第 11 巻, 2 号, 日本語学会
- 多米淑人・吉田純一(2007)「若狭の神社にみられる拝所の建築的研究—付設型拝所の建築形式—」『福井工業大学研究紀要』 第 37 号, pp.25-32, 福井工業大学
- 辻加代子・井上史雄・柳村裕(2016)「岡崎における第三者敬語の位置づけ：「第三者尊敬表現」, 「第三者謙讓表現」各場面のデータを中心に」『国立国語研究所論集』 11, 147-166, 国立国語研究所
- 辻加代子(2009)『「ハル」敬語考：京都語の社会言語史』 ひつじ書房
- 都染直也編(2002)『兵庫県下グロットグラム集I：JR 沿線篇(1)』 甲南大学方言研究会
- 土井忠生・森田武・長南実編訳(1980)『邦訳 日葡辞書』 岩波書店
- 東条操(1927)『国語の方言区画』 育英書院
- 東条操(1949)『方言の研究』 刀江書院
- 東条操(1958)「方言研究の歩み：国語調査委員会と東京方言学会と雑誌『方言』『国語学』 35(徳川宗賢編(1996)『東条操著作集 第 5 巻』 ゆまに書房, pp.85-113 に所収)
- 東条操監修, 日本方言研究会編(1964)『日本の方言区画』 東京堂
- 東条操編(1951)『全国方言辞典』 東京堂出版
- 東条操編(1954)『日本方言学』 吉川弘文館
- 徳川宗賢・真田信治編(1991)『新・方言学を学ぶ人のために』 世界思想社
- 徳川宗賢(1959)「「カマキリ」の方言分布を解釈する—糸魚川・青海方言調査報告 7—」 国立国語研究所編『ことばの研究I』 pp.287-302 秀英出版
- 徳川宗賢(1993)「第 5 章 地域差と年齢差—新潟県糸魚川市早川谷における調査から—」『方言地理学の展開』 pp.313-376, ひつじ書房
- 鳥谷善史(2009)「項目 045 麦粒腫(ものもらい)」真田信治監修, 岸江信介・中井精一・鳥谷善史編著『大阪のことば地図』 pp.191-193, 和泉書院
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2000-2001)『日本国語大辞典 第二版』 全 13 巻小学館
- 日本方言研究会編(2005)『20 世紀方言研究の軌跡—文献総目録—』 国書刊行会
- 橋口満(1987)『鹿児島県方言辞典』 桜楓社
- 原田章之進(1979)『宮崎県方言辞典』 風間書房
- 原田章之進(1993)『長崎県方言辞典』 風間書房
- 原田種夫・黒木淳吉・福島次郎・志津田藤四郎・小郷穆子・田栗奎作・夏目漠・福田百合子(1982)『九州方言考：ことばの系譜』 読売新聞社
- 半沢康(2017)「グロットグラム調査データの実時間比較」大西拓一郎編『空間と時間の中の方言：ことばの変化は方言地図にどう現れるか』 朝倉書店
- 平山輝男編者代表(1993)『現代日本語方言大辞典』 明治書院
- 平山輝男編(1997)『日本のことばシリーズ 40 福岡県のことば』 明治書院
- 福岡県飯塚市(詳細不明)「長崎街道」『福岡県飯塚市長崎街道 内野宿歴史の道百選冷水峠』 内野宿長崎屋
- 福山裕(1981)『佐賀東部方言(みねことば)』 佐賀印刷社
- 藤田勝良(2003)「総論」平山輝男編者代表『日本のことばシリーズ 41 佐賀県のことば』 明治書院
- 藤原与一(1955)「「入らっシャル」などの「～シャル」(「～サッシャル」)敬語法について」『国文学攷』 14, 1-16, 広島

大学国語国文学会

- 藤原与一, 広島方言研究所著(1974)『瀬戸内海言語図巻』(上巻・下巻)東京大学出版会
- 藤原与一(1978)『昭和日本語方言の総合的研究 第一巻方言敬語法の研究』春陽堂
- 藤原与一(1990)『中国四国近畿九州方言状態の方言地理学的研究』和泉書院
- 藤原与一(1997)『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—』東京堂出版
- 藤原与一(1997a)『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—〈上巻〉』東京堂出版
- 藤原与一(1997b)『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—〈中巻〉』東京堂出版
- 藤原与一(1997c)『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—〈下巻〉』東京堂出版
- 藤原与一(2000)『続昭和(→平成)日本語方言の総合的研究第五巻 日本語方言文法』武蔵野書院
- 馬瀬良雄(1981)「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」『国語学』125, p.1-19, 国語学会
- 馬瀬良雄(1992)『言語地理学研究』桜楓社
- 松岡静雄編(1930)『日本古語大辞典』p.466, 刀江書院
- 松尾昌英(1997)『伊能大図による「筑前の長崎街道」の追跡 筑前の長崎街道改訂版』みき書房
- 松田美香(2017)「九州地方の可能表現」大西拓一郎編『空間と時間の中の方言：ことばの変化は方言地図にどう現れるか』朝倉書店
- 南雅彦(2013)「地域方言における変異形の併存状況：同化や混交形に見られる単純化の方向」関西学院大学『総合政策研究』44号, pp.53-83, 関西学院大学
- 柳田國男(1930)『蝸牛考』刀江書院

参考URL

※()の年月日は最終アクセス日を意味する。

- 「塩田と近年の製塩の歴史」<http://www.geocities.jp/shimizuke1955/304salt3.html> (2016.1.29)
- 「北九州市小倉北区「小倉城と小倉藩」」http://www.city.kitakyushu.lg.jp/kokurakita/file_0082.html (2016.1.7)
- 「北九州市小倉北区「小倉陸軍造兵廠」」http://www.city.kitakyushu.lg.jp/kokurakita/file_0083.html (2016.1.7)
- 「これまでの刊行物：日本言語地図」https://www2.ninjal.ac.jp/past-publications/publication/catalogue/laj_map/ (2021.12.24)
- 「こんなコトバがありました」「広島大学方言研究会」
<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Labo/2651/syokai.htm> (2016.1.26)
- 「佐賀県公式ホームページ」<https://www.pref.saga.lg.jp/web/kankou/kb-kankou/syokai.html> (2016.1.22)
- 「佐賀県の特徴」http://www.pref.saga.lg.jp/web/kensei/_1363/sougoukeikaku2011/jidaino_tyouryuu/2.html (2016.1.22)
- 「さが統計情報館」https://www.pref.saga.lg.jp/web/kensei/_1366/toukei/_15224/_15230/_79695.html (2016.1.22)
- 「塩風土記」http://www.shiojigyo.com/a040encyclopedia/encyclopedia4/encyclopedia4_2area/ (2016.1.29)
- 「曹洞宗 公式サイト・曹洞禅ネット」<http://www.sotozen-net.or.jp/sotofaq/faq-1-4> (2016.1.17)
- 「総務省「日本標準職業分類(平成21年12月統計基準設定)分類項目名」」
http://www.soumu.go.jp/toukei_toukatsu/index/scido/shokgyou/kou_h21.htm (2015.12.30)
- 「都道府県データランキング「気象データ」」<http://uub.jp/pdr/g/w.html> (2016.1.22)
- 「長崎県公式ホームページ「ながさきめぐり」」<https://www.pref.nagasaki.jp/meguri/> (2016.1.22)
- 「長崎県立高等学校の通学区域に関する規則(昭和31年1月17日長崎県教育委員会規則第1号)」
<https://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2014/09/1411617540.pdf> (2016.1.8)
- 「長崎県のすがた」<https://www.pref.nagasaki.jp/sugata/> (2016.1.22)

- 「日蓮宗長唱山大立寺」 <http://dairyuji.net/column.html> (2016.1.17)
- 「日本経済新聞, 井上順孝監修 「正月に知っておきたい神社の「常識」」
http://www.nikkei.com/article/DGXNASFK2700A_X21C11A2000000/?df=3 (2016.1.26)
- 『日本言語地図』地図画像: Linguistic Atlas of Japan(PDF) https://mmsrv.ninjal.ac.jp/laj_map/ (2021.12.24)
- 『日本言語地図』データベース: Linguistic Atlas of Japan Database (LAJDB) <https://www.lajdb.org/TOP.html> (2021.12.24)
- 「日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵]」 <https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/> (2021.12.24)
- 「平高史也(2006) 「言語意識と言語イメージ」」 http://gc.sfc.keio.ac.jp/class/2006_14621/slides/11/3.html (2016.1.5)
- 「福岡県公式ホームページ」 <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/gaiyou-sugata.html> (2016.1.22)
- 「方言文法全国地図 PDF 版ダウンロード」 https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html (2021.12.24)
- 「龍光山正寶院」 <http://tobifudo.jp/newmon/name/osyo.html> (2016.1.17)
- 「令和2年国勢調査 佐賀県の人口概要(速報): 総務省による「人口速報集計」の結果公表より」
https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00380928/3_80928_209774_up_3i72gogi.pdf (2022.1.9)
- 「令和2年国勢調査 人口等基本集計結果 結果の要約(こついで)」
<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/press-release/2020census-kakuhou.html> (2022.1.9)
- 「令和2年国勢調査人口速報集計結果(長崎県)(こついで)」
<https://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2021/07/1626749474.pdf> (2022.1.9)

謝辞

本研究の実施ならびに本論文の作成にあたりましては、多くの方々のご支援とご指導を賜りました。この場をお借りしてお世話になった皆様方に感謝の意を申し上げます。

はじめに、当初より指導教員としてご指導賜りました奈良大学文学部の岸江信介先生に心より感謝申し上げます。岸江先生には、学部生として徳島大学日本語学研究室に所属してから、大学院に進学し、博論を提出するまでの10年間にわたり、ご指導を賜りました。奈良大学へお移りになってからも、論文提出にあたり不安や心配の気持ちで行き詰まっている筆者を前向きな言葉で勇気づけ、激励のお言葉をいただき、心強く支えてくださいました。

同じく学部生時代から10年間、副指導教員として、岸江信介先生の退職後は指導教員として、寄り添い、温かく見守ってくださいました徳島大学社会産業理工学研究部の依岡隆児先生に心よりお礼申し上げます。研究室にお伺いした時はいつも優しく迎えてくださり、苦悩する筆者を穏やかに導いていただきました。また、博士後期課程での副指導教員として、徳島大学社会産業理工学研究部准教授の掛井秀一先生、田口太郎先生、関西大学に移られた土屋敦先生には、大変お忙しい中でも論文審査の労をお引き受けいただき、時には論文提出にむけて励ましのお言葉をいただきました。慣れない環境で働きながら、また不安な気持ちを抱えながらの論文執筆は想像以上に苦しい期間となりましたが、不出来な筆者を信頼し、最後まで取り組むチャンスをお恵みくださいました。本当にありがとうございました。

博士論文提出に至るまでの間、学内外の多くの先生方、職場の皆様、先輩や学友の皆様に見守っていただき、多くのご声援とご支援を賜りました。特に、同じ日本語学研究室出身で神戸大学バリュースクールの清水勇吉先輩には、お仕事でご多忙な中、論文を読み、校正にご協力いただいたり、励ましの言葉をいただいたりしました。また、社会人の柘田綾子さん、隆さんご夫妻には、“徳島の両親”として、筆者の生活に寄り添い、細やかなお心遣いを賜りました。その他にも多くの方々から応援のお言葉をいただき、見守っていただき、心が折れそうな気持ちになるたびに、皆様のお顔を思い出し、自身を奮起させることができました。

また、方言調査にご協力を賜りました公民館や図書館、美術館などを含め各市町村教育委員会の職員の皆様、地域の自治会の皆様、方言や長崎街道、山笠などにまつわる地元の文化保存の会の皆様、調査でお世話になった全ての皆様に深謝致します。徳島から来た筆者を温かくお迎えくださり、調査にも手厚いご協力を賜りました。次の調査地点まで車で送っていただいた時の青々と茂る彼岸茶の茶畑の景色や、調査日当日にヨット体験をさせていただいたこと、お食事をふるまってくださったり、知り合い伝いに話者をご紹介いただいたりしましたこと、調査時の思い出は今でも鮮明に覚えています。年賀状にて交流させていただいている話者様もい

らっしゃり、多くの方のご縁に支えられた研究活動でした。改めて、御礼申し上げます。

筆者の研究活動は、日本学術振興会特別研究員奨励費（DC1）「九州北部地方における地域言語の動態に関する研究」（課題番号：16J07053）の助成を受けた研究となります。調査活動だけでなく、国内外各地での学会発表など、本研究費の支援なしにはこれまでの研究活動を遂行することはできませんでした。貴重な機会をいただき、ご支援いただきましたこと、心より御礼申し上げます。

最後に、筆者の博士課程進学を許し、遠方より筆者の生活を応援してくれた家族に心からの感謝を伝えたいと思います。私がこれまで徳島大学に在籍し、好きなことを学び、活動に専念することができたのも、両親や兄弟の理解と支えがあったからにほかなりません。たまにしか連絡をよこさない不義理な娘ですが、連絡したときや帰省したときには体調を心配したり、好きな料理をふるまってくれたりして、いつも気にかけてくれました。勤務しながらの論文執筆に取り組む中で、孤独な闘いに打ちひしがれていた時期もありましたが、いつも厳しい母が「これまで頑張ってきたんだから、無理せず、いつでも帰ってきてもいいよ。」と一言言ってくれたことで、帰る場所がある有難みを感じ、これからもまだ頑張っていけると前向きな気持ちになりました。

多くの方々に支えられて、博士論文という形で、本研究に一区切りをつけることができました。改めて心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2022年1月10日

塩川 奈々美